テイルズオブシンフォニア　ラタトスクの騎士と『死』を断定する少女

自殺志願

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テイルズオブシンフォニア　ラタトスクの騎士と『死』を断定する少女

【Ｎコード】
Ｎ１１０２Ｐ

【作者名】
自殺志願

【あらすじ】
魔王を倒し平穏な日常を送って行った沙耶たちに突然世界の管理者から世界を救ってほしいと別の世界に飛ばされてしまう。
エルーたちと出会い成長したがまだまだ未熟な心を持つ沙耶が天使の少女と出会い、成長していく物語です。この作品は『死』を断定する少女の続編となる作品です。前作を読まないと分からないところが多いので前作を読んでから読むことをお勧めしますが前作を読むことがめんどくさくこの作品から読みたいと言う人はおおまかな

あらすじと前作終了時のキャラ紹介がありますので読めないということはないと思います。
ちなみにエミルやマルタ、ラタトスクで登場するキャラクターはほとんど活躍しません。

あらすじ

前作を読むのがめんどくさいという人がいましたら前作をおおまかに説明します。

ブロローグ

本作の主人公兼ヒロイン？である神凪沙耶（ほとんどはサヤ・カミナギと書いてあります。）は子供のころいじめや虐待を受け、命の危機に達した時沙耶は自分の力を自覚（覚醒）し親戚の叔父と叔母を殺しますが、証拠も何もないので沙耶は施設に入れられ中学卒業と同時にバイトを始め自立します。
それからしばらく経ったある日一面雪で覆われた場所に行きつき前作が始まります。

第一章　旅立ち編

第一章では本作のヒロインであるエルー・ツェッティと出会い、エルーの護衛を引き受けエルーの御屋敷を目指しながらエルーとの交友を深めていきます。
そしてここで追われていたティア・ノートを助け、旅についてきます。

第二章　リゼン編

エルーを無事に送り届け、エルーの両親の頼みと初めての友達を守る為に同じ学園に通うことを決意し、その夜エルーの父のもとに脅

迫状が届いていることを知ります。
そして黒幕である魔王の策略に翻弄されながらも最悪の事態だけは回避することに成功します。
事件終了後、エルーが沙耶の隣に立つために沙耶に戦闘訓練を頼み元々あった才能が開花しメキメキと実力をつけ学園編に続きます。

第三章　学園編上

ルクセント学園に入学した沙耶たちは入学時の実力測定で総合科でありながら1位、2位と好成績を叩き出し学園と生徒会と全面衝突を繰り広げ勝利を収めます。
この時エルーが沙耶を口説き落とし、ティアが友達として沙耶に認められます。
そして最後のメインキャラクターであるレイン・シーファが登場し新入生でありながら生徒会の役員を倒す実力を持った沙耶たちに強くして欲しいと申し出ます。

第四章　学園編下

学園祭が迫り再び魔王の魔の手が襲いかかり学園を巻き込んだ戦いが起きます。
沙耶たちは学園と協力し魔王の目的を阻止しようとしますが、再び魔王の策略に嵌ってしまい魔王の目的であるクリスタルを破壊されてしまいます。
この時ティアがレインとくっつきます。

第五章　カルーン編

ついに暗躍していた魔王が姿を現し、3大国の1つであるカルーン

を侵略し始めます。
沙耶たちは今度こそ決着をつける為カルーンへ渡り魔王と対峙し、４人の力を合わせ魔王を倒し、沙耶をこの世界に呼んだ世界の管理者より沙耶の力の秘密が語られます。
ここで本編が終了し残りはその後の世界の情勢や沙耶たちの人間関係に関するものです。
そして、世界の管理者が他の世界の管理者から頼まれたということで沙耶たちをその世界に飛ばすことで前作は終了しこの作品が始まります。

見どころ

この作品は認識さえできれば例外なく死を与えることができる力を持つ沙耶を前に決して姿を見せず暗躍する魔王との頭脳戦？が見どころの１つです。

そして私が１番力を入れたところは沙耶たちの成長です。
幼少期の間地獄のような環境で暮らし歪んだ沙耶。
公爵家の娘であることから周りが自分を利用しようとするものばかりでありながらも沙耶を守りたい一心で強くなろうとするエルー。
自分の持つ特異体質のせいで親から売られ人を信用しなくなったティア。
生まれた家が一族のトップであることから期待を一身に背負い、自分の望みが分からなくなってしまったレイン。
それぞれが心に問題を抱えながらもお互いに励まし合い乗り越えていくまでの葛藤が一番の見どころだと思っています。

キャラクター紹介

神凪沙耶（かみなぎさや）

性別　女

年齢　１５歳

身長　１５０ｃｍ

体重　？？？

外見　イメージ的にはひ〇らしのにぱー☆とか言う腹黒狸。

性格

今の世界で王族や貴族などという身分の高い者たちと交渉や腹の探り合いをしていたので、口調は高圧的、しかしエルーにだけは普通。身内に危害を加えようものなら世界を敵に回しても殺す程に容赦はなく、身内に対しては厳しくなれない。

能力

死の宣告

あらゆるものに死を与えることができる。

射程距離などはなく沙耶が認識できさえすればどんなものでも殺すことができる。

沙耶は自身の時の流れを殺しており、当時の体から時間が流れず固定されている。

故に全力で走っても全然疲れない。例えば何か食べても飲み込んで

しまえば消えてしまう。
また、概念すら殺すことができる。例えば剣で斬ろうとした時その剣の”斬る”という概念を殺してしまえば斬ることは不可能になる。この能力で自身を殺すことはできず、また固定されているので、実質沙耶は不老不死。
しかし、この能力は手加減は一切できず殺すことしかできない。

エルー・ツェッティ

性別　女

年齢　１６歳

身長　１６０ｃｍ

体重　？？？

外見　某運命に出でくる、切れると髪が白くなり黒い笑みを浮かべる人

性格
沙耶と出会うまでは周りには自分を利用しようとする者ばかりで内気だったが、同年代の沙耶と知り合ったことから自分を表に出すようになり、沙耶を守りたいという一心で強くなった。
今では世界を救った英雄の１人。
独占欲が強く沙耶が身内以外と仲良くしているとすぐに嫉妬する。
また沙耶と付き合い始めた時に沙耶と同じように時間の流れを殺し固定されているため不老不死。

ティア・ノート

性別　女

年齢　１５歳

身長　１６３ｃｍ

体重　？？？

イメージ　まじこ〇のワン子

性格

何事も深く考えないタイプ。
ただし、身内に害をなすものには結構容赦ない。
他人を信用できなかったが沙耶たちのおかげで少しはましになっている。
手先が器用で魔具に関しての知識が豊富なので魔具作成を趣味にしている。
あくまでも趣味なので専門家と比べると見劣りするが学生レベルだと最高レベル。

能力　炎の支配者

炎なら相手が放った魔法でもコントロールできる。
最高では精霊魔法でさえもコントロールすることができるが、眷族ではなく突然変異型なので精霊魔法は使えない。

レイン・シーファ

性別　女

年齢　１５歳

身長　１５３ｃｍ

体重　？？？

イメージ　直視の魔〇の使い魔の猫

性格

比較的おとなしかった性格だったが沙耶たちと過ごすうちに活発的な性格になり、沙耶の教えにより腹黒いところももつようになった。身内以外でティアにちょっかいを出した者はすぐさま氷漬けにし、ティアに対しても嫉妬全開で迫る。

能力

ウンディーネの加護

シーファの一族ならだれでも持っている能力。

効果は魔力量の増強、水属性魔法の強化、水魔法の耐性の強化などがある。

魔具

フレズベルク

北欧神話において世界樹の梢に住んでいるとされ、根元にいるニーズヘッグと対をなす存在であり世界のあらゆる風を起こしたといわれる鷲の名。
外見は翡翠色の双剣であり剣に刻まれた魔法で風を自由に操れる。
また、魔力を込めれば風の刃を発生させることも可能。
所持者は沙耶

レヴァンティン

北欧神話のおいてラグナロクの終焉時スルトが振るったとされる炎の剣であり、その炎は9つある世界を焼きつくしたといわれている。
外見は黒い西洋剣であり、ティアが開放すると紅蓮色に染まる。
シンモラの錠によって9割以上は封印されているがそれでも魔物の群れを一撃で焼きつくす程の威力であり、ティア以外が触れるとその部分が溶け、防御不可の溶断の刃となる。
所有者はティア

フヴェルゲルミル

北欧神界において、存在する9つの世界のうちの1つ、氷の国ニヴルヘイムの中央にあったとされる泉の名称。
外見は水色の扇でこれといった能力はなく単に膨大な水の魔力を込め、沙耶が時の流れを止めた物。
所有者はレイン

ティルヴィング

北欧神話において、オーディンの血を引く王、スウァフルラーメがドヴァリン、ドゥリンという二人のドワーフに作らせた黄金の柄で錆びることなく鉄をも容易く切り、狙ったものは外さない剣。
外見は黄金の弾丸で魔力を螺旋状に放出する。
またあまり強力ではないが追尾機能も付いている。
所有者はエルー

グレイプニル

北欧神話において、ラグナロクまで魔狼フェンリルを縛りつけていた紐。
外見は普通の腕輪だが、そこから視認不可の細い糸を無限に出すことができ、糸の１本１本を魔力を織り込んでおりそう簡単には切れない。
グレイプニルに触れると、別のところに張っている糸が襲いかかり拘束する。
所有者はエルー

ヘイルダム

北欧神話において、ラグナロクの時ロキと相打ちになった光の神の名。
外見は少し大き目の宝石で、シンモラの錠で封印されており、解放すると込められた魔力が一気に刻まれた魔法に収束され半径１００ｍの範囲を光の壁で囲み閃光が飲み込む。
単発式広範囲殲滅用魔法爆弾。
所有者はエルー

ソル、マニ

北欧神話においてそれぞれ太陽の女神、月の神の名称。
外見は金色と銀色の双銃でそれぞれに込められた魔力で魔弾を撃てる。
またティルヴィングを込めることができるようになっている。
所有者はエルー

ギムレー

北欧神話において、ラグナロクの後にも残った場所であり、そこから新たな時代における人を受け入れた場所。
外見は普通の短剣で、視認不可の魔法障壁ラディスという魔法を刻んだものでギムレーに込められた魔力で障壁を張ることができ、大きさや強度は調節可能であり最大出力にするとレヴァンティンの第6解放まで耐えることができる。
所有者はエルー

シンモラの錠

北欧神話においてレヴァンティンを持ち、神々を倒してきた炎の巨人スルトの伴侶であり、レヴァンティンの保管者であるシンモラがレヴァンティンを保管する時9つの頑丈な錠をしたといわれている。
外見は小さな宝石であり任意で段階的に解放することができる魔具。

第1話

沙耶とエルーが魔法陣に包まれ世界を移動中、世界の管理者から

「もうすぐ着きます。場所は適当ですのでどんな場所でも文句は言わないでくださいね。」

「ふざけるな！！」

「残りの2人はどうやら別の場所に着いたようですので後で合流してください。」

相変わらず沙耶の言葉を無視し話を進める。

「せめて場所くらいおし「それでは頑張ってくださいね」」

沙耶に最後まで言わせることなく突然魔法陣が消え、白い空間が消える。

そして、最初に見た光景は2人の少年と少女が倒れ、1人の男が白い宝石を手に入れているところだった。

「いつか絶対に殺してやる。」

「まぁまぁ、落ち着いてくださいサヤ。」

周りがとんでもない状況にもかかわらず沙耶は世界の管理者に恨み言をぶつぶつと呟き、エルーがそれを聞きながらなだめていると、突然現れた沙耶たちに警戒し2本の剣を構える。

「お前たちは何者だ。」

「女性に向かっていきなりそれか？　それに名を尋ねるなら自分から名乗るのが常識だろう。」

沙耶が立ち直り、いつもの高圧的な口調で早速挑発を始めると、突然エルーがなにかに気付いたように

「そういえばこっちの言葉が伝わってますね。」

「最低限のことはしてくれたみたいだね。」

こんな状況にも関わらず、まったく興味を向けずに話し合う沙耶とエルーに

「話を聞け！！」

言いたいだけ言って勝手に話を進めている沙耶たちに痺れを切らし怒鳴るが

「これからどうするんですか？」

「とりあえず目的の相手の情報を集めながらティアたちを探そうと思ってる。」

そんなものに影響される沙耶たちではなく今後の行動について話していた。

そして話が終わると男に話を振る。

「少し聞きたいことがあるんだが。」

沙耶たちが話している間黙って待っていたことを見ると案外律儀だった。

「まずはこちらの質問に答えろ。」

戦闘の構えを解かず質問を再開するが

「答える義理はない。それより死にたくなければおとなしくしておいた方がいいぞ。」

「なに？」

男が動こうとするが金縛りにあったように体を動かすことができなかった。

それは先ほど話し合っている間、エルーがグレイプニルで糸を張り巡らせ男の身動きを封じていたためである。

「この世界でなにか変なことは起きてないか？　例えば世界の危機や天変地異、それに魔王とか名乗っている者を知らないか？」

沙耶としては適当に言ってみただけであったが、男にとっては自分の目的にピンポイントでヒットする言葉ばかりだったので顔を強張らせた。

「その顔だと何か知っているみたいだな。悪いことは言わない、おとなしく話した方が身のためだぞ。」

「悪いがそれはできない。」

「そうか、拷問は趣味ではないが仕方ない。」

グレイプニルで腕の1本でも落とせば素直になるだろうと思っていた沙耶だが、予想は大きく外れ、グレイプニルの拘束を自力で抜け出した。

流石に無傷というわけではないが、それでも戦闘に支障はない程度の怪我しか負っていなかった。

「まさかグレイプニルの拘束から抜け出すとはな。」

グレイプニルの強度は確かに強いとは言えないが、あれだけの数で拘束されてはそう簡単には抜け出せないと思っていた沙耶は少なからず驚いていた。

「お前らが捜している相手を見つけてどうするつもりだ。」

「そんなもの決まっているだろう。もちろん殺す。」

「ならお前たちはここで倒させてもらう。」

男が沙耶たちに斬りかかり、沙耶がフレズベルクで迎撃する。

もちろんフレズベルクの風の壁で攻撃はそらされ、その隙に攻撃するが相手は一流の剣士、天才とはいえまだ剣を持って1年も経っていない沙耶では攻撃を当てられずかわされてしまう。

「エルー、いける？」

「もちろんです。」

沙耶が合図を出すとエルーも戦闘に加わり2対1で男を追い詰める。

「ぐっ。」

風の刃と魔弾の嵐が降り注ぎ、どうしても足を止められ少しずつだが傷を増やしていく。
このまま押し切れるかと思ったが、急激に魔力が収束し2本の剣が1本になる。

「翔破蒼天斬」

膨大な魔力を纏った剣を掲げ大地を砕く一撃を振り下ろす。

「エルー！！」

「分かってます。ギムレー。」

時空を切り裂く剣と始まりを守護する障壁がぶつかり合う。
お互いが拮抗しあっている中、そのまま黙っている沙耶ではなく

「終わりだ！！」

男の背後にまわり風の刃で斬りかかる。
流石に全力で攻撃している中、背後に注意は回らないだろうと思っていたが、すぐさま体をひねり風の刃をかわし距離をとる。

「あれで仕留められないか。」

沙耶もでたらめな魔力を放つ剣に警戒し様子を見る。
いくらフレズベルクが強力だとしてもあれほどの一撃を逸らせるかは微妙なところで、もし逸らせたとしても余波の衝撃で吹き飛ばさ

れてしまう。
男の方としても確実に倒せるだろうと思った一撃を防がれたことで距離をとり、お互いに様子を見あう事態が続く。
そこで、気を失っていた2人が目を覚ます。
「あれ？　確か僕はロイドと戦って。」
「大丈夫エミル。」
「うん。それよりロイドは・・・」
少年が周りを見渡し、沙耶が剣を突き付けている男を見た瞬間表情が変わり
「ロイド！！」
剣を抜き、斬りかかってる。
それを見た沙耶は大きなため息をつく。
「エルー。」
お互いの考えが手に取るように分かる2人にに余計な言葉はいらず、沙耶の要望通り少年を捕縛する。
「すみませんが少しの間おとなしくしおいてください。」
先ほどは抜けられてしまったが、本来なら抜けようとしても動いた分だけ体が切り刻まれ下手をすればそのまま斬り落とされる程鋭い糸である。

「エミル！！」

いきなり動かなくなった少年に少女が駆け寄っていくが、この空間はすでにエルーがグレイプニルを張り巡らせているため

「きゃあああ。」

少しでも動こうものならすぐに捕縛され無力される。

「マルタ！！　くそっ、なんなんだお前たちは！！」

エミルと呼ばれていた少年が声を荒げるが、そんなものに動揺される沙耶ではなく完全に無視し目の前の男から視線をそらさずに刃を突き付けたままどうするか考えていた。

「どうしますかサヤ？」

「こいつが話してくれれば楽なんだけど・・・これは？」

沙耶が見つけたのは白い宝石だった。

「ルーメンのセンチュリオン・コア！！」

それを手に取った瞬間捕縛されている少女が叫ぶ。

その様子に何か重要なものだと思った沙耶は

「ロイドと呼ばれていたな。交換条件だ、これのを渡す代わりに知っていることを話せ。情報次第では手を貸してやってもいい。」

その提案に少し悩むが

「いいだろう。その条件を飲もう。」

背に腹は代えられずサヤの出した条件を飲むことにする。

「助かる。とりあえずこの場所から出るが異論はあるか？」

「問題ない。」

交渉が成立し一旦この場を離脱しようとすると

「待てロイド！！」

エミルが捕縛されたまま叫ぶ。

しかし、振り向くことはなくエミルの叫び声はむなしく響き渡った

第2話

沙耶たちが離脱し、ある程度離れた場所で立ち止まる。

「早速で悪いが知っていることを話してもらおう。」

「分かった。ええっと、名前は？」

「サヤ・カミナギだ。」

「エルー・ツェッティです。」

「サヤにエルーだな。俺はロイド・アーヴィングだ。」

初対面の女性のファーストネームを呼ぶのはどうかと思ったが、この世界ではそうなのだろうと納得し追及はしないでいた沙耶だが、隣ではエルーがなにかを必死に我慢していた。

「2人はこの事態をどこまで知っている？」

「なにも知らない。詳しい説明は省かせてもらうが私たちは別の世界から来た者だ。」

別段隠す必要のないことなので、話を円滑に進めるために打ち明ける。

「真意はどうかわからないがとりあえず信用しておこう。この世界で今あちこちで異常気象が起きている。それは魔王ラタトスクがマナの流れを制御しているセンチュリオンたちを眠らせたらしい。そ

して、魔王ラタトスクが倒され誰もセンチュリオンを制御できなくなり今の状況ができている。センチュリオンたちが眠りに着いた姿がそのセンチュリオン・コアだ。」

まさしく沙耶が適当に行った、魔王、天変地異、世界の危機である。しかし、世界が滅びようが沙耶にとってどうでもいいことで必要なことはオーディーンの欠片を取り込んでいる人間である。

「そのラタトスクというのは人間か？」

「いや、なにかと言われれば精霊に近い存在だが。」

この言葉でラタトスクは違うと判断した沙耶はセンチュリオン・コアを投げ渡す。

「どうやら、私たちが捜している相手とは違うようだ。ところでロイドはいったい何者だ？」

「俺か、俺はただの剣士だよ。」

「ただの剣士があれほどの力を持っているのか？　まぁどうでもいいな。ラタトスクを倒した奴はどんな奴なんだ？」

当然嘘だと思ったがさして興味もわかなかったので話を進める。

「リヒター・アーベント、そう聞いている。」

「そいつはどこにいる？」

「さっきの洞窟だ。偶然遭遇して襲ってきたから死なない程度に返

り討ちにしてきたが、そいつがどうかしたのか？」

ロイドに手加減されて倒されたということは人間の能力を限界まで高めるオーディーンの欠片を取り込んでいるにしては弱すぎるためリヒターも候補から外れる。

前回の魔王のことを考えるとそう簡単には情報は出てこないだろうと思ってはいたが、案の定情報は手に入らず、逆に余計な事態に巻き込まれてしまい頭を抱えていると

「2人の目的は何だ。」

「とりあえず人を探している。元の世界では魔王と名乗っていたからそう聞いてみただけでこっちではどんなやつか合うまで分からない。」

「特徴は？」

「おそらくだがかなり強いはずだ。それ以外情報という情報はない。」

「それは2人よりもか？」

「まっとうに戦おうとすれば私たちより強いと思うが、それでも見つけられさえすれば問題ない。」

どんな相手にしろ沙耶に認識されれば断頭台に首枷を着けられた死刑囚も同じである。

「ちなみに、センチュリオン・コアを持っていたらどうにかなるのか？」

世界を安定させる存在そのものを持っていて、なにもないわけがないと思った沙耶。

「戦闘能力が上がり、性格が凶暴化する。俺が聞いている限りではそれくらいだ。」

その言葉を聞いて考え込む沙耶。

「それを集めている者はどれくらいいる？」

「まずは、洞窟にいた2人、リヒーター、そしてヴァンガードという組織だ。」

「数は？」

「俺も含めそれぞれ1つづつ、そして残りが4つだ。」

「ロイドは目的はどうであれ、それを誰かに取られたくないということでいいか。」

「ああ。」

これまでの情報を整理しながら、今後の行動を思案し

「分かった。私たちも協力しよう。」

「本当か！！」

「ああ、だが条件がある。1つは私たちが手に入れたものは私たち

が所持しておくこと、２つ目はロイドが手に入れたものはなにがあっても他人に渡さない、この２つだ。」

「それは駄目だ。さっきも言ったがセンチュリオン・コアは人を狂わせる。俺は特別だから問題はないが、２人は例に漏れないはずだ。」

「先程まで持っていたが何も問題はなかったぞ。それに星の地域一角程度を司る程度で私をどうにかできるはずがない。」

前回の魔王との戦いのときは星の魔力を込めて掛けられた呪いをあっさりと解除してしまうほどの解呪能力を持つ沙耶にとって、センチュリオン・コア程度の魔力では足元に及ばない。

「分かった。だが２人の目的が達成されたらセンチュリオン・コアを渡してもらう。」

「いいだろう。ここから１番近いセンチュリオン・コアはどこにある？」

「ここからだとアスカードという町にあるウェントスのコアが１番近い。」

「分かった。私たちはもう行くがなにかあるか？」

「恐らくセンチュリオン・コアを巡って戦うことになるだろうから気をつけろよ。」

それだけ言い残しロイドは去っていた。

「よかったんですか？」

「なにが？」

「分かっているのに聞かないで下さい。協力の件ですよ。」

「たぶん、今回の敵はヴァンガードにいると思う。いくらオーディーンの欠片で強化されていてもロイドを相手取るのは厄介なはず、それにロイドの背後にも仲間がいるはずだから表立って行動はせず、センチュリオン・コアを集めて力をつけようとするはずだから、私たちはセンチュリオン・コアを集めて炙り出す。」

「分かりました。でも必要以上にロイドさんと仲良くしては駄目ですよ。」

目が笑っていない笑顔に、背中に悪寒が走る。

「私はエルー一筋だよ。」

慌てて弁解するが

「それは信じていますけど、それとこれとは別問題です。私はサヤを独占したいんです。それなのに最近のサヤは、ティアさんはまだいいとしてカインさんやレミリア様とずいぶん人気じゃないですか。」

「あれは向こうから来てるだけで、私からはなにもしてないよ。」

先ほどまでの威厳の欠片も感じさせないほど、わたわたと弁解している沙耶をエルーが引き寄せ抱きしめる。

「言い訳ばかり聞きたくありません。今夜はお仕置きですね。」
腕の中にいる沙耶の耳元で呟くと、今までのことを思い出し顔が赤くなり
「だから私からは、んっ！！」
沙耶がなにか言おうとしたが、エルーがキスで口をふさぎそのまま沙耶がおとなしくなるまで舌をからめる。
おとなしくなった沙耶から唇を離すと熱にうなされたような目でキスの余韻に浸っていた。
「普段は鋭いのにこういうところでは鈍いですねサヤは、さっきのはただの口実ですよ。本当はただ私がサヤを愛でたいだけです。」
再び耳元で呟くと、沙耶は小さく首を縦に振った。
「楽しみにしてますよ。」
その後アスカードに着くまで、沙耶とエルーは腕を組んで歩き上機嫌な2人だった。

第3話

沙耶とエルーが存分にいちゃつきながらアスカードに向かっていると、ふいに思い出したように

「そういえば、ティアさんとレインさんはどこにいるんでしょうね。」

「あの2人ならとりあえず大丈夫だと思うけど、私たちの敵に見つかったら少し厄介かもしれないから早く合流しないと。」

「それにしてもこの世界の魔物はやけに好戦的ですね。」

腕を組み片方の腕が使えない状態で沙耶が魔法で撃退し、エルーがギムレーで近づけさせない。

しかし、いくら撃退しもわらわらと寄ってくる魔物たちにいい加減に我慢の限界が訪れ

「終焉の闇よ刹那の絶望を示せ、ダークネスノヴァ」

エルーが終焉の闇を放ち辺り一帯の魔物たちを飲み込んでいく。

闇が消えるときには魔物たちは存在の欠片も残さず消されていた。

「詠唱短くなったね。」

「1度に使える魔力が多くなりましたからね。これも学園長先生の指導のおかげです。」

そんな話をしている内に街が見えてくる。

「あれがアスカードでしょうか。」

「たぶんそうじゃない。風車みたいなものもあるし。」

街が近付いたことで、沙耶は自然と絡めていた腕を離そうとするが

「駄目ですよサヤ。」

エルーがそれを許さず、無理矢理沙耶の腕をとる。

「で、でも人前じゃ恥ずかしい。」

「恥ずかしがっている沙耶は可愛いからそのままでいて欲しいんですが私たちは学園を卒業したら結婚するんですよ。そうしたらサヤもいろいろな所へ挨拶に行かなければならないんですから少しは慣れて下さい。」

「でも・・・」

それでも恥ずかしがっている沙耶に

「このまま腕を組んで歩くか、公衆の前でキスされるのどっちがいいですか？」

笑顔で二択を迫る。

「腕を組む方で。」

観念し素直に腕をからめる。

そんな沙耶を愛おしそうに見つめるエルーと、恥ずかしがりながらもエルーの温もりに酔いしれいてた沙耶だった。
そんな様子で街に入るが、事情を知らない普通の人から見ると仲のいい友達同士か姉妹にしか見えないのであまり注目を集めることもなかった。
それに加え妙な仮面をつけた人たちが街の中をうろついていたのも理由の1つになっていた。

「あれはいったい何のお祭りなんでしょうか？」

「お祭りにしては周囲が殺気立ってるけどね。」

ピリピリとした空気の中、平然と歩いている2人に仮面をつけた男が近づいてくる。

「おいそこの2人、こんな奴らを見なかったか？」

見せられた紙には、洞窟であった2人とロイドの似顔絵が描かれていた。

「知らないな。」

「見かけたら俺たちに伝えてくれ。」

そういうと他の人に話しかけにいってしまった。
去って行ったと思ったら次は街の住人が話しかけてくる。

「災難だったな。今ヴァンガードの連中が街をうろついているから観光にきたなら今はやめていおいた方がいいぞ。」

「ヴァンガードとはどんな組織なんだ？」

「そんなこともしらないのか？　世界再生の旅でシルヴァラントとテセアラが1つになって、その文明の差でシルヴァラントの方が差別されているんだ。それをどうにかしようとしているのがヴァンガード、シルヴァラント開放戦線だ。しかし、最近の行動が暴力的で独善的な感じだからシルヴァラントの方からもあまりよく思われていないんだ。」

それから、早く街から出た方がいいという忠告を受け去って行った。

「どうしますかサヤ？　おそらく洞窟であった2人もここにいますよ。」

「お互いに潰しあってくれれば楽だけどあまり期待はしない方がいいかな。とりあえずセンチュリオン・コアを探そう。」

それから町の中を探してはみたがそれらしきものは見当たらず、一旦宿に向かおうとした時どこからか戦闘音が聞こえてきた。

「街の中で戦闘とは好戦的な奴らだ。」

「いくんですか？」

「それぞれの戦力を見る機会だし、それに運が良ければそれぞれが持っているセンチュリオン・コアを奪えるかもしれない。」

その言葉に納得したエルーは沙耶と共に戦闘が行われているだろう場所に急ぐ。

そこでは洞窟で見た2人と背に羽をもった少女がヴァンガードと戦

っていた。

「そういえば、あの2人もセンチュリオン・コアを持っているんですよね。しかし、とても狂わされているようには見えないですね。」

「なにか特別な方法をとっているのか、特別な存在かどっちかだと思うけど今の段階じゃ何とも言えないね。」

「どうしましょうか。あの2人には顔を知られていますし、かといってわざわざヴァンガードに顔を知られては後々面倒になりそうですし。」

「とりあえず様子見かな。あの2人が特別ななにかならセンチュリオン・コアのところまで案内してくれるかもしれないから危なくなったら援護しよう。」

「分かりました。」

それからしばらしくしてヴァンガードが退いていき、エミルたちもその場から去ろうとした。

「それじゃあ行こうか。」

「そうですね。」

エミルたちの後を尾行するが、今日は探索をやめるようだったので沙耶たちもおとなしく宿へ戻っていた。
宿に戻った沙耶とエルーはこれからの行動について話し合っていた。

「ロイドの情報だとあの2人もセンチュリオン・コアを持っている

はず、でもなぜかセンチュリオン・コアに狂わされていない。それを確かめるためにも1度あの2人に接触しようと思う。」

「しかし、そう簡単に話してくれるでしょうか？」

「向こうはロイドの情報を知りたがってるはず、それにルーメンをまだ持っていると思ってるはずだからそれをちらつかせれば情報は引き出せるはず。」

「なるほど。ではいつ接触しますか？」

「この街のセンチュリオン・コアを見つけてもらってから、ある程度情報を引き出せたらウェントスを奪う。ついでに向こうが持っているセンチュリオン・コアも奪う。」

「分かりました。それでは始めましょうか。」

エルーの言葉に一瞬意味が分からなかったが、すぐに言葉の意味を理解し静止させようとしたが、一瞬の間に沙耶を押し倒す。

「ちょっ、ん～。」

沙耶がなにか言おうとするとすぐにキスで口をふさぎ抑え込む。
抵抗しようとしても力ではエルーが上なので抜け出せず、次第に抵抗がなくなる。
抵抗しなくなったとみるとエルーは沙耶の服を脱がせる。
しかし、完全に脱がせるわけではなく服をはだけさせる程度までにとどめ、絡めていた舌を離す。
すでに沙耶の体は赤く火照り、息が乱れていた。

「はぁ・・はぁ・・・・えるぅ・・・」

「すぐに気持ち良くしてあげます。」

とろけるような表情を浮かべる沙耶に、エルーが覆いかぶさり、それから1晩中部屋では沙耶の嬌声が響き渡った。

第4話

基本的に寝る必要がない沙耶が目を覚まし、なぜ眠っていたのか思い返していると

「目が覚めたんですね。」

エルーが読んでいる本を閉じ沙耶に近づく。

「どうして私寝てたんだっけ。」

「覚えてないんですか？　確かに昨日は少しやりすぎたかもしれませんが。」

その言葉で昨日の夜何をしたか思い出し顔を赤くし俯いていしまう。

「思い出しましたか。」

無言でうなずき、昨日の恥態を思い出しては羞恥に悶えていた。
そんな沙耶をいつまでも見ていたかったエルーだがそろそろ行動を開始しなければエミルたちを見失ってしまうため苦渋の決断を下す。

「そろそろいきましょう。」

「分かった。でもあと3分、心の整理をするから待って。」

「では先に出ているので早く来てくださいね。」

そういって先に外に出ていったエルー、それからきっちり3分後に

いつもの調子を取り戻した沙耶が出てきた。

「それでは行きましょうか。」

それからエミルたちの後を尾行し、行きついた先は広い石舞台だった。

「ここには何もなかったはずだが。」

「サヤ、なにか来ます。」

空から大きな鳥型の魔物が現れ、エミルたちと敵対するが強風に加え魔物の方もなにか特殊な体質らしくエミルたちは引き下がっていった。

「この石舞台になにかあるのかな。」

「昨日来た時は何にもありませんでしたけど。」

「あの2人は何か知っているみたいだから、あの魔物を排除して泳がせよう。」

「そうですね。では行きましょうか。」

沙耶とエルーは常人なら立つどころか吹き飛ばされそうな暴風の中を平然と歩いてく。

センチュリオン・コアの暴走程度では沙耶のフレズベルクの力には敵わず暴風さえも操り魔物のところまで向かっていく。

沙耶たちが中央に近づくと魔物が襲いかかってくるが風の壁が魔物の攻撃を妨げる。

その隙にエルーが攻撃を加えるがすべて弾かれる。

「あれは厄介ですね。」

「エルー、ティルヴィングは何発残ってる？」

「6発です。材料さえあれば補充できるんですがこっちで手に入るかどうかわからないので出来るだけ保存しておきたいですね。」

エルーの切り札であるティルヴィングを撃てば、あの程度の魔物なら跡形もなく消すことができるが数に制限がある為、今後のことを考えると使用を控えておきたかった。

また、沙耶の能力を使えばそれこそ一瞬で終わるのだが、沙耶はよほどのことがない限り生物に対して能力を使うつもりはなく可能な限り自分の力でどうにかしようとするため他の手段を考えていると

「サヤ、私があれをどうにかするので止めはお願いします。」

「それはいいけど、なにか手段はあるの？」

ヘイルダムは範囲が広すぎて使えず、グレイプニルは暴風が吹き荒れる中では上手く張り巡らせることができない。

「私も強くなってるんですよ。」

エルーが双銃を魔物に向け魔力を収束させる。

太陽の女神と月の神の名を冠する双銃がそれぞれの色に輝き、特大の魔弾を放つ。

金と銀の魔弾は1つになり月蝕を起こし魔弾が黒く染まり魔物に直撃する。

「今です。」

倒すまではいかないまでも、攻撃をはじいていた魔物はぼろぼろとなり逃げようとしてた。
しかし、エルーが作ったチャンスを逃す沙耶ではなく魔物を両断する。

「前のに比べると収束しやすいですから、いまのでだいたい7割くらいですよ。」

「本当に強くなったね。」

「これもサヤのおかげです。」

それから石舞台を調べてみるがやはりどこにも入口らしきものは見つからず、エミルたちを待つことになり、その日戻ってこなかったため沙耶とエルーもその日は諦め宿に戻る。

「サヤ、手合わせしませんか？」

宿に戻りくつろいでいた沙耶に突然エルーが提案する。

「いいけど、どうして？」

「こっちに来るまでは毎日やってたじゃないですか。だから少し体を動かさないと落ち着かないんです。」

普通であればあのレベルの魔物と遭遇すれば命がけとまでは言わないがそれなりの覚悟をしておかなければならないが、エルーにとっ

てあの魔物程度では準備運動程度にしかなっていなかった。

「分かった。どこでやろうか？」

「あの石舞台でやりましょう。街の外に出るのは少し面倒ですし、あそこなら適度に広くあまり人も近づかないみたいですから。」

それから準備を整え石舞台に向かう。

「どんな形式にする？」

「今回は制限なしでやりましょう。」

いつもは素手や魔法限定など条件を決めてやっていたが今回は制限なし、それはほぼ全力たい全力を意味する。

「私たちなら怪我をしてもすぐに治りますから、それに久しぶりにサヤと全力で戦って見たかったんですよ。」

それまで緩やかだった空気がエルーの気迫で張り詰める。

「ギムレーで結界は張っておきますから、周りの被害は一切考えなくても大丈夫です。」

「エルーと全力で戦うのは学園に入学した時以来だね。」

「そうですね。あの時は負けてしまいましたけど今回は負けませんよ。」

「私もエルーにだけは負けるわけにはいかない。」

沙耶はエルーを守り通すとエルーの家族と誓った為、守る本人であるエルーだけには負けるわけにはいかず、エルーも沙耶を支える為に強くなければならない。
お互いがお互いの為に負けるわけにはいかず、一切の甘さを捨てる。
いまだセンチュリオンが目覚めず暴風が吹き荒れる中、エルーが硬貨を投げる。
投げられた硬貨は重力に従い落下する。
落下している間、お互いのことを知りつくした上での戦術を立てる。
そして、硬貨が地面に落ちた時、沙耶はフレズベルクを抜きエルーに迫り、エルーはソルとマニを構え迎撃の構えを取る。
月明かりのもと一夜限りの舞台が開幕する。

第5話

硬貨が落下した瞬間、沙耶は一気にエルーとの距離を詰めるため

「固有制御2倍速」

本来ならば体に負担が掛かり過ぎる為禁呪扱いされている魔法だが、沙耶とエルーは時間の流れが止められ、どんな怪我を負っても止められている時間まで戻る為、激痛は残るもののリスクはほとんど気にしなくてもよくなり通常時の倍速でエルーとの距離を詰める。

「予想通りです」

沙耶の進行方向に土の槍が地面から隆起する。
放出系の魔法ならフレズベルクで逸らすことが出来るが、座標指定の魔法はその場に現れる為風の鎧では逸らすことができず横に飛ぶことで回避する。

「まだまだ行きます。アースグレイブ」

次は沙耶を囲むように地面が隆起するが

「こんなもの。」

フレズベルクは風の鎧だけだなく、風の刃を纏わせたまま剣を振るうことで鋭さが増し岩程度なら簡単に切り裂くことができる。
それから幾度も同じ魔法を放つがすべて切り裂かれ、沙耶はエルーに接近するがエルーがこの程度で接近される訳がないと確信し罠がないか注意しながら接近する。

「アースバインド」

エルーの次なる手は沙耶の前方以外をすべての方向を地面を隆起させ塞ぎ、今日魔物に使った月蝕の魔弾を最大出力で放つ。
前方以外を囲まれているこの状況では風の鎧で逸らせない。
あらゆる方法で沙耶の最強の盾を無力化してくる。
しかし沙耶も易々と負けるはずもなく。

「開闢の光よ永遠の希望を灯せ、ルミナスノヴァ。」

開闢の光と月蝕の魔弾が激突し、多少拮抗するも月蝕の魔弾が光を飲み込む。
しかし、そうなることは分かっていた沙耶は威力が削られた魔弾を斬り伏せ、視界が悪い中エルーの死角から接近しようとするが

「無駄ですよサヤ、準備は整いました。」

死角から接近しようとした沙耶の目の前に地面が隆起し大きな壁となり行く手をふさぎ、地面からは土の槍が襲いかかる。

「くっ、どうして場所が。」

一旦、体勢を立て直そうとエルーがから離れようとするが的確に地面が隆起させ沙耶を誘導し土の槍を突き上げる。

「まさか、グレイプニルで。」

「そうですよ。先ほどまでの攻撃は障害物を増やすために行ったものです。」

最初から地面を隆起させていたのはグレイプニルを張る為の布石であり、グレイプニルが張り巡らされた状況で、沙耶がいくら動こうともグレイプニルに触れてしまいエルーには姿が見えなくとも沙耶の居場所は的確に知ることができる。

「でも、グレイプニルじゃ私は捕えられない。」

いくら張り巡らせようとも数本程度なら断ち切り、襲いかかってきても風の鎧がある限り沙耶に届くことはない。

「分かっていますよ。あくまでグレイプニルは沙耶の位置を知る為に張ったものですから本命は別にあります。」

次々と襲いかかってくる土の槍を回避しながら、どうやって接近するか考えていると、突然黒い鎖が影から現れ拘束しようとする。それを何とか断ち切るが、次は闇が空間を飲み込もうとする。

「沙耶が逃げ回っている時に私もいろいろと仕掛けさせもらいました。下手に動くとそこらじゅうに仕掛けた罠が襲いかかりますよ。」

エルーが仕掛けた罠はすべて風の鎧で防ぐことができないものばかりで、動けば罠が発動し、動かなければ土の槍にやられる。今の石舞台のはエルーの支配下に置かれ、沙耶にはひたすら逃げることしかできなかった。

「固有制御3倍速」

支配から逃れるために倍率を上げ、次々と襲いかかる罠を振り切る。しかし、エルーの支配からはその程度の策では逃れられない。

「まだまだ行きますよ。開けない夜よ、アブソリュートダークネス」
石舞台全体を闇で覆い、視界を潰されたサヤは下手に動くことはできないが、エルーはグレイプニルで位置を把握できる上に闇を操作し沙耶を押しつぶす。

「光よ集え、ルミナススパーク」
閃光を収束させ、爆発させ闇を祓うがエルーの追撃は止むことを知らない。

「終焉の闇よ刹那の絶望を示せ、ダークネスノヴァ」

「くっ、ルミナスノヴァ」

お互いの最大の魔法を放つが、無理矢理放った沙耶の魔法が押され闇が沙耶ごと押しつぶす。
沙耶の意識が離れ風の鎧が消えたとみると、すかさずグレイプニルで拘束しようとする。

「固有制御5倍速」

沙耶が制御できる最高まで速度を上げその場を離脱するが、それさえもエルーの思惑通りであり沙耶を囲むように隆起する。
すぐさま脱出しようとするが、壁が厚く、また魔力が通され斬ることはできても脱出することはできない。

「これで終わりですね。」

金と銀に輝く双銃を沙耶に向け、隆起した地面の上からエルーが現れる。

「これも作戦通り？」

「はい。いくら罠を張っても沙耶を捕えることはできませんから、こうやって閉じ込めさせてもらいました。」

「まさか、あれだけの数の罠がこの為だけの布石だなんて。」

「ふふっ、言ったじゃないですか本命は別にあるって。」

全方位を固められられた事で風の鎧の効力を無くし、沙耶の魔法では月蝕の魔弾を防ぐことは難しい。

「言っておきますが、次に放つのは月蝕ではなくティルヴィングです。どんな魔法を使っても逃げることはできませんよ。」

これだけ追い詰められ、さらにエルーの切り札であり最強の弾丸を構える。

「こんなところで使っていいの？」

「もちろんです。油断してるとすぐにひっくり返されてしまいますから、これで私の勝ちです。」

月光が優しく輝く闇の中、黄金の弾丸の引き金を引こうとした時、沙耶が唇をつりあげる。

「分かってたよ。エルーがフレズベルクを封じ、逃げ場を封じたう

えでティルヴィングを使ってくるって。だからこそ私もこの状況にこそ勝機を見出した。」

エルーは沙耶の言葉に危機感を覚え引き金を引こううとするが

「エルー、おかしいと思わなかった？　あれほど吹き荒れていた暴風が止んでいることに。」

戦い始めるまであれほど吹き荒れていた風がピタリと止んでいた。その意味に気付いたエルーだが、時はすでに遅く今まで止められていた暴風が一気に吹き荒れる。
それでも、とっさに魔法を発動させ体勢を立て直し再び沙耶に銃口を向けるが、沙耶もその一瞬にフレズベルクで圧縮した風を解き放ち一気にエルーに接近する。
そして引き金を引かれる前にソルを弾くが、エルーもすぐさまマニを沙耶に向ける。

「引き分けですね。」

「そうだね。」

沙耶はエルーの首筋に刃を当て、エルーは沙耶の額に銃口を突き付けていた。

「あの時の驚いていたのは演技ですか。本当に油断ならないですね。」

「本当に危なかったよ。あの時に風を圧縮してなかったら、いくら風で隙を作れても間に合わなかったから。」

お互いに武器をつきつけたまま戦いを振り返る。

「今日は少しはしゃぎすぎましたね。そろそろ戻りましょうか。」

「ティルヴィングを使わなくてよかったよ。」

「あれはそうでもしないとサヤが諦めてくれないからですよ。」

「他にも本気で魔法を使ってくるし、私が普通なら死んでたかもしれないよ。」

「今日のサヤはやけに意地悪なこと言いますね。昨日やりすぎたことを根に持ってます？」

「そんなことないよ。」

口ではこういっているが実際にはかなり根に持っていた。

「そうですか。それでは今夜もやりましょうか。」

「えっ！？」

「根に持っていたないということは今日も大丈夫ですよね。」

「いや今日は疲れたから。」

「それはおかしいですね。私たちは疲れるなんてことあり得ないはずですが。」

「ごめんなさい。実は少し根に持っていました。」

これ以上言い訳しても無駄だと思い素直に謝って許してもらおうとするが

「ではそんなことを2度と思えないようにお仕置きしなければいけませんね。」

どちらにしろ避けられないようになっていた。
それを聞いた沙耶は慌てて逃げようとするがすぐにグレイプニルで捕まってしまう。

「縛られているサヤというのも良いですね。」

エルーが妖艶な笑みを浮かべ沙耶に迫る。

「誰も来そうにありませんし今夜はここでやりましょうか。」

「お願いエルー許して、もう言いませんから。」

必死に許しを請う沙耶だが

「もちろん許しません。いけないことをしたサヤにはきちんとお仕置きをないといけません。」

当然のごとく聞き入れてもらえず、月明かりのもと沙耶の嬌声が再び響き渡った。

第6話

月夜の模擬戦から一夜明け、日が登っていた時沙耶たちはというと

「あああああぁぁっ・・・はぁはぁ・・」

「んっ・・・れろ・・・・」

エルーが沙耶を抑えるように覆い、いまだに沙耶はエルーに責め続けられていた。

「んあああぁっ・・・りゃめ、もうりゃめなの・・・えるぅもうゆるしれぇ・・」

一晩中責め続けられ呂律が回らず、腰が立たず動けない沙耶をエルーは聞く耳も持たず容赦なく攻め立てる。

「んっ、もう朝ですか。名残惜しいですがこの辺りで終わりにしましょうか。」

そう沙耶に問いかけるがとても答えられる状態ではなく、エルーは気付かぬうちに全裸にしていた沙耶に服を着せ、動けない沙耶を抱えその場を後にした。

石舞台を後にした沙耶とエルーは1度宿に戻り身支度を整えていた。

「大丈夫ですかサヤ？」

「お願い。少し1人にして。」

2日連続エルーに流され一晩中責め続けられ、しかも、それを嬉しいと感じてしまった自分に激しく落ち込んでいた。

「大丈夫ですよサヤ。サヤは私のことが好きなんですよ。好きな人と愛し合って嬉しくないはずがありませんよ。」

そんな沙耶の心を読んだかのような発言。
さらに沙耶のエルーに対する気持ちを断言し、沙耶が抱いた感情を肯定する。

「そうなのかな。」

エルーの言葉に誘導され少し立ち直る。

「そうです。そもそも私が沙耶の嫌がることをするはずがありません。」

またしても沙耶の気持ちを断言する。
しかし、それは沙耶の気持ちを寸分の狂いもなく言い当てていた。

「それじゃ、今私がして欲しいこと分かる?」

沙耶がエルーを試すように尋ねると、何の迷いもなく唇を重ねる。
舌を絡ませるようなキスではなく触れるだけのキスを数秒間続け、沙耶を抱きしめる。

「これでいいですか?」

「うん。」

すっかり立ち直り、エルーに溺れてしまっている沙耶だった。

沙耶が立ち直ると再びエミルたちを尾行しようとしたが、昨日の様子から石舞台を訪れることは分かっていたので、近くに隠れエミルたちを待ち伏せすることにした。

そして、その間

「エルー。」

沙耶がエルーの名前を呼んだ後、目をつむり少し顔を上にあげる。

エルーは沙耶の要望通りについばむようなキスを何度も交わし、終わった後には緩みきった顔でエルーに抱きつき幸せそうにほほ笑む。

「ふふっ。」

「ご機嫌ですねサヤ。」

「うん。今私すごく幸せだよ。」

「そうですか、沙耶は笑顔が可愛いんですからずっと笑っていてくださいね。」

「それじゃあ、ずっと傍にいてねエルー。」

「もちろんです。」

それから再びキスを交わし、存分にいちゃついているとエミルたち

が石舞台に現れた。
「来たのはいいんですが、あれはいったい何をやっているんでしょうか？」
少女が杖を持ち、石舞台の上で何かをやっていると中央に魔法陣が現れ、エミルたちが近付き消えた。
それを確認すると沙耶たちもそこに近づき魔法陣を調べる。
「なるほど。いくら探しても見つからないわけだ。」
「どうやら転移の魔法陣みたいですね。どうしますか？」
「もちろん行く。たぶんこの先にセンチュリオン・コアがあるはず。」
そして沙耶たちも魔法陣をくぐり、遺跡に着いた。
「それにしてもこの世界では転移の魔法陣は簡単に作れるんでしょうか？」
「どうだろう。向こうの世界でも近距離なら作れないことはないけど、この魔法陣でどれだけ移動したか分からないからなんともいえないよ。」
たわいのない会話しながら遺跡の奥へと進んでいく。
所々に魔物や遺跡を守る為のゴーレムがいたが、沙耶とエルーの敵ではなく襲いかかってきた敵はすぐに倒してしまう。
「ずいぶん奥まで来ましたけど、すれ違っていないか心配ですね。」

「そうだねと言いたかったけど、その心配はいらなかったみたいだよ。」

目の前にはセンチュリオン・コアを守護している魔物がエミルたちと戦っていた。

「タイミングもちょうどいいようですね。」

「うん。それじゃあ行くよエルー。」

沙耶はフレズベルクを抜き、エルーはソルとマニを構え駆けだしエミルたちが戦いに乱入する。

突然の乱入者に驚いているエミルたちを無視し、眼前の魔物と対峙する。

風のセンチュリオンということもあり、守護する魔物も風属性の魔法を放ってくる。

しかし、沙耶に風の魔法で対抗するには圧倒的に力不足であり放った魔法をすぐに無力化し、切り裂く。

「エルー！！」

「任せて下さい。」

ソルとマニから金と銀の魔弾が雨のように降り注ぎ跡形もなく消滅した。

そして、守護者がいなくなったセンチュリオン・コアを沙耶が手に入れる。

「とりあえず最低限の目的は達成ですね。」

「うん。次は。」

エミルたちの方へ振り返る。
そこには、突然現れ苦戦していた魔物を一瞬で葬り去り驚愕に染まったエミルたちがあった。

「悪いことは言わない。おとなしくお前たちが持っているセンチュリオン・コアを渡せ。」

その言葉にはっとしたエミルたちは

「お前たちはあの時ロイドと一緒にいた・・・」

「えっ、ロイドがどこにいるか知ってるの？」

怒りに染まっているエミルと思いもよらない言葉に驚く羽をはやした少女。

「もう1度だけ言う。センチュリオン・コアを渡せ。」

再度センチュリオン・コアを渡すように呼び掛けるが

「あなたたちこそ渡しなさいよ。センチュリオン・コアを目覚めさせなきゃ世界が大変なことになるのよ！！」

「ラタトスクがいない今、誰が目覚めさせるんだ。」

「私よ。私にはラタトスク・コアが寄生してる。だからセンチュリオン・コアを渡して。」

沙耶としては軽い鎌をかけたつもりだったが予想以上の情報が手に入った。

「なるほど。だからお前たちはセンチュリオン・コアに惑わされないわけか。しかし、渡すわけにはいかない。」

「世界がどうなってもいいの！！」

マルタが驚愕と怒りで声を荒げるが沙耶には響かない。

「どうでもいい。私たちの目的の為に必要だから集めているだけだ。」

「無駄だよマルタ。無実の人を殺すロイドの仲間だから、きっとこいつらもなんの罪もない人を殺す奴らなんだ。」

そんな沙耶の様子をみてエミルが適当なことを言う。

沙耶はそんな戯言に耳を貸すきは微塵もなかったがエルーは違った。

「エルー！！」

エルーが放つ殺気に反応し、慌てて呼び止める。

「止まってエルー。」

「すみません。サヤの頼みでもそれだけは聞けません。あの方は言ってはならない言葉で沙耶を侮辱しました。私は最愛の人を侮辱されて黙っていられるほど出来た人間ではありません。」

エルーの殺気にエミルたちは凍りつき精神的にも動けないが、瞬時に張り巡らされたグレイプニルで縛られ物理的にも動けず、首筋からは血が流れていた。
エミルたちの命はエルーが指先を動かせばすぐにでも奪うことができ、エミルたちの命は文字通り、エルーの手の上だった。

「私は何とも思ってないから止めて。」

「サヤが何ともなくとも私は許すことができません。」

沙耶は命を軽くし過ぎるからこそ、なによりも命の重さを大事にすることを知っているエルーはエミルが言った言葉が許せなかった。
ティアやレインがこれを聞いても怒りはするが、沙耶を溺愛とも狂愛ともいえるほど想っているエルーはこれまでにないほど怒りを露わにしていた。

「お願いエルー。エルーには人を殺して欲しくない。」

「分かりました。」

悲痛な表情で訴える沙耶にエルーが折れ、グレイプニルを解除する。
そして、この場に留まるとまたエルーが暴走しかねないのですぐさま離れようとするが

「待って！！」

羽の生えた少女が呼び止める。
すぐにでも離れたい沙耶は無視するつもりだったが

「ロイドはどこにいるの？」

その言葉で踏みとどまる。

「お前はロイドとはどういう関係だ。」

「私はコレット・ブルーネル。ロイドとは世界再生の旅で一緒に戦った仲間なの。」

その言葉でロイドの強さに納得した沙耶は情報をくれたコレットにせめてもの恩返しに

「ロイドの居場所は分からない。それでもあいつは無関係の人を殺すような奴じゃない。」

少しの対話だったが、それでも無関係の人を殺すような人間ではないということは沙耶にもわかった。

「ありがとう。」

その言葉を聞くと、沙耶とエルーはその場から去って行った。

第7話

「エルー、落ち着いた？」

「はい。取り乱してしまってすみません。」

あの後、遺跡を脱出し宿まで戻りエルーを落ち着かせていた。
あのエルーがここまで敵意をむき出しにするのは、魔王の時以来でありどれほど自分のことを想っているか思い知った沙耶は

「エルーは前に私に言ったよね。自分の為に人を殺して欲しくないって。私はあの約束の後から魔王を除いてずっと守ってる。だからエルーも私の為に人を殺さないで。」

「あの時の私はサヤの為じゃなく私が許せなかったから殺そうとしたんです。次に同じことを繰り返すようであれば容赦はしません。」

「それじゃあ私がエルーと同じ立場ならどうするの？」

「それは・・・」

エルーは言葉に詰まってしまう。
その場面に出くわせば沙耶は必ず殺しはしないまでも、死んだ方がましな状態まで責め続ける情景が簡単に想像できてしまう。

「たぶん私がエルーの立場なら、生まれたことを後悔させるぐらいのことをすると思う。でもエルーはきっと止めるよね。だからお願い、今日みたいなことはもうしないで。」

「分かりました。だからサヤもそんな顔はやめてください。前にも言いましたが私は沙耶の笑顔が好きなんですから。」

その言葉を聞いて悲痛な表情を浮かべていた沙耶の表情が次第に穏やかになり

「でもねエルーが私の為に怒ってくれたことは嬉しかったよ。」

笑顔を浮かべエルーに告げる。

その笑顔を見て、この笑顔を曇らせないためにも今日のようなことがあっても我慢しようと決意したエルーだった。

「ところでサヤ、これからどうするつもりですか？」

「センチュリオン・コアの回収に行きたいところだけど、どこにあるか分からないから情報収集かな。」

「あの2人はどうするつもりですか？」

「とりあえず放置しておく。どんな条件でセンチュリオン・コアを目覚めさせることができるか分からないから、ラタトスク・コアは今のところ必要ないし、持っているセンチュリオン・コアはとっくに目覚めさせて人をどうこうするような力はないはずだから。」

「分かりました。そういえば言おうと思っていたんですがセンチュリオン・コアの場所は本に載っていましたよ。」

「ほんと！！」

「はい。正確には違いますがおそらく間違いないと思います。」

そういって一冊の本を取り出す。

「今回センチュリオン・コアを手に入れたのは風の神殿の近くです。そして最初に見つけたルーメンは光の神殿の地下です。このことからセンチュリオン・コアはそれぞれの神殿の近隣にあると思われます。」

「なるほど。それじゃあここから1番近いのは火の神殿。」

「近いとは言っても海を渡る必要がありますね。それにロイドさんの話ではルーメンも含め4つそれぞれの手に渡っているそうですから実際にあるかどうかは分かりませんね。」

「それでも行くしかないよ。この地図は正しいの？」

「どうやら世界再生の旅でシルヴァラントとテセアラが1つになったみたいですが、ほぼこの通りで大丈夫みたいです。」

「センチュリオン・コアを目覚めさせられると計画が台無しだから少なくともあの2人の手に渡ることだけは避ける必要があるから急ごう。」

必要な荷物をまとめ、アスカードを出発しよう街の外に出ようとした時

「あっ」

偶然にもコレットと会った。

「あなたたちは！！」

「あの2人はいないみたいだな。」

約束を交わし、殺しはしなとはいえ街中でむやみに戦闘を起こされてはたまらないと思いあたりを確認しいないことを確認すると

「あの2人はいないのか？」

念のためにコレットに尋ねる。

「エミルとマルタのこと？　2人ならパルマコスタに行っちゃったけど。」

とりあえず一安心すると次はコレットが質問する。

「ロイドのこと庇ってくれてありがとう。それでロイドのことについて聞きたいんだけどいいかな？」

そう聞かれ、エルーの方を見ると「サヤが決めていいですよ」とアイコンタクトを送られたのでロイドの情報を聞き出すためにも話を進めることにする。

「分かった。ロイドとはルーメンのセンチュリオン・コアの所で会って、お互いの利害が一致したから今はロイドの手助けをしているんだ。ロイドの目的は分からないがセンチュリオン・コアを集めているらしい。」

「じゃあ、センチュリオン・コアがあるところに行けば。」

「ロイドに会えるかもしれない。こっちからも少し聞きたいことがある。ロイドが世界を救った英雄だということは分かったが、センチュリオン・コアに惑わされないことに納得がいかない。何か知らないか？」

「もしかしたら女神マーテル様の加護を受けているのかも。ロイドは世界樹の名付け親だから。」

それから簡単にコレットから説明を受け

「なるほど、それなら納得がいく。ということはロイドの目的はマーテルに頼まれたものなのかもしれないな。」

コレットから得た情報と今までの情報を整理し思考に没頭する。

「あの！！」

コレットの呼びかけにようやく思考の海から戻ってくる。

「ん、どうした？」

「よければ私も一緒に行ってもいいかな？」

「駄目だ。」

コレットの提案を一蹴する。

「どうして？」

即答されたことがショックだったのか若干涙目になって尋ねてくる。

「私たちはできるだけ目立たないように行動したい。だがお前は世界再生の立役者だ。そんな人間と一緒にいればいやでも目立ってしまう。」

「で、でも私なら神殿の場所まで案内できるよ。」

「むっ。」

手元にある地図では詳しい場所までは記載されておらず、さらにシルヴァラントの分しかないのでコレットの提案は沙耶にっとて悪くないものだった。

「しかし、いいのか？　私たちと来るということはあの2人と敵対することになる。それにあの2人が次に向かう場所は恐らく火の神殿だ。かなりの高確率で遭遇するはず、その時私たち一緒にいたら誤解されるぞ。」

「それは・・・」

「それだけならまだいい。最悪戦闘になって怪我を負うことも負わせることにもなる。今からでもあの2人について言ったほうがいいんじゃないか？」

沙耶の言葉に考え込むコレット。

そして出した答えは

「それでも私はロイドと話したい。エミルとマルタには分かってもらえるように説得する。」

「私たちと一緒にいてもロイドが話してくれるかわからないぞ。それでもいいのか？」

「たぶん私だけじゃ絶対に話してくれないと思う。でもあなたたちと一緒にいれば少しは望みあると思うから。」

力強く答えたコレット。

「エルー、いい？」

「私は大丈夫です。」

「じゃあ。」

「ああ、だがロイドと会えなくても文句は聞かないぞ。」

「ありがとう。」

こうして新たにコレットが加わり、火の神殿を目指す。

第8話

コレットが旅に加わり火の神殿に向かおうと思った沙耶だが地図はあってもどこに港があるか分かるはずもなくコレットと今後の行動について話し合うため1度アスカードに戻っていた。

「火の神殿に行くにはパルマコスタから船で行く方法とハイマの方面から回っていく方法があるんだけど、エミルたちはパルマコスタに行ったみたいだからハイマの方に行った方がいいと思う。」

「航路と陸路ではどれくらい差が出る？」

「う～ん。ここからだと2，3日位かな。でも今は海が荒れてるみたいだから船は出ないかもしれないって聞いたよ。」

「ふむ。分かった陸路から行こう。道案内を頼む。」

今後の行動が決まり、先を越されないためにも早速行動しようとするが

「あのすごく今更なんだけど名前は？」

「そういえばまだ名乗ってなかったな、私はサヤ・カミナギ。」

「私はエルー・ツェッティです。よろしくお願いしますコレットさん。」

「サヤとエルーだね。よろしく。」

お互いの紹介が終わり、パルマコスタから出る船が到着するイズールドに向け出発するが、ここで問題が発生した。
交渉や挑発は得意な沙耶だが、基本的にコミュニケーション能力が低い沙耶は博愛主義のコレットとの接し方が分からず、コレットから話しかけられた時には淡白な答えしか返すことができず、向きになっているコレットはさらに話しかけ、困惑する沙耶は淡白な答えしか返すことができなくなるという悪循環になりとうとう沙耶が根負けしエルーに助けを求めた。

「すみませんコレットさん。サヤは人見知りが激しいのでもう少し手加減してあげてください。サヤもこの機会に少しは人になれる努力をしてくださいね。」

エルーのフォローにより先ほどよりも円滑にコミュニケーションをとれるようになり、少しずつサヤも警戒が薄れ話せるようになっていた。

「ところでどうしてサヤとエルーはセンチュリオン・コアを集めてるの？」

「簡潔に説明すると私たちが探している敵がセンチュリオン・コアを集めている可能性が高い、だから私たちが集めてそれを狙ってきたところを捕まえる為だ。」

「探してる人ってどんな人なの？」

「身体的特徴はなにもわかっていない。そもそもセンチュリオン・コアを本当に集めているかさえ分からない。こっちからも聞いていいか？」

「私に答えられることなら。」

「あの2人が持っているセンチュリオン・コアはどの属性のものだったかわかるか？」

「闇のセンチュリオン・コアだったよ。」

情報を交換しながら歩いていると、突然ヴァンガードの集団が現れた。

「コレット・ブルーネルだな、マーテル教会の犬め、我々ヴァンガードが制裁してくれる。」

行きない現れた後、沙耶たちを囲み同時に襲いかかってくるが

「物騒な連中だ。」

「まったくです。」

襲いかかってきたヴァンガードは不可視の壁に激突し崩れ落ちる。

「なんだお前たちは我々の邪魔をするな！！」

「残念だがそれはできないな。私たちの道案内が終わってからにしてくれ。」

「腐敗した組織は倒さなければならない、そしてその筆頭である再生の神子さえいなくなればマーテル教会は倒壊する。お前たちにはそれが分からないのか。」

コレット自身はシルヴァラント、テセアラの差別はしないが組織であるマーテル教会は違い、文明のレベルが高いテセアラに着き甘い蜜を吸っていることは誰が見ても明らかであり、再生の神子として担がれているコレットはマーテル教会を憎む人からすればシルヴァラント出身でありながらテセアラに加担する裏切り者として見られ、より憎しみを集めていた。

「それなら、マーテル教会を貶めるためにシルヴァラント側の街であるパルマコスタを襲ったヴァンガードは腐敗していないのか？」

「なぜそれを知っている！？」

「ロイドがやっていないと仮定した場合、マーテル教会を貶めて得をするのはヴァンガードだけだ。少し鎌をかけたつもりだったが簡単に話してくれうとは思わなかったな。」

「知られたからにはお前たちも生かしてはおけない。」

そう叫ぶがギムレーの壁はどれほど攻撃しようと破れる気配はなく、沙耶がフレズベルクを抜き暴風を吹き起こし吹き飛ばす。

「サヤ！！　今の話は本当なの！！」

コレットが興奮気味に詰め寄ってくる。

「落ち着け。実際にその場にロイドはいたかもしれないし、偽物がいたのかもしれない。こればっかりは本人に聞かないと分からないが、血の粛清自体はヴァンガードが引き起こした自作自演だ。」

「それじゃあ、みんなにも早く伝えなきゃ。」

「それは無駄だ。そもそも現状でさえ半信半疑の状態で、言い方は悪いがマーテル教会の顔であるお前が言ったところで疑っている連中は信じはしない。」

沙耶の言葉に急激にしぼんでいくコレットを見てサヤが補足する。

「だがヴァンガードが実行したということは分かったんだ。後はそれを公衆の場で吐かせればロイドの疑惑は晴れる。それまでの我慢だ。」

沙耶の言葉でコレットは元気を取り戻し沙耶を抱きしめた。

「ありがとうサヤ。」

「私は道案内が必要だっただけだ。」

純粋な好意を素直に受け取れない沙耶は言い訳に適当なことを言ってしまう。

「サヤは優しいね。」

「だから違う。それよりいい加減に離せ。」

コレットを無理矢理引き離しこっそりとエルーの顔を窺うが、コレットがロイドに好意を寄せているのは明らかなので、本当に感激して抱きついているだけだと分かっているのであんまり怒っている様子はなかった。

「あんまり時間をかけていると先を越されるから、早く行くぞ。」

「サヤはどうして私の名前を呼んでくれないの？」

その質問に沙耶の代わりにエルーが答える。

「サヤは自分が認めた人しか名前で呼ばないんですよ。サヤが名前で呼ぶ人は数えるほどしかいません。」

「それじゃあ名前で呼んでもらえるように頑張るね。」

「勝手にしろ。」

純度１００％の好意に照れる沙耶だった。

第9話

沙耶たちが火の神殿を目指し先に進んでいたが、日が暮れ辺りが暗くなった。

「大丈夫か？」

少し遅れ始めたコレットに振り返る。

「ごめんね。足を引っ張っちゃって。」

申し訳なさそうに謝るが、ほぼ1日中疲れを知らない沙耶とエルーのペースに付いてきたコレットは卑下するどころか賞賛するところである。

「この辺りで1番近い街で今日は休むか。」

「そうですね。私たちは大丈夫ですがこれ以上はコレットさんに無理をさせてしまいますから。」

「わ、私なら大丈夫だよ。」

そう言いながらも顔色は優れず、とてもじゃないがこれ以上沙耶とエルーに付いていくのは難しい。

「気にするな。それに倒れられでもしたらそっちが面倒だ。」

「ごめんなさい。」

それでも迷惑をかけていると俯き謝るコレット。

「はぁ～。こっちはお前がいなければ道が分からず余計に時間をとっていたかもしれないんだ。私たちに迷惑をかけたくないなら明日に備えて素直に休んでおけ。」

沙耶なりに一生懸命に励まそうとしているが、励ますことなどしたことがない沙耶はどうしても厳しい言い方になってしまう。
そして1番近いルインでその日は休むことになり、食事が終わるとコレットはすぐに寝てしまった。

「頑張りましたねサヤ。」

「私にはこういう役は向いてないよ。どうしても命令しているみたいになる。」

「初めてだから仕方ありませんよ。サヤがコレットさんを気遣って休ませたことは間違いではありませんし、なにより今までのサヤならそんなことはしなかったはずです。」

「でもエルーたち以外にはそのままの意味として捉えちゃうから、励まそうとしても命令されたように聞こえてしまう、だから次からはお願い。」

「駄目ですよ。せっかくいい傾向なんですからこのまま頑張ってください。」

「でも私が言っても余計に追い詰めちゃうよ。」

「そうやってコレットさんのことを心配できれば大丈夫ですよ。多

少言い方が厳しくても伝わります。」

「でも・・・」

「怖いのは分かります。でも一歩踏み出さなければいつまでも前に進めませんよ。」

誰も信じたことがないからこそ裏切られるということを知らない沙耶。

今ではエルーやティア、レインといった仲間は信じられるようにはなってきてはいるがこの3人は沙耶を裏切るようなことは絶対にないと信じられる。

だが相手は知りあって数日のコレットなのでそこまでは信じることができず、裏切られるということをしらず、耐性を持たない沙耶は一歩を踏み出せずにいた。

「サヤ、人と人との関係は誰もが私たちみたいに何もかもを打ち明けるような関係になることはできなんです。利用しようと近づいてくる人もいれば打算なしに接してくれる人もいます。人は1と0の関係だけじゃないんです。」

諭すようなエルーの言葉を一言一言噛みしめながら聞いていく。

「今のサヤはまさしく1か0の関係だけです。私たちのよう関係か貸し借りだけの関係だけです。そんなサヤはコレットさんのような人に対してどこまで踏み込んでいいか分かっていなんです。理性では大丈夫だと思っても本能が拒否し痛みから守ろうとしています。そこがサヤの弱くて脆いところです。」

「じゃあ私はどうしたらいいの？」

「それはサヤが決めることです。人と人との関係は結局手さぐりで少しずつしか進めないんです。でもこれだけは覚えていおいてください。この世には打算なにし接してくれる人もいることを、幸いコレットさんはそんな人のようです。この機会にそんな人との距離感を掴んでください。」

そう締めくくる。

「少し考えてみるね。」

「はい。精一杯悩んでください。それはきっと沙耶の心を成長させます。」

そう言うと沙耶は1人部屋を出て行った。

「頑張ってくださいね。」

エルーは出ていく沙耶を見守るように見つめていた。

一晩明け、再び出発する準備が整いルインを出発しようとした時

「昨日は心配してくれてありがとうね、サヤ。」

「っ、こ、今度からは疲れたらその場で言え。そうすればきちんと休憩は取るから。」

「うん。やっぱりサヤは優しいね。」

「ふ、ふん。休んだ分ペースを上げるからしっかりと付いてこいよ。」

照れ隠しに顔をそむけ憎まれ口を叩いてしまう。

「サヤ、それでは昨日の二の舞ですよ。」

「わ、悪い。今日はペースを考えるから速かったら言ってくれ。」

おろおろとしながら再びコレットと向き合う。

「ふふっ、ありがとうサヤ。」

「うっ。」

面と向かってお礼を言われ顔を赤くし唸ってしまう。

そんな沙耶を愛おしそうにエルーは眺め

「頑張ってくださいねサヤ。」

それからルインを出発し、エミルたちに先を越されないためにも先を急ぐ。

それでもちらちらとコレットを見ながら無理をさせないようペースを調整していく。

「そんなに心配なら直接聞けばいいじゃないですか。」

そんな沙耶の様子を見てエルーが助言するが

「ち、違う。私はただ昨日みたいになったら困るからで「本当にサヤはツンデレですね。」うっ。」

そんな会話を交わしながら街道を駆け、人通りがだんだんと少なくなっていく。

「これなら大丈夫そうだな。」

「なにが？」

「一応聞いておくが、この辺りはいつもこんなに人が少ないのか？」

「この先はハイマっている街があったんだけど、今は人が住めるようなところじゃないからこの辺りはあんまり人がいないの。」

「よし、それならあれでいけるな。」

「あれって？」

「今から見せてやる。エルー大丈夫？」

「はい。」

「可能な限り私から離れないように進んでくれ。」

「？」

「いくぞ。」

視線の先にある誰もいない場所までの空間を殺し一気に進む。
アスカードからルイン間は人通りがあり使えなかったがここからは人が少ないので巻き込む心配がないため空間を殺した移動法に変える。

「えっ！？」

コレットも初めて経験すると同じような反応を示す。

「説明は後でしてやる。次行くぞ。」

再び空間を殺し視線の先まで移動する。
これを何度も繰り返し海岸付近にたどり着き、１度現在地を確認するために地図を広げる。

「今どのあたりだ？」

沙耶の問いに気付けば海岸にいることに戸惑いつつも答える。

「海が見えるってことはハイマを過ぎてるから、たぶんこの辺りだと思う。」

「この分なら今日中にイズールドに着けそうだな。」

「えっと、どうやったの？」

「詳しくは説明できないが私固有の移動法だ。」

詳しく説明すれば沙耶の能力のことを話さなければ説明できないため詳しいところはあいまいにして説明する。

「サヤって凄いだね～。」

感心しているコレットだが沙耶としてはあまりこの力は好きではないので複雑な気分だったがそれを悟られないように適当にごまかした。

「それじゃあ出発するぞ。大丈夫か？」

「うん。あんまり走らなくてもよかったから大丈夫だよ。」

そして再出発し沙耶の予想通り、日が暮れる前にイズールドに到着しコレットもそれほど疲れさせることはなかった。

「あとはオサ山道を越えれて、砂漠の中にあるトリエットまで着けば火の神殿はすぐそこだよ。」

「山越えに砂漠か、なかなか厳しい旅になりそうだが大丈夫なのか？」

「再生の旅の時通ったから大丈夫だよ。それに今は砂漠に雪が降っているっていう噂だからそんなに暑くはないみたい。」

「砂漠に雪？」

「たぶんセンチュリオン・コアのせいだと思う。」

それを知っても今更センチュリオン・コアを集めることをやめるつもりはない沙耶だがやはりコレットの顔を窺ってしまう。

「この世界の人には悪いが、異常気象についてはしばらく我慢してもらうことになる。それも私個人の事情だ、それでも私たちに付いてるか？」

「サヤたちが悪い人じゃないって分かってるから大丈夫だよ。でもいつかは戻してあげてね。」

「それはロイド次第だ。私たちの目的が達成されればすべてロイドに渡すことになっている。」

「それなら大丈夫だよ、ロイドにもきっと何か理由があってセンチュリオン・コアを集めてるはずだから、解決したらきっと元に戻してくれるよ。」

そうしてイズールドでの一夜が明け、オサ山道へと向かう。

第１０話

沙耶たちがイズールドを出発しオサ山道を登山中、当然魔物がおり沙耶たちに襲いかかってくる。
山道というだけあり道が曲がり直線にしか進めない沙耶の移動法では効率が悪く、またトリエットからの商人もぽつぽつと物資を運輸しており地道に進んでいた。
その為襲いかかってくる魔物は無視することもできず撃退していた。

「沙耶とエルーって強いんだね～。」

ギムレーとフレズベルクの防御を前に近づくことができず、エルーの魔弾、沙耶の風の刃で次々と魔物を倒していく。

「それにしてもきりがないな。」

「そうですね。こういう時レインさんがいれば楽なんですけど。」

「そういえばあの2人はいったいどこにいるんだろう。」

「もしかしたらテセアラの方に落ちたのかもしれませんね。」

「交渉術なんかはある程度レインに教えているから大丈夫だとは思うがもし別々に落とされているなら心配だな。」

「戦闘においては問題ないとは思いますが確かに心配ですね。」

「どうしたの2人とも。」

「私たちの仲間が後2人いるんだがどこにいるか分かってないんだ。」

「その2人もサヤたちみたいに強いの？」

「火力面ではティアは私たちの中でも最強だな。」

「レインさんはサポートが得意です。もちろん普通に戦っても十分に強いですが。」

「へぇ～。サヤたちって本当に強いんだね。」

そんな会話を交わしながら進んでいくうちに頂上まで到着し、後は下るだけになった時商人と思われる数人が魔物に襲われていた。

「護衛も付けないとは不用心だな。」

「護衛はいるみたいですよ。ただし倒れているみたいですが。」

荷車の傍に武装を固めた護衛が死んではいないようだが、怪我を負って倒れていた。

普段なら面倒なので無視するところが

「助けなきゃ！！」

コレットが飛び出し魔物に向かって行く。

この辺りの魔物は数は多くてもたいした強さではなくコレットでも十分に対処できるようなので傍観を決め込むつもりだったが数が多すぎて下手をすればコレットまで怪我を負いかねない状況だったので加勢する。

沙耶とエルーが加勢したことで魔物たちは近づくことができず一方的に倒され、勝てないと分かった魔物は逃げて行った。

「ありがとうサヤ、エルー。」

「お前は私たちの案内をする約束で連れて来てるんだ。勝手なことをするな。」

「コレットさんが心配だからってそういう言い方は駄目ですよ。」

「わ、私は心配なんか「サヤ。」うぅ。」

「そういうわけですコレットさん。1人で勝手な行動とらないでくださいね。」

「ごめんねサヤ。」

「もうこんなことはするなよ。」

沙耶が照れ隠しの為にいつも通り憎まれ口をたたくが、サヤのことが少しわかってきたコレットは怒っているわけではないと分かっていたので笑顔でうなずいた。

「あの～。すみませんが私たちをトリエットまで護衛してはいただけませんか。もちろんお礼は致します。」

先ほど助けた商人が交渉を持ちかけてくるが

「断る。」

即座に断り先に進もうとするが、コレットが呼び止める。

「サヤ、ついでに連れて行ってあげたら駄目かな？」

「駄目だ、私たちは先を急ぐ必要がある。それにそいつらに護衛の必要はない。」

「えっ？」

意味が分からず首をかしげるコレット。

「そうだろう。何物かは知らないが少なくとも商人なんかじゃないはずだ。」

「なにをおっしゃいますか、私たちはトリエットまで物資を運輸している最中で護衛が倒されたんですよ。」

「いい加減にしろ。護衛が倒れたにもかかわらず荷車に傷1つ付いていない、それにそこに倒れているやつは倒れているふりをしているだけだろう。」

「っち、ばれたらしょうがない。」

沙耶に指摘され態度が急変する。

そしてすぐに離れようとするコレットを捕まえ首筋にナイフを当てる。

「動くなよ。動けばこいつを殺すぞ。」

「サ、サヤ。」

不安げに見詰めるコレット。

「お前はお人よしすぎる、少しは他人を疑うことを覚えろ。それといますぐ開放すれば見逃してやる。」

溜息をつきながら、エルーとアイコンタクトを済ませる。

「お前たちこそ武器を離せ、さもなくばこいつを殺す。」

「交渉は決裂だな。」

そう言うと沙耶が近付いていく。

「動くな、こいつを殺すぞ。」

「やれるものならやってみろ。」

そう言われ、ナイフを動かそうとするがもちろん動かない。
不可視のグレイプニルを回避しようとするならロイドレベルの実力がなければ不可能であり、もちろん目の前にいる男たちにそんな実力などあるはずもなく易々と拘束する。
動けなくなった男からコレットを開放しフレズベルクを突き付ける。

「さてどうしようか？」

「わ、悪かった。もうしないから許してくれ。」

「そんな言葉が信用できるとでも？」

言葉に詰まった男が急に笑みを浮かべた瞬間、間に魔物が通り沙耶が後ろに下がる。
それと同時に荷車に隠れていた男の仲間が魔物を操り、コレットとエルーにも魔物を向かわせる。

「形勢逆転だな。死ね！！」

「馬鹿だろ。」

襲いかかってきた魔物はすべてグレイプニルに拘束され切り刻まれる。

「魔物に自分たちを襲わせていたんだ。魔物を操るやつが隠れていることくらい簡単に予想できる。」

なすすべがなくなった男たちは命乞いを始めるがもちろん聞き入れることはせず意識を奪った後荷車に放り込みグレイプニルで拘束した。

「ごめんねサヤ。」

「もう謝るな。もう気にしてない。」

「じゃ、じゃあお礼にこれを受けっとって。」

そう言って取り出したのは妙な色に輝く石だった。

「ちょっと前に偶然見つけてね、賢者の石っていう珍しい物だって聞いてたからもってたんだけど、私には使い道がないからお礼に受け取って。」

「だから私は気にしていないからお礼など必要ない。それに珍しい物ならとっておけ。」

「でも私のせいで2人を危険なめに遭わせちゃったから。」

「あの程度のことなら前の世界でいやというほど経験している。」

平行線のまま話が進まず、無駄に時間を過ごしてしまうのでここでエルーがフォローを入れる。

「コレットさん、私たちがあなたを道案内に頼んでいるのですから身を守るのは当然のことです。それとサヤ、照れくさいのは分かりますがお礼くらいは素直に受け取ってください。」

エルーの言葉を受け、再び向き合う。

「エルーの言うとおり私たちは道案内を頼んでいるんだ。だから気にするな。」

「それじゃあ、お友達になって。それなら私も気にしなくてもよくなるから。」

「それで気がすむならそれでいい。」

「それじゃあ、はい。私とサヤがお友達になった記念。」

そう言って賢者の石を手渡す。

「まったく、お前は変なところで頑固だな。」

そう言いながらも嬉しそうに石を受け取るサヤ。

「仲直りもすんだようですから行きましょうか。」

エルーが締めくくり再びトリエットに向かい進み始める。

第１１話

オサ山道を無事に越え、今トリエット砂漠を横断していた。

「本当に砂漠に雪が降っているとは。」

「これはこれで水不足が解消されて喜ぶべきところなんでしょうか。」

「突然生活環境が変わっちゃうと逆に生活しずらくなると思うよ。」

「簡単にはいかないものですね。」

「２人ともトリエットが見えたよ。」

雪が降っていようとも砂漠を横断しようとしている者は少なく、空間を殺した移動法を使っていたのでコレットも疲れることはなく日が暮れる前にトリエットまで到着することができた。

「火の神殿はここからどれくらいの距離だ？」

宿の一室でいつものようにこれからの行動を決める為、土地勘のあるコレットを交え話し合っていた。

「普通に歩いて２，３時間程度だからサヤの移動法を使えばすぐに着くと思うよ。」

「異常現象が治っていないということはまだセンチュリオン・コアはあの２人が手に入れていないのか、第３者が手に入れているかの

どっちがだな。」

「ちなみにサヤはどっちだと思いますか？」

「ロイドが言っていたすでに誰かの手に渡っているセンチュリオン・コアがここのものじゃないならヴァンガードの線は消える。」

「どうしてですか？」

「他のセンチュリオン・コアを手に入れようとするなら私たちとすれ違ってもおかしくない。でも、ここまで来る途中それらしき人はいなかったから。」

「最悪でもロイドさんが手に入れていくれていればいいんですけど。」

「なんにしても行ってみなきゃ分からないよ。」

沙耶の言葉に2人が頷き話し合いが終わった。

「おやすみなさい。」

コレットと修身の挨拶を交わすと沙耶とエルーは別の部屋に移動した。

「エルー、本当にするの？」

「いくらコレットさんが安全とはいえ他の人と仲良くしている沙耶を目の前で見ていたんですよ。私もいろいろと我慢していたんですから今日は我慢する気はありません。」

抵抗しない沙耶を押し倒し、慣れた手つきで服を脱がし始める。
「でも前みたいに一晩中は駄目だよ。」
「それは分かりません。沙耶が可愛すぎて止まれないかもしれませんから。」
自然に唇を重ね、お互いの気分が乗ってきた時
「サヤ、一緒に寝てもいい・・・・・えっ。」
突然コレットが部屋に入ってくる。
今の沙耶とエルーは半裸の沙耶にエルーが覆いかぶさりキスをしている状況であり、サヤも全く抵抗をしていないことからどこをどう見ても情事の最中であり、それに気付いたコレットは顔を真っ赤にするが、見られた沙耶は逆に顔が青くなる。
「ご、ごめんなさい！！」
勢い良くドアを閉め、部屋から出ていくコレットを呼び止めようとするが声が出ずそのまま黙って見ることしかできなかった。
「あ、あぁ。」
ようやく打ち解けてきたコレットにエルーとの関係を見られてしまい肩を落とす沙耶。
同性同士はどうやらこの世界でも普通ではないらしく、それを知られた沙耶はかなり落ち込んでしまう。

「明日からどんな顔で会えばいいんだ。」

「案外大丈夫ではないでしょうか。」

「無理だよ。いくらなんでもこれはそう簡単には受け入れられないよ。」

常識をものともしない沙耶だが常識は普通に持っており、同性同士の関係は常識に当てはまらないことは分かっていた。

「ふ～。今日は止めにしましょうか、今の状態ではお互い楽しめないでしょうから。」

「ごめんねエルー。」

「大丈夫ですよ。サヤが私から離れていかない限りいくらでも機会はありますから。」

「うん。誰に何と言われても私はエルーを愛してる。でも今日はちょっとそういう気分にはなれないから。」

「分かっていますよ。その代わり明日コレットさんと話し合ってくださいね。」

「・・・・うん。」

今更エルーとの関係をどう言われようが気にするつもりはないつもりだったが、コレットに知られたのは意外とショックが大きかったのか一晩中明日のことで悩んでいた。

そして翌日、宿のロビーでコレットと合流すると話を切り出した。

「少し話があるんだが、ちょっといいか。」

「私も聞きたいことがあったから大丈夫だよ。」

沙耶は逃げ出したい気持ちを必死に押し殺し、コレットと向かい合う。

そして先に沈黙を破ったのはコレットだった。

「昨日のあれは私の勘違いだよね。女の子同士でだなんて、そんなわけないよね。」

「勘違いじゃない。私とエルーは付き合っていて、結婚もするつもりだ。」

コレットの言葉を否定し、沙耶とエルーの関係を告げる。

「本当なの？」

「ああ。」

それから沈黙が流れ、コレットが俯き表情がうかがえず耐えられなくなった沙耶が

「もし私たちから離れたかったら離れてもいい。約束通りロイドと会ったらお前に会いに行くように伝えておく。」

そう言って宿を出ようとするが

「待って！！　えっとごめんね。祝福したいんだけどなかなかいい言葉が思い浮かばなくて、だからもう少し待って。」

おろおろしながら呼び止めるコレット。

「おかしいと思わないのか。言っておくが私たちは両方とも女だぞ。」

「ちょっとは変だと思うけど、サヤとエルーは愛し合ってるんだよね？」

「ああ。」

「それなら大丈夫だよ。お幸せにね2人とも。」

予想外の展開に呆然とする沙耶に

「だから言ったじゃないですか、コレットさんなら大丈夫ですよって。」

エルーが肩をたたく。

「えっと、お祝いには何がいいのかな、その前にもっと気の利いた言葉を言わなきゃ、でもなにも思いつかないよ～。って、きゃあああ。」

1人で暴走しているコレットがなにもないところで躓き派手に転ぶ。そんなコレットに沙耶が手を差し伸べる。

「あ、ありがとう。」

コレットが沙耶の手を取り立ち上がると

「あ、あのね上手には言えないけど、本当に2人のことは祝福してるからね。」

「本当に変わったやつだ。」

「ひ、ひどいよ～。」

笑みを浮かべる沙耶に対し、むくれるコレット。

「でも、ありがとうコレット。」

「えっ、今名前で。」

「行くぞ、あまりとろとろしていると先を越されてしまう。」

「ま、待ってよサヤ。」

「ふふっ、よかったですねサヤ。」

そしてついに火の神殿にたどり着き、再びセンチュリオン・コアを巡る戦いが始まる。

第12話

トリエットを出発した沙耶たちは、コレットの予想通りに1時間も経たないうちに火の神殿に到着していた。

「ここが火の神殿だよ。」

「足跡がまだ新しいところをみると、どうやら先を越されているみたいだな。」

「まだあまり時間がたっていないようですし可能性はありますね。急ぎましょう。」

来てすぐに状況の確認を始めた2人は見事にコレットを無視し、無視されてコレットはちょっとへこんでいた。

「どうした?」

「な、なんでもないよ。それより急ごう。」

火の神殿の内部に入り襲いかかる魔物を瞬殺しながら先に進んでいく。

しかし全速力の沙耶とエルーについていくことができないコレットに合わせながらしか進めず刻一刻と時間が過ぎていく。

「サヤ、私なら大丈夫だから先に行って。」

「私はコレットをロイドと合わせるという約束で道案内を頼んでいるんだ。それなのにコレットがいなかったら約束を破ってしまうこ

とになるから却下だ。」

「で、でも・・・・・」

「私に友達との約束を破らせる気か。」

「サヤ・・・急ごう、私も頑張るから。」

沙耶の言葉に激励され立ち直るコレット。

「コレットさん、失礼します。」

そう言うとコレットをグレイプニルで縛りつけ

「サヤ、コレットさんをお願いします。」

そのまま沙耶と結び付ける。

「分かった。しっかり口を閉じてろ。」

コレットを背負いギアをトップスピードに入れる。
そしてフレズベルクで風の抵抗を無くし、遺跡を駆け抜ける。
そして、遺跡の最奥に到着し見た光景はロイドが膝をつき、刃を突き付けられている姿だった。

「ロイド！！」

コレットが叫ぶと同時に沙耶とエルーがロイドの救出に向かうが

「通さないよ。」

沙耶とエルーの前に氷の壁が立ちふさがるが、収束させた魔弾が氷の壁を貫き穴をあける。
そして、その穴を沙耶が通り抜けロイドに刃を突き付けている者に斬りかかる。
しかし、相手もそれに反応し、振り向きざまに剣を振るい金属音が鳴り響く。

「サヤ？」

つばぜり合いになりお互いの顔を合わせた時、そこにあった姿はティアだった。
ティアはいきなり現れた沙耶に驚き体を硬直させる。

「吹き飛べ。」

その隙に暴風でティアを吹き飛ばし、距離をあけすかさずナイフを投擲する。
しかし、水の塊に阻まれティアには届かない。

「ロイド、センチュリオン・コアは？」

「ルーメンは別のところに置いている。イグニスはここだ。」

「それを渡して一旦引け、そうすれば追ってはこないはずだ。それにあの2人はお前が相手でも厳しい。」

「分かった。後は頼む。」

ロイドがイグニスのセンチュリオン・コアを差し出す。

「任せておけ。それとコレットが来ている。少しだけでいい話てやってくれ。」

「・・・・分かった。」

ロイドが駆け出す瞬間、エミルが逃がすまいと追撃を加えようとするが

「動かないで！！」

レインが叫びエミルが急ブレーキを踏み、その隙にロイドはその場から離脱した。

「どういうつもりだレイン。せっかくのチャンスを。」

なにかのスイッチが入っているのか、以前であった時より態度が大きい。

「エミルもだけど他のみんなもその場から絶対に動かないで、その場所だけが安全な場所だから。」

レインの真剣な呼びかけに押され、全員その場から動かなくなった。

「さすがレインさんですね。少しでも動けば捕まえられたんですけど。」

全員がロイドに注目している間にグレイプニルを張り巡らせ少しでも動こうものなら、身動き一つ取れないよう捕縛されてしまう。

しかしそんな中ティアだけは違っていた。

「もちろん説明してくれるよねサヤ、エルー。」
グレイプニルを焼き切り沙耶とエルーの前に進んでいく。
「説明も何もない、つまりはこういうことだ。」
ティアの心臓めがけナイフを投擲する。
しかし、ティアはそれを容易に掴む。
「それなら遠慮はいらないね。」
瞬間ティアがレヴァンティンを振り灼熱の業火が沙耶を襲う。
「私が沙耶に傷を付けさせると思っているんですか？」
しかし、エルーがギムレーで防ぎ沙耶の横に立つ。
「サヤとエルーが相手なら私も少し本気を出すよ。シンモラの錠第6解放。」
周りを巻き込まずに済む最大限まで解放し、ティアの周りに炎が渦巻く。
「最後にもう一度だけ言うよ、センチュリオン・コアを渡して。」
「断る。」
「そう。それならこれでお別れだね。」

レヴァンティンが振り下ろされ、紅蓮の炎が沙耶の視界一面に広がり沙耶たちを飲み込もうとするが

「お別れにはまだ早いですよ。」

ギムレーを最大出力で展開し炎を防ぎきる。
沙耶たち以外は目の前で起きていることが信じられずただ魅入っていた。

「みんな、ここは1度引こう。あの2人からセンチュリオン・コアを奪い返すのは難しい。」

「あの2人ってそんなに強いの？」

銀髪の少年がティアに尋ね、その質問にレインが答える。

「少なくともティアが全力を出せなければ絶対に勝てない。」

「それなら全力を出せば「それは無理。ティアが全力を出せば辺り一帯焼け野原になる。」」

絶対的な力を持っている2人がここまで警戒するので、他のメンバーは自然に力が入る。

「サヤ、今回は諦める。だからこの場は見逃して欲しい。」

「断ったら？」

「世界ごと焼きつくす。」

「いいだろう。しかし・・・・」
「はあああああ！！」
「こいつはどうする。」
沙耶の上から斬りかかってきたエミルをかわし、瞬時に拘束する。
「できれば見逃して欲しい。」
「まぁこの程度のやつがいたところで問題ない。返してやる。」
拘束したエミルを蹴り飛ばし、ティアたちの中に突っ込ませる。
「なめやがって。調子に、がはっ！！」
「実力の差くらい見極めないと早死にするよ。」
再び斬りかかろうとしたエミルを気絶させる。
「なにするのティア！！」
マルタがティアの行動を咎めるが
「いまのはエミルが悪いよ。」
レインがマルタをたしなめる。
「それじゃあねサヤ。」

そう言ってティアたちは去って行った。

第１３話（前書き）

交代勤に入ったので更新時間が不定期になります。

第13話

ティアたちが去り、無事にセンチュリオン・コアを手に入れる事ができた沙耶たちはコレットと合流するためにしばらくその場で待機していた。

「それにしても本当にあの2人もこっちに来てたんですね。」

「時間も場所もばらばらだったけどね。」

「どうするつもりですか？」

「どうって？」

「とぼけても無駄ですよ。あの状況でサヤがナイフを投げるなんてことはありません。それでも投げたということは何かしらメッセージを刻んでいたんでしょう。」

「やっぱりエルーはごまかせないね。とりあえずあの2人とはトリエットで待ってるって伝えたからその時の状況で考えるよ。」

「それにしてもティアさんもあそこまで本気でやる必要なかったんじゃないでしょうか？」

「相手の目を欺くためだからある程度本気を出してもらわなきゃいけなかったからしょうがないよ。」

「あれもサヤの指示ですか、それなら仕方ありませんね。それにしてもコレットさん遅いですね。」

沙耶たちが待ち始めてすでに15分以上が経過していた。

「ティアたちとすれ違っても私たちのことを話さない限り大丈夫だと思うけど、一応探してみようか。」

「サヤ、そういうときは素直に心配だからと言わないから誤解されるんですよ。」

エルーからの指摘に反論しようとしたがなにを言っても結局は負けてしまうので黙って頷いた。

そして、探しに行こうとした時コレットが現れ近づいてくる。

「なにをしていたんだ？」

「エミルたちと顔を合わせないように隠れてたんだけどいつまでも来ないから出てきちゃた。」

「そうか。それでロイドとは話せたか？」

「うん。ちょっとだけ。」

明らかに声が暗くなり俯きながら言うコレットを見て、ロイドは本当に少ししか話さなかったことが分かる。

「どうするコレット、次にロイドと会えても事情は話してくれないと思う。それでもまだ私たちに着いてくるか？」

「サヤは約束通りロイドと会わせてくれた。だから私も最後まで道案内を続けるよ。」

「分かった。とりあえずトリエットに行こう、状況に応じて次に行く場所は変わってくる。」

コレットと合流し、ティアたちと会うためにトリエットへ向かい合流場所に選んだところには既にティアとレインがいた。

「探したよサヤ。」

「それはこっちもだ。とりあえず無事そうで何よりだ。早速だが私たちがセンチュリオン・コアを集めている理由だが・・・・・」

沙耶がティアとレインに理由を説明する。

「それでどうするつもり？　私たちもサヤについて行ったほうがいい？」

「どうすればいいと思うレイン？」

今までの成長の成果を試すようにティアの質問の答えをレインに振る。」

「そうですね。私とティアはこのままエミルたちの方について行ってセンチュリオン・コアを目覚めさせられようとしたところを止めて奪取する。サヤさんたちは私たちとは別のセンチュリオン・コアを探しに行く。どうですか？」

「合格だ。」

沙耶の判定にほっとするレイン。

「ティアたちが次に向かう場所は分かってるのか？」

「確かフラノールって所って言ってた。」

「コレット、そこの近くに神殿はあるか？」

「氷の神殿があるよ。」

沙耶たちの雰囲気になんとなく口を出しづらく黙っていたコレットが口を開く。

「「サヤ（さん）が名前で呼んでる・・・・」」

「コレット・ブルーネルです。サヤとはこの前お友達になって神殿までの案内をしてます。」

沙耶が反論しないことから嘘ではないということが分かり、説明を求めるようにエルーの方を見る。

「サヤの人嫌いを治そうと前々から思っていたんですがなかなかいい人がいなかったです。そこでコレットさんと出会いまして、サヤの人嫌いを少しでも治してくれればと思っていたんですが予想外にサヤが気に入ったみたいで。」

「へぇ～。まだこっちに来て1週間くらいなのに。」

「ほんとだね。私の時は辛らつな言葉をかなりもらって、1度徹底的に落ち込まされたのに。」

「レインはまだいい方だよ。私なんか1ヶ月くらいずっと無視されたり、冷たい態度だったんだから。」

ティアとレインはコレットを見ながら沙耶に認められるまでのことを思い出していた。

「いちいち昔のことを持ち出すな。それよりコレット、氷の神殿以外でここから近い場所はあるか？」

「光のセンチュリオン・コアはもうないんだよね。それじゃあシルヴァラントにある神殿は水だけだよ。」

「それなんですが、水のセンチュリオンは主であるラタトスクのもとを離れて、他の人と一緒に行動しているみたいです。」

レインが手に入れた情報を話し、水の神殿は候補から潰れる。

「それじゃ後は、雷の神殿か地の神殿なんだけど雷の神殿はレアバードっていう空を飛ぶ乗り物か、海を渡っていく乗り物がないといけないから地の神殿の方がいいと思う。」

消去法で雷の神殿が消え残りの地の神殿に決定する。

「よし、それじゃあ私たちは次は地の神殿に行く。ヴァンガードが1つ持っていると言っていたからもしかしたらないかもしれないが、行動しないよりはましだろう。」

「ＯＫ。そう言えば私たちがセンチュリオン・コアを持っていても大丈夫なの？」

沙耶は膨大な魔力を解呪に回しているので惑わされることはないが、ティアたちは魔力はあっても属性をもった魔力しかないので解呪に回すことができないため抗うことができない。

「シンモラの錠で魔力を抑え込んでおけば恐らく大丈夫だ。」

「サヤさん、もし私たちがセンチュリオン・コアを奪取した場合どこで落ち合いますか？」

前の世界で使っていた通信用魔具は突然連れてこられたため家に置きっぱなしになっているのため連絡する手段がない。そこで1番この世界に詳しいコレットに話を振る。

「コレット、どこかいい場所はないか？」

「テセアラに行くんだったら王都メルトキオが1番だと思う。」

「それじゃあ2週間以内に1度メルトキオで落ち合おう。」

「分かりました。そろそろ行かないと怪しまれるかもしれませんから行きます。」

「悪いがレイン、先に行っててくれないか、少しティアに用事がある。」

「分かりました。適当にごまかしておきます。」

そう言うとレインはエミルたちに合流しに人ごみに紛れた。

「用事って？」

「私の新しい魔具のことについてだ。この前エルーと戦ってみて分かったんだがフレズベルクはあくまで守りの為の魔具だ。だから私でも扱える攻撃用の魔具を作りたい、ある程度考えているんだがティアにも意見を聞きたい。」

「OK。それでどんなものを作るの？」

沙耶が考えている魔具の概要を簡潔に説明すると

「確かにそれならサヤにも制御できると思うけど、そんな高度な術式を刻めるものなんてそうそうないよ。」

「それにはこれを使うつもりだ。」

沙耶が取りだしたのはコレットとの友情の証である賢者の石。

「確かにこれならいけるかも。ここを出発する前に術式だけは刻んでおくからそこからはサヤの好きな形に仕上げて。」

「ありがとう。私たちはここの宿にいるから出来上がったらここに来てくれ。」

「OK。サヤの頼みだからね、急ピッチで仕上げるよ。」

ティアに賢者の石を渡し、ティアはエミルたちに合流するために人ごみの中に消えていった。

「それじゃあ今日は休もう。」

日が暮れ始め、雪が降ってるトリエットはますます気温が下がり空気が凍えていた。

「そう言えばエルーはどうやってサヤに認められたの？」

ティアやレイン、また自分がサヤに名前を呼んで認められるまでに苦労したことを思い出し、１番サヤに近いエルーはどうやって名前を呼んでもらるようになったのか気になったコレットはエルーに聞いていみる。

沙耶はその時のことを思い出し顔を赤くしていた。

「押し倒して無理矢理呼ばせました。」

予想外の答えに凍りつくコレットとあの頃のことを思い出し、あの時は変なテンションだったなーと遠い目をしている沙耶。

そして、ようやく正気に戻ったコレットが詳しく聞こうとすると。

「あれはサヤと初めて会った時でした。当時の私はまだ戦えるような力を持っていませんでしたからサヤに護衛してもらうことになったんです。その時お互いに自己紹介をしたんですが、サヤは家名で私のことを呼んだので名前で呼んでくれなかったらキスをしますよと押し倒して迫ったら呼んでくれるようになりました。」

「えっと、どうして押し倒したの？」

コレットの純粋な考えでは何度その状況を想像してもその結果には至らず、尋ねるが

「それはサヤが目を合わせただけで顔を真っ赤にするんです。そんなものを見せられたら押し倒すにきまっているじゃないですか。」

理解不能な考えに流石のコレットも賛同することができず、スイッチが入ったのかさらにエルーが惚気話を続ける。

「サヤは今もですがかなりの恥ずかしがり屋さんなんです。特に私と出会ったころのサヤは名前を呼ぶことさえ恥ずかしがってましたから。なので押し倒されてもあんまり抵抗できなかったんです。そしてその時のサヤの表情は最高に可愛かったです。」

沙耶はエルーが語る話しを聞かないで済むように、どんな魔具に仕上げようか考えることによって現実逃避していた。

「顔を真っ赤にしながら、息を乱し涙目で私を見上げてきた時は本当に滅茶苦茶にしてあげたいと思いましたよ。そう思いませんかコレットさん？」

「えっと、実際に見てみないと分からないかも。」

突然話を振られるコレットだが、やはりエルーの考えについて行けず曖昧な答えを返す。

「そうですか、残念ですがいくらコレットさんといえどサヤの乱れた表情は見せてあげませんよ。」

コレットはすでになにもいなくなっていたがエルーは止まらない。

「サヤは今でこそ少し慣れてきましたが、少し虐めてあげるとすぐに恥ずかしがるんですよ。この前も「うわあああああああああ／／／／／／」どうしたんですかサヤ、今から1番いいところなんですけど。」

まったく悪びれた様子もなく続きを語ろうとするが沙耶の羞恥心が限界になり大声をあげてしまう。

「もうやめて、これ以上は耐えられない。」

「そうですか、残念ですねこれからエッチしている時のサヤがどれほど可愛いか語るつもりだったんですけど。」

その言葉に沙耶だけではなくコレットも顔を赤くしてしまう。
後にどんなことを話すつもりだったかこっそり教えてもらった沙耶は止めておいてよかったと心の底から思った。
その話は聞いただけで沙耶の尊厳を一瞬で消しさる程の話であり、聞かれたら一生顔を合わせられないだろうと思った沙耶だった。

第１４話

センチュリオン・コア争奪戦の翌日、流石に一晩では終わらなかったようなので沙耶たちは特にやることもなく暇を持て余していた。
そんな中、沙耶は１人悩んでいた。

「どうしたんですかサヤ？」

そんな様子を見かねてエルーが声をかける。

「私の力のことをコレットに話すべきなのか悩んでる。」

「そのことですか。」

「エルーはどっちがいいと思う？」

「恐らくですが、コレットさんなら大丈夫だと思いますよ。そもそもサヤもあまりその力を多用していませんし。」

「私もそう思うけど・・・」

この問題はサヤが歪んだ原因ともいえるものであり、エルーと出会うまで生きてきた１５年間、沙耶を孤独にしていた問題。
１度人の温もりを知った沙耶は自分から離れていくかもしれない恐怖が本能的にあり、理性で分かっていもそう簡単には決断することができない。

「しかし、私は話さないというのもありだと思いますよ。」

「でも友達には隠し事はしたくない。」

話せば離れていくかもしれないという恐怖がありながら、認めた相手には隠し事をしたくないという感情が沙耶を悩ませていた。

「サヤ、確かにコレットさんはサヤの力のことを知っても離れては行かないと思います。しかし、コレットさんは私やティアさん、レインさんとは違うんです。私たちのサヤに対する信頼は信仰と言ってもいいくらいのもです。私は恋人として、ティアさんは同じような痛みを励まし合い乗り越えた親友として、レインさんは尊敬する人としてそれぞれ立場としては違いますが、私たちは共通してサヤに絶対的に信用しています。」

だからこそ沙耶が侮辱されたら全力で怒り、たとえそれが世界でも沙耶を傷つけようものなら排除する。

「しかし、コレットさんは他にも仲間がいます。ロイドさんという想い人もいます。私たちと同じようになろうとすれば、それはコレットさんが仲間を捨てるか、仲間全員が同じようになるかどちらかです。故にコレットさんは私たちのようにはなれません。」

エルーの言葉を聞いた沙耶は他の人にはわからない程度に顔をこわばらせた。

しかしエルーがそれを見逃すはずもなく言葉を紡いでいく。

「前にも言いましたがサヤは1か0しかありません。そして今のコレットさんは0．5位のところで、それはサヤにとって耐えがたいものなのかもしれません。それでもコレットさんとの関係はこれ以上進むことはないと思います。だから0．5の存在を受け入れてください。それができれば最初の質問の答えが出てくると思います。」

そう言って話を締めくくる。

「いつもいつもありがとう。エルーが恋人で本当によかった。」

「困っている沙耶を放ってはおけませんから、それに私もサヤのおかげでいろいろと学ぶこともできましたからお互い様です。」

「うん。もう少し考えてみる。」

「分かりました。では失礼します。」

自然に部屋を退出し、1人でゆっくりと考えるよう配慮する。
これからどうしようかと部屋の前で考えていると、コレットがやってきた。

「エルー、サヤいる？」

「いますが、今はそっとしておいてください。少し考えたいことがあると言っていましたから。」

「そっか。それじゃあエルーがいた世界の話を聞かせて。」

「それでは私とサヤが出会った時の話からにしましょう。」

それから沙耶たちが経験してきた魔王との戦いを沙耶の力のことをぼかしながら話し、途中から沙耶についての話に変わり、沙耶が出てくるまで延々と惚気話を聞かされたコレットだった。

それから沙耶が出てくると、宿のロビーで顔を赤くしながら聞いているコレットと沙耶のことを熱く語っているエルーの姿があった。そしてエルーが沙耶に気付き手を振ると、コレットがビクッと跳ねた。

「どうしたんだそんなに驚いて？」

「な、なんでもないよ。」

沙耶の顔を見た途端、赤かった顔がさらに赤くなる。
その様子を見て大体の予想がつき、エルーの方を振り返る。

「エルー、コレットに何話したの！！」

「私とサヤが出会って魔王を倒したことからベッドの上のサヤがどれほど可愛いかという話です。もちろん大事なところは言っていませんよ。」

その大事なこととは沙耶の力のことなのかベットの上の話なのか分からないが、顔を真っ赤にしているコレットをみると後者はあり得ない。

「コレット、いま聞いた話はすべて嘘だ。だから気にせずすべて忘れろ。」

「嘘とは酷いですね。サヤは忘れてしまったんですか？　アスカードの舞台で縛られて喘いで「エルー！！！！！」」

そのことも聞いていたコレットはその時の情景を想像してしまい、これ以上ないくらいに顔を赤くし俯いてしまう。

沙耶もその時のことを思い出してしまい顔を赤くしながらエルーを止めようとする。
エルーは純粋に沙耶が可愛いと自慢しているつもりなので逆にたちが悪かった。

「サヤってすごいんだね／／／／」

「いったい何を聞いたんだ！！」

「えっと、恥ずかしいから耳貸して。」

沙耶の耳元でエルーから聞いたことを話していくと沙耶が凍りつく。

「すべて話していたら時間がなかったので特に可愛かったものを選んでおきましたよ。」

凍りつく沙耶に満面の笑みで告げるエルー。
だんだんと恥ずかしさがこみあげ、涙目になる沙耶。

「大丈夫だよサヤ、サヤがどれだけエッチでもずっと友達だからね。」

本人は善意で言っているつもりだがサヤにとってはとどめの一撃となり

「ぐすっ・・・」

羞恥心が限界に達し泣き始める。
ロビーには他にも人がいる為部屋に入り、入った途端コレットに泣きつく。

「ぐすっ・・えるぅの・・うっ・・・ばかぁ・・」

「えっとサヤ、大丈夫？」

「すみません、少々やりすぎました。」

普段凛々しい沙耶が子供のように泣きじゃくっている姿に困惑するコレット。

泣いているサヤも可愛いと思いながらも流石にやりすぎたと反省し謝るが

「でも・・ひっく・・・頭の中では・・・ぐすっ・・・変なこと考えてる・・・」

エルーが沙耶の考えていることが分かるように、沙耶もエルーの考えていることが分かり図星を突かれたエルーはどうやって慰めようか必死に考えていた。

そんななかコレットが口を開いた。

「駄目だよサヤ。ちょっとやりすぎたかもしれないけどエルーだってサヤのことが好きで自慢の恋人だからつい喋っちゃったんだよ。だから許してあげよう。」

あやすような声で沙耶に語りかける。

「エルー・・・もうこんなことしない？」

「はい。今回のことで反省しました。」

「それじゃあ仲直りだね。」

泣きついていた沙耶を引き離しエルーのもとに連れて行く。
すると沙耶がエルーに抱きつき、エルーが沙耶の頭をなで、その様子をコレットはにこにこしながら見ていた。
それからしばらく経ち沙耶が落ち着くと

「サヤ、答えは決まったんですか？」

「うん。コレット聞いて欲しいことがある。」

「なに？」

「私の力についてだ。」

意を決してコレットに沙耶の秘密を打ち明ける。
話しが終わるとそこにはいつも通りにこにことしたコレットではなく真剣な表情を受けべていた。

「私は世界再生の旅で直接じゃなくてもたくさんの人の命や願いを奪ってきた。それでも私は後悔はしない、そんなことをしたら奪ってきた命や願いを侮辱することになると思うから。サヤもそうなんだよね？」

質問というより確認するように問う。

「ああ。確かにエルーを守る為に力を使い人を殺したことはある。でもそれは私が願ったことだ。他の人の命よりもエルーの命が大事だからという誰の為でもない自分の為に。」

「それなら大丈夫。」

「そうか。これからも友達でいてくれ。」

「うん。こちらこそよろしくねサヤ。」

そして笑顔に戻ったコレットと握手を交わした。

第１５話

沙耶がコレットに秘密を打ち明けたその夜ティアが尋ね来た。

「はいサヤ、術式は刻んでおいたから。」

「ありがとう。それにしても寝むそうだな。」

「エミルたちがもうすぐ出発するって言ってたから寝ないで作業してたからね。それと向こうの中の１人に私たちが沙耶たちとつながってることがばれちゃったんだけど一応協力者って形で落ち着いているみたい。」

「レインめ、帰ったらもう少し厳しく指導するとするか・・・・、分かった。レインには気をつけるように言っといてくれ。」

「ＯＫ。それじゃメルトキオで。」

そう言ってティアはエミルたちがいるところまで戻って行った。

「エルー、コレット、明日ここを出発しようと思う。」

「分かりました。」

「それじゃあ１度イズールドに戻らないと。」

「コレットはもう寝ておけ。明日に差し支える。」

そう言うと頷き部屋に戻って行った。

「私たちはどうしますか？」

「エルーはティアたちのところに行ってレインと打ち合わせをしてきて欲しい。」

「それはいいですけど、どうして私なんですか？」

「私は魔具を完成させたいし、グレイプニルを使えばある程度位置が分かるから。」

「分かりました、それでは行ってきます。」

エルーが去り、沙耶１人が取り残された。

「よし、それじゃ私も始めよう。」

コレットからもらった友情のあかしである賢者の石といくつかの宝石を机に置き、莫大な魔力をそれぞれの宝石に込めていく。
沙耶の指輪は固定はされていないものの限界を取り除かれ、無限に魔力を込めることができるようになっている為、いくら使ってもすぐに回復する沙耶の魔力を絶えず込め続けたためその魔力量は星が内包している魔力を超える。
最も沙耶自身にはそんな魔力は扱うことができないため、魔具を作る時にくらいしか使用することはない。
それでも一気に魔力を開放すると暴走してしまう可能性がある為、自分の限界を見極めながらの作業になり周りが見えなくなるくらい集中する。
そして１時間程度経過し

「よし、後はこの術式を刻めば1つ目だ。」

ガーネットに魔力を込め終わり、次はその魔力を使用するための魔法を刻んでいく。

沙耶自身が扱える魔力はあまり大きくはないので、宝石に魔法を刻み、その宝石に込められた魔力によって魔法を発動するため沙耶の魔力制御は必要なくなるがその分丁寧に刻んでおかないと上手く魔力が流れなかったり、魔法が暴走してしまう可能性がある為慎重に作業を行い、さらに1時間後ガーネットに魔法を刻み終わり、後は沙耶の力で時の流れを殺し宝石に内包している魔力を使用してもすぐに元に戻るようにする。

「ようやく1つか、あと7つ。」

溜息をつきながら、次はアクアマリンを手に取り再び魔力を込めていく。

そして2つ目が完成したときには日が登り始め、いつの間にかエルーが戻って来ていた。

「お疲れ様です。ティアさんたちは少なくとも今日はこの街に滞在して行くそうです。」

「分かった。」

背伸びをしながら道具を片づけていく。

「それにしても物騒なものを作っていますね。そんなもの使う機会なんてあるんですか？」

いま沙耶が作っている物は出力を全開にすればレヴァンティンに匹

敵する威力を持つ。
最も沙耶以外が使えば反動で全身が吹き飛び即死に至ってしまう。
「確かにちょっとやり過ぎなところもあるけど、できるだけ力を使いたくないから。」
「そうですか。そろそろコレットさんも起きてくるでしょうから朝食の準備でもしましょうか。」
「こっちに来てから何にも食べてないから、久しぶりに料理したいな。」
「それはいいですね。向こうでは毎日作っていましたからね、ちょうどいい機会ですから材料を買いに行きましょう。」
「うん。」
久しぶりのデートに思う存分にいちゃつきながら街を見て回る。
トリエットにはまだエミルたちが滞在しているのだがそんなことはお構いなしに腕を組み、露店を見て回る。
「こうやってデートするのも久しぶりですね。」
「あの時だよね、私とエルーが恋人同士になったのは。」
「そうですね。あの時のサヤはデートという単語に恥ずかしがってましたね。」
「そ、それは。」

「サヤは覚えていますか、私がサヤに誓ったことを。」

「もちろんだよ。」

沙耶がエルーの想いから逃げ出そうとしていたあの時に立てた揺らぐことのない誓い、そして授かった不死の呪い。

「『だれが邪魔しようとも絶対にサヤのそばに居続けます。』だったよね。」

「はい。そして私は呪いを授かりました。」

どれほど死にたくても死ぬことができず、死なせることができるのは沙耶だけ、そしてその沙耶は自身の力で死ぬことはできない。

「私はだれが邪魔しようとも絶対にサヤのそばに居続けます。」

再び唱えられる誓い。

「私もエルーを殺してあげない。絶対に離さない。」

人を信じることから逃げ続けていた沙耶を支え続けてきた揺るぎない想い。

「大好きだよエルー。」

「私もですよサヤ。」

その想いは呪いともいえるがそれでもエルーは受け止める。

お互いの想いを再確認し、デートを続けた。

そして材料を購入し宿へと戻る。

「おはようサヤ、エルー。」

「おはよう。」

「おはようございます。」

すでに起きていたコレットと挨拶をかわし宿を出る。
そして雪が降る砂漠へと出ると早速調理を始める。
この世界に来るまでは毎日一緒に料理を作っていたので専門家ほどではなくともそれなりに料理は得意になっていた。

「おいしい。」

出来上がった料理を食べコレットが感想を漏らす。

「それはよかった。こっちの食材は向こうとあまり変わらないから大丈夫だとは思っていたが少し不安だったからな。」

「こっちに来て1週間くらいですか。あまりのんびりもしていられませんね。」

「あんまり遅くなると学園長も心配するだろうしね。」

「そっか、2人とも帰っちゃうんだよね。」

しまったと思ったがすでに遅かったらしくコレットが暗くなってい

た。
沙耶はエルーに助けを求めたがエルーの目が自分でどうにかしてくださいと語っていた。
「その上手くは言えないんだが私はこんな性格だからエルーたち以外に友達がいなかったんだ。それに私もそれで構わないと思っていた、でもコレットと知り合えてよかったと思ってる。でも世界自体が違うからそう簡単には会えないと思う。それでもどうにかしてまた会いに来られるように頑張るからそんな顔をしないでくれ。」
沙耶なりの精一杯の言葉にコレットが顔を上げる。
「ごめんね暗くなっちゃって。それと励ましてくれてありがとうサヤ。」
「き、気にするな。」
いまだにコレットの純粋な気持ちを素直に受け取れず、そっぽを向いてしまう。
それを見ても照れていると分かるコレットはなにも言わず、沙耶が作った朝食を食べ始めた。

第１６話

ｓｉｄｅ　ティア＆レイン

時間を少し戻し、ティアたちが沙耶たちと遭遇し火の神殿から帰る途中当然のようにエミルたちからは質問攻めにあっていた。

「ティア、レインあの２人はいったい何者なの？」

エミルが気絶している状況で質問してきたのはリフィルだった。

「ちょっと前に共通の敵を手を組んで倒した仲間だよ。」

その質問に答えたのはレインだった。

「でもあなたたちは別の世界から来たのではなかったかしら。」

「そうだよ。だからサヤさんたちも一緒に来ていたみたい、もっとも今回は味方なのかは分からないけど。」

ティアが直接的にナイフを投げ渡されたと同じようにレインに向けてもナイフを投げられていたためその意図を見抜きナイフに刻まれた文字で沙耶たちが敵ではないと分かっていたため下手に情報を与えないよう本当のことは言わず、なおかつ矛盾が生じないよう嘘は言わない。

「あの２人はそれほど強いのかしら？」

「ティアはともかく私が戦っても万が一どころか億に一つの勝機も

ない。とくに1体1ではサヤさんとまともに戦えるのはティアかロイドって人くらいじゃないと無理だと思う。そして集団戦ではエルーを相手にしたらその時点で負けが確定していると言ってもいいくらい。遺跡の中で戦ったときでも本当に一歩でも動けば捕まっていた。」

事実、あの瞬間あの場にいた全員の周りはグレイプニルが張り巡らされ、不可視の糸に少しでも触れればすぐさま周りの糸が襲いかかり拘束され無力化されてしまう。

「それならティアなら勝てる可能性はあるってこと？」

「それは1体1の場合だけ、相手が2人ならティアでも難しい。そもそも私なら第7解放までなら耐えることはできるけどリフィルさんたちはティアの攻撃の余波だけで死んでしまう。」

世界再生の旅を成功させたメンバーでさえも足手まといと言うレインに怒るどころか、あの光景を見せられたリフィルたちは納得させられたしまう。

「なんとか説得できないかしら？」

「サヤさんとエルーは自分たちの行動に何の迷いも持たないから説得は難しいし、もし失敗すれば今度こそ逃がしてもらえないかもしれない。」

レインの言葉が重くのしかかり、誰もが沈黙してしまう。

「とにかくあの2人と遭遇したら真っ先に逃げるしかない。あの2人はむやみに人を殺すことはないからこっちから仕掛けることがな

い限り大丈夫だよ。」

「でもセンチュリオン・コアを持ってるのよ。どうにかして取り戻さないと。」

レインの言葉に納得しかけたリフィルとジーニアスだったがマルタは納得せず戦うと主張する。

「マルタ、さっきの話聞いてた？　異常気象が起きていてもそう簡単には人は死なない、でもあの2人を敵に回すと言うなら10秒も経たず殺される。」

マルタは1度目はルーメンの目の前で、2度目はウェントスの目の前でなんの抵抗もさせず拘束された経験を持っているためその言葉が嘘でないことは分かっているが

「それでも相手も人間でしょ、それならなんとかなるよ。」

レインはもう何を言っても無駄だと思い

「言葉で言って分からないならはっきりと分からせてあげる。全員でいいよ私に一撃入れることができればマルタの意見を尊重する。」

その言葉にマルタだけでなくリフィルやジーニアスも驚く。

「エミルもだけど実力の差は見極めた方がいい。安易な思い込みはすぐに死に直結するよ。」

「確かにレインとティアは強いけどレイン1人で私たちに勝てると思ってるの？」

「もちろん。あなたたちでは私たちには届くことはない。」
そう断言するレイン、流石に頭にきたのかマルタとジーニアス、さらに仲間にした魔物が一斉にレインに襲いかかるがすぐにその進行は止まる。
「あぁぁぁあっ！！」
マルタが膝をつき苦しみ始め、ジーニアスは顔を残す以外すべてを氷漬けにされ、魔物たちは水に包まれ息ができずもがいている。
「分かった？　私はやろうとすれば1秒もかからずあなたたち全員を殺すことができる。それでもあの2人やティアには届かない。」
レインが魔法を解くとその場に崩れ落ちる。
「それではあなたたちはこのままあの2人がセンチュリオン・コアを手に入れるのを見過ごせと言うの？」
「私が言いたいのはあの2人に遭遇した時は戦おうとせず逃げろと言っているだけ。別にセンチュリオン・コアを諦めろって言ってるわけじゃないよ。」
緊迫した空気が流れる中
「レイン、もうそれくらいでいんじゃない？」
「ティア。」

ティアが割って入り話しを落ち着かせる。

「とりあえず私がいればそう簡単にはあの2人でも攻めてはこないだろうから、結局はどちらが先に手に入れるかだよ。」

「確かにそうだけど。」

沙耶たちにはレヴァンティンを抑え込むためには沙耶の力を使うか、ギムレーで防ぐという手段しかない。

ティルヴィングでは第6解放まで解放されたレヴァンティンの炎には相殺がやっとなのでそう簡単には突破することができないが、ティアもギムレーがある限り炎が届くことはなく先に手に入れた方が守りに入れば奪われることはない。

「私たちも目的があって同行させてもらってるから最低限は協力する。レインの予想が正しければセンチュリオン・コアを集めていれば敵も出てくるはずだから。」

「分かりました。こちらとしてもあなたたちがいなければあの2人には対抗する手段がない、そんな状況でセンチュリオン・コアを集めようとしても無駄だでしょう。それでいいかしら？」

マルタを見て確認をとる。

「分かった。」

しぶしぶ了承しリフィルも一息つく。

「次はどこに行くつもりなの？」

「アクアはリヒターついて行ってるから、シルヴァラント方面にはもうセンチュリオン・コアはないから次はフラノールに行こうと思ってる。」

話しが落ち着いたのを見計らい、可能な限り情報を引き出そうとする。

それもごく自然に行わなければ勘が鋭いリフィルに怪しまれてしまうため、下手のことは言えず、慎重に言葉を選ぶ。

「すぐにフラノールにむかうつもり？」

「今日はもう遅いからトリエットで休みましょう。」

リフィルが答え、一行はトリエットに向かい休息をとることになりそこでティアたちは沙耶たちと再会し情報を交換する。

そして先に帰ったレインにリフィルが話しかけてくる。

「どこにいってたの？」

「この街を見て回ってたんだけどどうかしたの？」

証拠はないはずなのでとぼけるつもりだったが

「あの2人と会っていた、違う？」

リフィルから思いもよらないことを言われ、まだまだ長い1日は終わらない。

第17話

ｓｉｄｅ　レイン

「なにを言ってるの？」

突然のリフィルの言葉に動揺するがそれを決して表には出さず努めて低い声を出す。

「もしかしたらあの2人と情報交換でも行っているのかと思っただけよ。」

リフィルはそれこそ適当に憶測を言っているだけだがそれが真実だからこそレインもうかつには踏み込めない。

「ここに来る間にも言ったけど今回サヤさんと出会ったのは本当に偶然だよ。」

「情報交換を行っているということは否定しないのかしら。」

「偶然出会ったのにどうやってサヤさんたちと会えるの？」

「それこそ偶然会ったのではないかしら。」

ここまでくればリフィルがレインを疑っているのは明確であり、このまま逃げ切ることはできるが確実にリフィルからは牽制され動きにくくなる為、レインも打って出る。

「つまりリフィルさんは私を疑ってるの？」

「そう聞こえたかしら。」

「それじゃあはっきり言うね。あそこでサヤさんと出会ったのは本当に偶然、それでもあの時サヤさんとここで落ち合うようにメッセージを貰った。そしてさっきまではあなたの想像通りにサヤさんたちと会ってきた。」

いきなり正直に話すレインだがリフィルは顔をしかめた。
リフィルは証拠はなかったが、明確にレインとティアを疑っていた。しかし、リフィルの目的は沙耶たちとつながっていることを暴くのではなく、あくまでも疑いの目を向けて動きを制限するつもりだったのだがその目論見は破綻した。

「いきなり正直になってどういうつもりなのかしら？」

「あなたなら分かってるはずだよ。私たちを敵に回して敵うはずがないと知っているからこそ疑いの目を向け動きを制限する、そうすれば私たちを抑え込むことができる。」

リフィルもかなりの切れ者だが沙耶から直々に指導を受けたレインもこういう場面は何度も訓練されているので不利な条件にならないよう圧倒的暴力という手札を切る。

「それなら私たちはあなたたちと行動することはできないわね。」

「そう、それなら私たちはあなたたちを倒してセンチュリオン・コアとラタトスク・コアを奪わせてもらう。」

ティアとレインがいたからこそ沙耶たちを退けることができたが、

ティアとレインが敵にまわりさらに沙耶とエルーがそこに加われば勝ち目など０に近い。

「なぜ、いまそれをしないのかしら？」

「マルタがいれば私たちの標的である敵が出てくる可能性があるから。私とサヤさんの予想通りなら敵はヴァンガードにいてセンチュリオン・コアによって力をつけようとするはず、だからこそセンチュリオン・コアを集めて炙り出す必要がある。」

「私たちは餌ってことね。」

「私たちは敵さえ倒すことができれば後はどうでもいい。サヤさんはロイドっていう人に渡すようになっているみたいだけどね。」

「それならマルタがいなくなるのはあなたたちにとっても良いことではないはずでしょう。」

相手を逆手に取り安全を確保しようとするがレインがその程度で言いくるめられることはない。

「確かにマルタがラタトスク・コアを持っているということはヴァンガードに知れ割ったってる、でも別にマルタじゃなくても良いんだよ。最悪サヤさんに任せれば惑わされることなくヴァンガードの注目を集めることができる。」

自分が持てる最強の手札を切ったレインは勢いのまま押し切る。リフィルとしてはレインが切った手札はジョーカーそのものであり出された瞬間から勝てはしないと分かっていたのでせめて引き分けに持っていこうとしたのだがそれも無理だと判断する。

「あなたたちの要求は？」

それならせめて最悪の事態だけは避けるべく交渉を続ける。

「これまで通り旅に同行させてもらうこと。」

誰にも言わないと条件を付けなったのはそんなことをすれば良くも悪くもまっすぐなエミルやマルタは必ずレインたちを追い出そうとする、そんなことになればすぐにでもエミルたちは殺されると言わずともそのくらいの意味は理解できると思ったためである。

「いいでしょう。その代わりあなたたちも可能な限りあの子たちにはばれないように気をつけることを約束してもらうわよ。」

「マルタがセンチュリオン・コアを目覚めさせようとしない限り私たちは動くことはないよ。それにサヤさんたちとはかぶらないように打ち合わせをしているから今の段階で気付かなければ気付くことはないよ。」

「分かりました。それにしても炙り出すことなんて回りくどい方法ではなくて直接乗り込む方法をとったほうが効率的でしょう。」

「前の敵はほとんど私たちの前に姿を現さなかったから直接乗り込んだりしたら逃げられてどこにいるか分からなくなる。」

どこまでも合理的に話を進めるレイン、だからこそ1つの疑問が浮かぶ。

「あなたたちほど強いなら敵が強くなっても大丈夫なのではないか

しら。」

「そうだよ。サヤさんならなんの問題もなく殺すことができる。でも私たちはそれをさせないために動いてる。」

沙耶に勝てる存在などこの世には存在しない。
しかし、沙耶が殺した相手は一生沙耶に刻まれる。
力を使わずに倒せるのなら、それは４人で分け合えるが力を使ってしか倒せない場合それは沙耶１人に背負わせることになる。
だからこそレインたちはなるべく危険を減らすために回りくどい方法でも沙耶が１人で背負ってしまうくらいなら前者をとる。

「詳しくははしてくれそうにないわね。」

「ここからは私たちの問題だから。」

誰よりも強く誰よりも傷つきやすい沙耶を支える為ならレインたちは世界を敵に回そうとも喜んで実行できる。

「分かりました。ではまた明日。」

そいってリフィルは立ち去り、肩の力が抜けたレインはひざから崩れ落ちる。

「はぁ～、疲れた。」

「お疲れ様。」

「あっ、ティア見てたの？」

「途中からね。とりあえずは大丈夫みたいだね。」

「うん。一応サヤさんに伝えておかなきゃ。」

「それなら私がやっておくよ。頼まれたことがあるからそのついでに言っとく。」

「ありがとうティア。」

「それじゃ私たちも戻ろうか。」

「そうだね。」

こうして長かった1日が終わりを告げ、ティアとレインはエミルたちのもとへ行った。

第17話（後書き）

もうちょっとレイン側の話が続きます

第１８話

ｓｉｄｅ　レイン

長い１日から一夜明け、レインが目を覚ました時には朝日が昇り切っていた。

「ふわ～。ティア～、おはようのキスは～。」

いつものように言っているが実際はやっておらず、昨日の腹の探り合いでいろいろ疲れていたのでそれを癒そうとティアにキスを求めるがティアが作業をしている姿を見た瞬間にそれを諦める。
近くで声をかければ振り向いてはくれるが、集中を乱すと失敗してしまうということなのでキスは諦め部屋を出る。

「おはようレイン。」

そこには今１番会いたくないリフィルがいた。

「おはようございますリフィルさん。何か用？」

寝ぼけた頭を覚醒させ再び腹の探り合いになってもいいよう心構えを決める。

「エミルたちが今日出発したいと言っているんだけど大丈夫かしら？」

「ティアが忙しそうだからできれば明日にして欲しいんだけど。」

「分かったわ。私からエミルたちに入っておきます。」

すんなりとこちらの要求が通ったことに裏を疑ってしまう。

「裏なんてないわよ。レインがこれに恩を感じてくれれば嬉しいのだけれど。」

見透かしたようなタイミングで告げられ、さらに疑いを深めてしまう。

「明日には出発するので用意はしておいてね。」

そう言ってリフィルは去って行った。

「ふぅ〜。」

リフィルが去り緊張を解く。

「誤魔化せたかな？」

レインはリフィルが簡単に要求を受け入れた理由については大方の予想はついていた。

その理由とはリフィル側としてはレインたちを置いていけば逃げたと思われ完全に敵対してしまうため、それを避けるためにもレインたちに合わせるしかない。

それを分かっていながら疑うような真似をしたのは可能な限り相手に油断をさせる為である。

目的が分かっておらず疑心暗鬼に陥ったと勘違いさせることができれば油断し付け入る隙が増える為、分かっていないふりを演じていた。

「朝から疲れるなぁ。こういう時はティアに慰めて欲しいんだけどサヤさんの頼みみたいだから邪魔できないし、なにしようかなぁ。」

やることがなく暇になったレインはとりあえず外に出ることにしたが、トリエットには娯楽施設などあるはずもなく適当に歩きまわっていたがそれも限界に達し

「そういえばこっちにきてから接近戦で戦ったことなかったからなまらないように鍛錬でもしようかな。幸いここの魔物ってあんまり強くないみたいだし。」

そう思い立ちちょうど周辺の魔物を退治して欲しいとの依頼があったのでお金を稼ぐことができ一石二鳥ということで早速砂漠へ出ようとしたところにエミルとマルタが現れた。

「どこにいくの？」

昨日やりすぎたせいか、マルタが怯えるようにエミルの後ろに隠れるがエミルはそんなことを知らずにのんきに尋ねてくる。

「少しお金を稼ごうと思って。」

簡単に事情を説明すると

「僕も一緒に行っていいかな？」

「エミル！？」

エミルが同行を申し出るとマルタが驚く。

「どうしたのマルタ？」

「どうしたもこうしたもないわよ！！　どうして一緒に行くなんて言ったの！！」

「僕も強くなりたいから、それにレインと一緒なら万が一のこともないだろうし。」

エミルの言葉にマルタは言葉を失う。

「私は別にいいけど、今回はお金を稼ぐと言うこともあるけど鍛錬の為というのもあるからあんまり邪魔しないでね。」

レインの口から鍛錬という言葉が出たことに驚くエミルとマルタ。

「あれ以上強くなるつもりなの！！」

「今回は接近戦のみで戦うつもりだからそんなに強くはないよ。」

納得したのかしてないのか微妙な顔をしている2人と共にトリエット郊外にでた。

そしてしばらく歩いていると依頼にあった退治して欲しい魔物が見えたため3人は戦闘態勢に入る。

「危なくなったらフォローするけど、私も接近戦で戦うのは久しぶりだからあんまり期待しないでね。」

「ふん。誰が助けなんているか。」

「ときどき性格が変わるけどどうして？」
１８０度性格が変わることに疑問を持っていたが誰も何も言わないのでこれが普通なのかと思っていたのでいままで質問しなかったがちょうどいい機会なのでここで質問する。
「エミルはラタトスクと契約してるからその影響だってテネブラエは言ってたけど。」
「ふ～ん。まぁいいっか。」
どちらかというと二重人格のように思えたレインだが専門的なことは分からないので思考を放棄し戦闘の思考に切り替える。
「それじゃあ行くよ。」
レインとエミルが同時に駆けだす。
エミルは元から持っていた剣で戦うがレインはというとアクアマスターでフヴェルゲルミルを核として水を集め凝固させた氷の剣を作り出し、その剣に魔力を通し強度を増した武器で戦っていた。
もっともレインは剣の心得などな持ってはおらず、魔力にものを言わせた身体強化で戦っているが見え見えの攻撃に魔物も簡単にかわされそうになるが
「「えっ！？」」
レインの戦いを見ていたエミルとマルタが驚愕の声を漏らす。
レインの攻撃は魔物にかわされそうになったが剣が形を変え魔物を切り裂いた。
そして次の魔物に標的を定めると次は短剣に変わり突き刺し、大き

な魔物になると大きな棍棒になり叩き潰す。
レインが作った武器は水を凍らせて作ったものなので一瞬で融解し、形を変え、再び凝固することで変幻自在に武器の形を操ることができ、また水を圧縮すれば質量が増しその分威力も上がる、これがレインの近距離戦の戦い方。

「ふぅ、こんなものかな。」

エミルとマルタが見とれている間にレインがすべての魔物を倒した。

「どうしたの2人とも？」

いまだに呆けているエミルとマルタに声をかける。

「いや、本当に非常識な戦い方をするなぁって。」

元に戻ったエミルの言葉にうなずくマルタ。

「これ位普通だと思うけど。」

レインが今まで相手にしてきた沙耶たちはどれほど武器の形を変えようとも、変化させるまでにはレインが意識して変えなければならないのでごくわずかだがタイムラグが出てしまう。
そのタイムラグを見逃す沙耶たちではないので変化が完了するまでに倒されてしまうため、自分がそんなに強いとは思えない。

「それにサヤさんたちを見たら、この程度じゃ非常識とも言えないよ。」

リスクなしに禁呪を扱い何倍もの速度で迫ってくる沙耶や様々な武

器を使いこなし卓越した戦闘論理を立てるエルー、圧倒的な大火力ですべてを焼き尽くすティア、この3人と比べるとどうしても劣ってしまう。

「そんなにあの人たちって強いんだ。」

改めて力の差を思い知らされる2人。

「1度私と戦ってみる？」

落ち込んでいる2人に提案を持ちかける。

「サヤさんたち程じゃないにしてもそこそこ練習相手くらいにはなると思うけど。」

「それじゃあお願いしていいかな。」

エミルの言葉を受けレインは距離をとる。

「それじゃあ行くよ。」

レインが剣を作り出しエミルに迫る。
それに対しエミルは避けようとはせず、受け止める形で対応する。
そうすれば形を変えようと対応できると思っていたが、まだ常識にとらわれているエミルにはこれから先に起こる展開を予測できなかった。
氷の刃を受け止めようとした瞬間、融解し水に戻った剣はエミルの剣をすり抜け、すりぬけた瞬間再び凝固しエミルの首に刃が当たる。

「とりあえずサヤさんたちと戦う時は常識はないと思ったほうがい

いよ。」

剣を昇華させ気体に戻す。

レインの言葉に自分たちがこれから戦うかもしれない相手の底知れなさにただ無力感を感じてしまうエミルだった。

第１９話

ｓｉｄｅ　レイン

魔物退治が終わりお金をもらった後、中途半端に時間が残っていたのでなにをするでもなく再びトリエットをぶらぶらしていたところ、リフィルとばったりと会った。

「あら、こんなところでなにをしているのかしら？」

「時間が空いたから暇つぶしにぶらぶらしていただけだよ。」

リフィルと会った瞬間、またかとうんざりしたが表情に出すことはなくいつも通りに返す。

「そう。ところであなたたちがサヤと呼んでいる娘とロイドはどういう関係なのかしら？」

「協力関係だって聞いてる。それ以上のことは直接サヤさんに聞かないと分からないよ。」

「会わせてもらうわけにはいかないかしら？」

「駄目。私はまだあなたを信用しているわけじゃないしサヤさんは極度の人嫌いだからあなたみたいに裏をほのめかすのような人と会わせたくない。」

レインが行ったことも本当だが、実際は連れて行ったら必然的にコレットと会うことになってしまい、話しを聞く限りリフィルもコレ

ットの知り合いなので話しをこじらせない為と言う理由が1番強かったのだが、そんなことを言えるはずもなく建前を言って誤魔化す。

「嫌われたものね。分かりました、けれど1つだけ確認させて、あなたの仲間はあくまでも敵を炙り出すためにセンチュリオン・コアを集めているのよね？」

「そうだよ。ロイドとはその為だけに協力してるだけ、だからロイドがなにをやっていようとも一切サヤさんは関与していない。」

リフィルはロイドがパルマコスタを襲ったのは沙耶の敵がヴァンガードにいる可能性が高いため、何らかの取引で行ったと言う可能性を考慮していたがそれも否定された。

「ちなみにロイドはパルマコスタ襲撃を行っていないってサヤさんが言ってたよ。」

思いもよらない言葉に目を見開く。

「それはどういうこと？」

「もちろんただで教えるわけにはいかないよ。」

ここで裏切りがないように確実なものを手に入れる為、リフィルたちが最も欲しがっている情報をちらつかせる。

「・・・・分かりました。可能な限りあなたたちを援助します。」

「それを信じろっていうの？」

「どうすれば信じてくれるのかしら？」

「これを飲み込んで。」

レインは小さな宝石を取り出しリフィルに差し出す。

「これは？」

「それを飲むと私の命令に逆らえなくなる。」

実際は何の効力もない宝石なのだがこれを飲めばそれはよほどのことがない限り裏切ることはないと確証できる。

「心配しなくても私たちを裏切るような行為をしなければ使うつもりはないよ。それはただの保険。」

「・・・・分かりました。」

少し考えた後リフィルは宝石を飲み込んだ。

「これでいいかしら？」

「もちろん、それじゃあサヤさんから聞いた話を教えてあげる。サヤさんがこっちに来てから旅をしていたときにヴァンガードに遭遇して鎌をかけたらあっさりと白状してくれたそうだよ。」

「証拠は？」

「コレット、彼女がサヤさんたちと一緒に旅をしている。」

この世界に来たばかりのレインたちがその名を知っているはずもなくその言葉が嘘でないことが分かる。

「分かってると思うけど他の人には言っちゃ駄目だからね。」

「コレットは公表しようとしなかったのかしら？」

リフィルの知っているコレットなら事実を知った瞬間、ロイドの誤解を晴らすために動いてもおかしくない。

「サヤさんが止めたんだよ。半信半疑の現段階で公表しても意味がないし、コレットは特別な立場らしいからなおさら信じてもらえないって。」

そういわれ納得するリフィル。

「サヤとコレットはどういう関係なのかしら？」

正直良い印象がないレインたちの仲間である沙耶たちについて行っているコレットが心配になり尋ねてみる。

「友達だって言ってた。サヤさんは認めた相手しか名前で呼ばないから間違いないと思う。」

「それならいいわ。」

良い印象はないが少なくとも悪い人間ではないということは分かるのでコレットが友達と呼んでいるなら大丈夫だろうと思い一安心する。

「それなら早速で悪いんだけど、今夜ティアがサヤさんたちのところに行くと思うから誤魔化すのを手伝って。」

「分かりました。」

そうやっている内に日が暮れ始め、一瞬たりとも気が抜けない状況で並んで宿へと戻って行った。

宿に戻り部屋に入るとすでに作業を終えたティアの姿があった。

「おかえりレイン。」

「終わったんだ。」

「うん。これからサヤに届けてくるからちょっとの間お願い。」

「任せて。」

そしてティアが部屋から出ていくと、ベットに崩れ落ちた。

「胃が・・・」

連日リフィルとの交渉にストレスがたまり胃が痛くなっていた。

「サヤさんって本当にすごいよ。」

レインはリフィル個人とだが、サヤは国王や学園長などそれぞれ責任のある人物と対等どころか有利になるように交渉を進め、緊迫し

た空気の中でも堂々としている。

「ちょっと寝よう。」

疲れていたのかすぐに眠りにつく。

そして1時間後

「レイン、起きてレイン。」

「んっ、あっ、おかえりティア。」

瞼をこすりながら、徐々に頭を覚醒させていく。

「エルーが打ち合わせをしたいから外に来てって。」

「分かった。なにかあったらリフィルさんに誤魔化すように言っといて。」

そう言い残すと誰にも見つからないように外に出る。

「寝むそうですね。」

「ちょっといろいろあって。」

「そうですか。早速ですが私たちは明日出発することになりました。早朝に出発するのでかぶらないように調整をお願いしても良いですか？」

「分かった。こっちにも協力者ができたからなんとかしておく。」
「ちなみにその方の名前は？」
「リフィル・セージ。外見は銀髪の２０代中盤の女性。」
「分かりました。それでは失礼します。」
こうしてエルーとの打ち合わせを終え再び部屋に戻る。
「なにか言ってた？」
「明日の早朝に出発するから時間を調整してって。」
「大丈夫なの？」
「リフィルさんと協力すれば大丈夫だと思う。」
「そっか。あっ、そう言えばサヤが帰ったらもっと厳しく指導するって言ってたよ。」
いろいろと限界に達していたレインに止めの一撃が下され、ティアに寄りかかる。
「慰めて。」
「えっ？」
寄りかかったと思ったら突然レインが甘えるようにティアに頬を擦

り付ける。

「昨日今日とリフィルさんと取り引きして疲れてるの。ティアは私の恋人なんだから傷心してる私を慰めるのは義務だよ。」

「な、慰めるってどうやって？」

「分からないの？」

服を半分脱ぎ、上目ずかいでティアを誘う。

「で、でも人が来るかもしれないし。」

「人払いと遮音の結界は張ったよ。」

「でも・・・」

目をそらしながら渋るティアに我慢していたレインが切れ、いきなり唇を奪い舌を入れる。

突然のことに驚きながらも舌をからめ合うティア。

「ぷはぁ、ティア来て。」

「うん。」

すっかり乗せられたティアはレインに覆いかぶさり体をまさぐり始め、気付いたころには幸せそうに眠っているレインと高く上った太陽が見えていた。

第２０話

レインたちがトリエットを出発する頃にはすでに沙耶たちはオサ山道を越えイズールドに到着していた。

「騒がしいな。」

「そうだね、なにかあったのかな？」

「それになんだか焦げ臭いですね。」

三者三様の感想を述べながら村の中心に向かっていくと中年の男性が村の人に囲まれ言い争っていた。
もちろんサヤは無視して行くつもりだったが

「リーガルさん！！」

コレットが叫びまた厄介なことに巻き込まれたと肩を落とした。

「む、コレットか。こんなところでなにをしている。」

「え～と、いろいろあってこの人たちを神殿に連れていってるの。リーガルさんはなにをしてるの？」

「私は「この野郎が家に火をつけやがったんだ。こいつは牢屋に入れておくから離れな。」」

リーガルが応えようとすると村の人が引き離しリーガルを連れて行こうとする。

「だから私はやっていないと言っているだろう。」

「そんなもの信じられるか。大体あそこにいたのはお前だけだろう。」

リーガルが口論するが村の人は問答無用でリーガルを連れて行った。

「どうするコレット？」

リーガルが連れて行かれコレットの性格上必ずほってはおけないだろうと思い声をかける。

「助けてあげたいけど、サヤに迷惑をかけたくないし後でエミルたちもここに来ると思うからその時に助けてもらえれば大丈夫だよ。」

「正直に言え。」

全然大丈夫そうではないコレットを軽くはたく。

「リーガルさんを助けたい、だからサヤ力を貸して。」

「それでいい、今更私たちに迷惑云々は考えなくていい。それに私はいつも真っ直ぐなところが気に入っているんだから。」

エルーも無言でうなずき、コレットはいつもの笑みを浮かべる。

「よし、それじゃあ事情を聴きに行こう。」

満場一致となりリーガルが捕まっている牢屋へと向かう。

「少し話を聞きたいんだが。」

「なんだ、言っておくがこいつはここから出さないぞ。」

「彼は何をしたんだ？」

「村に火をつけやがったんだ。幸いすぐに鎮火できたが近くにいたベルクってやつがそのせいで目を覚まさないんだ。」

「ふむ、大体の事情はわかった。感謝する。」

話しを聞き終わるとすぐに次の目的地に移動する。

「サヤ、どこに行くの？」

エルーは先程の話を聞いてすぐに理解したがコレットは理解できなかったようで何の迷いもなく移動する沙耶に尋ねる。

「ベルクと言った人物のところだ。そいつを目覚めさせて無実を証明させればすぐに解放されるだろう。」

「でも目を覚まさないっていってたよ。」

「ただ怪我で目を覚まさないのなら治してやればいいだけだ。」

そしてベルクの家につくと断りもなく堂々と家に入る。

「だ、誰だ！！」

「怪しいものじゃない、そこで寝ているやつから話を聞きたいだけだ。」

いきなり家に入ってこられ動揺している家の人を無視し、ベルクの前まで歩いてく。

「話しを聞くと言っても目を覚まさないんだぞ。」

「問題ない・・・ん？」

ベルクを見てみると外相はほぼ見当たらずなにかの模様が肌に浮かび上がっていた。

「これはどう見ても普通の怪我じゃないな。」

「どうしますかサヤ？　普通の治療の魔法では効かないようですが。」

念のため魔法をかけてみるが目を覚まさない。

「私の力を使う。」

サヤが模様を見て、力を使い模様を消しさる。

「んっ、俺はいったい・・・」

するとベルクが目を覚まし辺りを見渡す。

「目が覚めたところ悪いんだがなにがあったか教えてくれないか。」

「あんたたちは？　まぁいいか、リーガルって言うやつと商談をしていたら突然周りが光って気付いたらここにいた。」

「つまり、彼は何もしていないんだな？」

「ああそうだが、それがどうかしたのか？」

「疑いをかけられて牢屋に入れられている、事情を説明して牢屋から出してやってくれ。」

「それは大変だ、だれかは知らないが助けてくれてありがとうよ。」

沙耶にお礼を言うとリーガルが囚われている牢屋に向かっていた。

「エルー、私の力は殺すだけじゃなかったんだね。」

「はい。」

人を救うために力を使ったことは初めてであり、殺すことしかできないと思っていた力が人を助ける為に使うことができたことにいろいろな感情がごちゃ混ぜになり、それを知ってかエルーも短い返事を返す。

「これからも助ける為にこの力を使えるかな？」

「サヤなら大丈夫ですよ。」

「そっか。」

いままで奪ってきた命、そしてこれからも奪うかもしれない、しか

し可能ならば奪うのではなく与える為にこの力を使って生きていこうと思った沙耶であった。

「どうしたのサヤ？」

「いや何でもない、それよりせっかく助けたんだ、私たちのことはいいから少し話でもしてこい。」

「？　うん。」

いつもより柔らかいサヤの表情に疑問を感じながらもリーガルに会うために家を出た。

「エルー、最初はこっちの世界に来ることは嫌だったけど今は来てよかったと思う。」

「そうですね、こっちに来てからまたサヤは成長しました。それは弱くなっているかもしれませんが悪くないものだと思いますよ。」

なにも持たず失うものがない最強の強さを持っていた沙耶はエルーたちと出会い大切な仲間を持ち持たざる者の強さを失った。
そして、こっちの世界にきたことでコレットと友達になり少しだが人を信じることができるようになり、人を助けるということを知りまた弱くなった。

「いきましょうか、コレットさんも待っているでしょうから。」

「そうだね。」

それでも沙耶はその弱さを大切に持ち続けようとする。

それこそが本当に沙耶が欲しかったものだと気付いたから。

第２１話

「助力感謝する。」

「気にするな。」

コレットと合流すると必然的にリーガルと対峙することになり、コレットのおかげで多少はましなった沙耶だがそれでも初対面の相手に警戒心を解くはずもなく壁を１枚どころか２枚も３枚も置いた態度で会話する。

「悪いんだがダラダラしている時間はないんだ。まだここに残るつもりなら助けた対価として私たちのことを誰にも言うな。」

「君たちはいったい何をやっているんだ？」

沙耶の言葉に即座に頷かず聞き返すが

「答えるつもりはない。答えは２つに１つだ。」

断られても特に問題はなかったが、可能な限りコレットが沙耶たちについて来ていることをエミルたちに知られたくなかった。

「・・・いいだろう。しかし、なぜ私だけにそれを言う？　村の人が話してしまうのはいいのか？」

「もうすぐここに私たちのことを知られたくない相手が来る。そしてそいつらの数人は貴方のことを知っているからだ。」

「それは君たちが追われているからか？」
「答えるつもりはない。」
「断った場合は？」
「特になにもない。知られたくないというのは私個人の理由だ。」
「コレットの為か？」
一瞬だけ眉をひそめ、それ以降はなにも表情に出さなかったがレザレノカンパニーの会長を勤めているだけあってそれだけで理解した。
「そうだ。」
隠しても無駄だと分かった沙耶はあっさりと白状する。
「その条件を飲もう。助けてもらって何もしないというのも悪いからな。」
その言葉を聞くと踵を返し港の方へと向かう。
「どうでしたか？」
「敵にすると厄介そうな相手だった。コレット、あいつは何者なんだ？」
「リーガルさん？　リーガルさんはレザレノカンパニーの会長さんなんだよ。」

誇らしげに仲間のことを紹介するコレット。
油断していたとはいえ沙耶が不覚を取ったのも納得がいき、船へと乗り込む。
そして目的地に到着するまで沙耶は宝石を取り出し作業を再開した。
その間、コレットが沙耶のところを訪れたがエルーが止め沙耶は作業に没頭していた。
すでに2つ完成させていたので、その時よりも作業に慣れていたため少し早めに完成させることができた。

「サヤ、終わりましたか？」

「うん、といっても全体からみれば半分も終わってないけど。」

「その作業は私でも出来ますか？」

「ただ魔力を込めるだけならできると思うけど、どうして？」

「先ほどコレットさんが来てましたがサヤの邪魔になってはいけないということで部屋から出て行ってもらったんです。コレットさんは前の仲間と会って思うことがあったのか少し落ち込んでいましたよ。」

「エルー、ちょっとお願いしてもいい？」

「なんでしょうか？」

「少しの間、宝石に魔力を込めて欲しい。」

これまでの沙耶ならエルーにコレットを励まして欲しいと頼むが今の沙耶はエルーが適役だと分かっていても自分が励ましてあげたい

と思えるようになっていた。

「合格です。早く行ってあげてください。」

「うん。」

そう言うと沙耶は急いで部屋を出てコレットのもとへと向かって行った。

「少々複雑な感じですが、良い傾向です。それでは始めましょうか。」

あれほど人嫌いでエルーでも簡単に変えることのできたかった沙耶を1週間足らずで変えてしまったコレットには感謝と嫉妬が入り混じった感情を持ってしまう。
それでも沙耶の為と割り切り沙耶に頼まれた仕事を始める。

「コレット。」

「どうしたのサヤ？」

慌ててコレットに会いに来たのは良いもののなにを言っていい分からない。

「ええっと、そのだな・・・・」

「ふふっ。」

コレットは言い淀む沙耶に噴き出してしまう。

「ありがとう。サヤは私を励ましに来てくれたんだよね。」
「悪い、こういうことは経験がなくてどういえばいいのか分からいんだ。」
「ううん、来てくれただけで嬉しいよ。」
「なにかあったのか？」
海風でコレットの顔が隠れ表情が見えず、コレットが答えてくれるまでなにも分からず、また直接言ってくれるまで表情を読むことも止めていた。
「ロイドはどうしてなにも言ってくれないのかな？」
絞り出すような声で呟く。
「私ってそんなに信用されてなかったのかな？」
答えの出ない問いを問い続ける。
沙耶はそんなコレットに近づき頭をグーで叩いた。
「〜〜〜っ、なにするのサヤ！！」
涙目になり頭を抱えながら沙耶を見る。
「たった1回無視された程度でうじうじするな、私の時は何度も何度も向かってきただろう。」

「で、でも・・・」

「コレットにとってロイドはその程度の存在じゃないだろう。1回で駄目なら何度でも挑戦しろ。それでも駄目なら私たちに言え、ロイドを捕まえて無理矢理にでも吐かせてやる。」

それからしばらく何も言わず、コレットの答えが出るまで黙って待つ。

「そうだよね。うん、もう1回ロイドと会って話がしたい。」

そして顔上げいつも通り強い目をしたコレットに戻った。

「ようやくいつものコレットに戻ったな。」

そう言うとコレットが抱きついてきた。

「ありがとうサヤ。」

突然のことに驚きながらも感謝の言葉を言われいつものように照れながら

「コ、コレットはいつも1人で背負いすぎだ、それに今回はこの前私とエルーの仲を取り持ってくれた貸しを返しただけだ。」

いつものよう素直に好意を受け取れず突っぱねてしまうがコレットもいつもの沙耶だと分かり特に不快な思いはしなかった。

「もういいだろう？　エルーに変わってもらってるから部屋に戻らないと。」

「それが終わったら一緒にご飯食べよ。」

「分かった。だから離せ。」

コレットが沙耶を開放し、沙耶が部屋に向かって行くのを見送っていると

「なにをしている、コレットも一緒に来い。エルーに仲直りしたって報告しないと後が怖い。」

「うん。」

いつもの笑顔を浮かべながら沙耶を追って行くコレットだった。

第２２話

「もう帰ってきたんですか？」

沙耶が１時間かけて込めた魔力をほんの１０分程度で終わらせ、２つ目に取り掛かろうとしていた。

「エルーこそもう終わったの？」

「魔力の圧縮や制御は得意ですから。それにこっちに来てからも学園長先生から言われた訓練を続けていましたからすぐに終わりましたよ。」

「そ、そうなんだ。」

守る立場にある沙耶より強くなりそうなエルーを前に、強くなり危険が減ったことを喜ぶべきか、守る対象より弱くなりそうなことを嘆くべきか複雑な感情を抱く。

「それより思った以上に早かったですね。私の予想ではもっとかかるかと思っていたんですけど、どんなふうに励ましたんですか？」

「頭をグーで叩かれていつまでもうじうじするなって言ってくれたんだよ。」

「どういうことですかサヤ？」

コレットの言葉を聞いて視線を向けると、いたたまれなくなり視線をそらす。

「良いんだよエルー。サヤが励ましてくれて嬉しかったから。」
「コレットさんがそう言うならいいでしょう。しかしサヤ、今夜は教育する必要がありますね。」
「全然許しくれてない！！」
思わず反論してししまうが
「どうかしましたかサヤ。」
エルーの視線で黙らされてしまう。
「ふふっ。」
そんないつもの様子を見て微笑むコレットだった。
「ねぇサヤ、もう終わってるならみんなでご飯食べに行こう。」
「予定より早く終わってるし私は構わない、エルーは？」
「もちろん大丈夫です。」
「それじゃあ行こう！！」
そして食事をとり終わった頃にはテセアラの大陸が見え始め、それからすぐに上陸しメルトキオを目指していた。
「エルー、残りの宝石もお願いしていい？」

「大丈夫ですよ。」

あんまり時間をかけていざという時に使えないでは話しにならないので変なプライドは捨てエルーに残りの宝石を頼み沙耶は魔力を込め終わった宝石に魔法を刻んでいくことにする。

「それにしても今回もなかなか尻尾を出しませんね。」

「残りのセンチュリオン・コアは2つでヴァンガードは最高でも3つしか持っていないからそろそろ出てきてもいいと思うんだけど。」

「ねぇサヤ、サヤたちの敵って本当にヴァンガードにいるの？」

「確証があるわけじゃないがいまのところ心当たりがセンチュリオン・コアしかないからな。コレットは他に心当たりはあるか？」

「私が知っているのはロイドが持っているエターナルソードっていう世界を分離していた剣とネビリムの闇の装備品かな。」

「闇の装備品はどうなっている？」

「私たちが1度全部集めてアビシオンって人に渡したんだけど、その人が闇の装備品の力を使って私たちを襲ってきたからみんなで倒して闇の装備品は壊したよ。」

ロイドのエターナルソードは持ち主を選ぶため人の力ではどうこうなるものではないと判断し除外し、闇の装備品もコレットたちが破壊したとのことなのでこれも除外され、残ったのはやはりセンチュリオン・コアだけだった。

「やっぱり現段階ではセンチュリオン・コアを狙っている可能性が高いな。」

「そうなればそろそろヴァンガードに接触する必要がありますね。」

「できれば幹部と会えれば手っ取り早いんだけど。」

「まぁ今どうこう言っても仕方のないことですけど。」

「あっ、メルトキオが見えてきたよ。」

遠目からでも大きな城と街が見え、流石はテセアラの首都というだけのことはあり、実際に街に入ってみるとこっちの世界でこんなに賑わっているところは見たことがなかった。

「とりあえず部屋を取ろう。」

人で賑わっている街の中を掻き分けながら歩きようやく宿に着くことができた。

そして部屋を取ろうとしたが1つしか空いておらず仕方なく3人で1つの部屋で泊ることにした。

「コレット、今夜はなるべく静かにするつもりだが少し音がするかもしれないから先に謝っておく。」

「私って寝付きいいから大丈夫だよ。」

「それならいいが。」

「もう始めるの？」

「ああ、できるだけ早めに終わらせたいからな。」

「それじゃあ私はもう寝るね。」

「おやすみ。」

「うん、おやすみなさい。」

宣言通り1分たたずに健やかな寝息を立て寝てしまった。

「それじゃあエルーお願い。」

「分かりました。」

それから黙々と作業を始める沙耶とエルー。
沙耶は1つあたり1時間程度かかるがエルーは1時間あれば作業を終えてしまった。

「まだ何か手伝うことはありますか？」

4つ目の宝石が完成し残り4つとなりエルーが声をかける。

「刻む魔法って禁書に載っているレベルの魔法だけど大丈夫？」

「闇属性の魔法ならサヤより得意なので大丈夫だと思いますよ。」

「それじゃあお願い。」

沙耶がからアメジストを受け取り沙耶がどこからか取り出した禁書に記載されている最大級の闇の魔法を刻んでいく。
魔力を込める作業とは違い、時間をかけゆっくりとしか進まず難航していた。
その間沙耶は順調に進め５つ目が完成し６つ目に取り掛かっていた。

「やっとできました。」

「６つ目。」

沙耶が６つ目を完成させると同時にエルーも終わりこれで７つ完成し残りは１つなった。

「よくこれを６つも作れましたね。」

「前からティアを手伝ってたからだよ。」

「そうですか。私は飲み物でも入れてきます。」

エルーが音も立てずに部屋を出ると沙耶ももうひと踏ん張りだと気合を入れ最後のトパーズに沙耶が最も得意な光の魔法を刻んでいく。
得意な魔法とこれまで６つ完成させてきた経験もあり最初の半分くらいの時間で間せさせることができた。

「よし、あとは仕上げだけだ。」

コレットからもらった賢者の石を中心に正８角形を形どりそれぞれ設置ししていく。
それに糸を通しペンダントが完成した。

「終わったんですか？」

「うん。１回試しに使ってみないと大丈夫かは分からないけど。」

「名前は決めているんですか？」

「もちろん。」

沙耶が作り始めてからすでに名前は決めていた。
それは北欧神話、原初の存在、主神オーディーンの祖父にして、そのオーディーンたちの３体の神によって倒され、その体から世界が作られた。

「ユミル、それがこの魔具の名前。」

暗い部屋の中沙耶の首に下がっているユミルが煌めいていた。

第２３話

ｓｉｄｅ　ティア＆レイン

沙耶たちがイズールド到着と同時刻、エミルたち一行はトリエットを出発していた。

「それにしてもティアたちって意外と朝弱いんだね。」

明らかに寝不足なティアとレインに向かってエミルが言うが、実際にはレインは気絶している間少しは寝ていたがティアは一睡もしておらず、その理由が理由だけに苦笑して返す。

道中はそう簡単に人を信用しないティアだが処世術として気さくな態度をとることには慣れているのでエミルたちの相手をしつつ裏ではレインとリフィルが打ち合わせをしながらもお互いに隙がないか窺っていた。

「リフィルさん、この前エミルの性格が変わることについて聞いたんだけど契約を交わしたからってあんなに変わるものなの？」

「それはあなたにとって知る必要があることなのかしら？」

「ただの興味本位だよ。それにセンチュリオン・コアを持っているだけで人を惑わすのにその大本であるラタトスクと契約してあの程度の影響しか出ないことも変だと思うんだけど。」

リフィルはレインの言葉になにも言わず沈黙しているため、レインの推測を続けて行く。

「その影響を抑える為に2つめの人格を作っているならエミルに変わっている時の記憶があるのはおかしいんじゃないの？」

「そう聞かれても2重人格のことなんて私にはわからないわよ。」

「それ以外のことなら分かるってこと？」

視線を交差させながら言葉を交わす。

「率直に聞くくけどエミルって何者？」

「それを知ってどうするつもりなのかしら？」

リフィルが隠しても意味がないと分かったがそれでも話す気はないと言葉の裏に意味を含める。

「いまのところどうもするつもりはないよ、でも私の勘が確かならサヤさんに伝えておく必要がある。」

「その勘とやらは当てになるのかしら？」

前方ではティアが交りながら仲良くやっているエミルが笑いながら話している。

「エミルはラタトスク本体だよね。」

大きく間を開けて推測の結論を伝える。

「なにか根拠はあるのかしら？」

「ないよ。でもそう仮定すればいろいろと納得がいくんだよね。ラタトスクと契約を交わしても影響を受けないこともラタトスクだったら影響を受けるはずもないし、弱っているラタトスクはエミルという隠れ蓑で力を蓄えることができるし、マルタという囮もいる。」

「エミルは確かにパルマコスタに住んでいたようだし、ルインには親戚もいるそうよ。」

「その時って血の粛清でたくさんの人が死んだんだよね。それならすり変わることもできると思うんだけど。」

もはやほぼ確証しているレインに誤魔化したとしても、これからのエミルを観察していればその推測を補強する事実が出てくる。

「エミルがラタトスクだとしてどうするつもりなのかしら？」

「それはエミルがラタトスクだと認めるってこと？」

「あくまで推論の域から出ないものよ。」

「そう、心配しなくてもいまのところはどうするつもりもないよ。流石に私の独断で決めていいことじゃないからサヤさんと話し合う必要があるしね。」

表には出さないが安心しているリフィルにレインは疑問を感じ尋ねる。

「どうしてエミルを放置してるの？　下手をすれば弟が死ぬかもしれないのに。」

レインがこの推論に達した直後から常にエミルの傍には近づくことはせず、近づいたとしても警戒を解かないようにしている、もちろんこのことをティアにも伝えているためティアも仲良くしているように見えるがいつでも戦闘を行えるよう警戒している。

「エミルの人格は隠れ蓑の為に作られたものかもしれないけど、いま確かに生きているのよ。確証もないのに追い出すことなんかできるわけないでしょう。」

「それだけ？」

リフィルの答えはかなり予想外だった為驚いてしまう。

「ええ、それにラタトスクの人格は自分がラタトスクだってことを分かっていないみたいですから。」

「そう見せる為に演技してるって思わないの？」

「そこまで疑ったらきりがないでしょう。」

リフィルが言っていることが本当に理解できず困惑してしまう。

「どうしたのかしら？」

「正気なの？　危険要素をそんな理由で傍に置いておくなんて。」

「確かに危険要素にはなる可能性はあるけれどエミルの人格が生きている限り安全でしょう。」

リフィルの言葉にやっと理解が追いつくが納得がいかない顔をする。
「リフィルさんは思っていたよりそのあたりは甘いんだね。私たちの正体を見破ったからもっとシビアな人と思っていんだけど。」
「そう言うあなたはどうするべきだと言うのかしら？」
「私なら少なくとも傍には置いておかない。サヤさんだったら排除しようとすると思う。」
「随分と過激的なのね、あなたたちのリーダーは。」
「サヤさんがそう判断したのならそれは間違いじゃない、サヤさんは絶対に間違えないから。」
「あなたがそこまで信用する人なの？」
リフィルを論破し、エミルの正体に気付いたレインが全幅の信頼を置く沙耶の存在に興味が湧き尋ねる。
「サヤさんは私たちの命を背負ってる。だから絶対に間違えないし、間違えられない。」
「人間誰しも間違いはあるものよ。」
「確かにそうだと思うよ。でも間違いを正す役はティアとエルーの役目だから私は疑うことなく全力でサヤさんを支える。」
例え沙耶がレインの故郷を滅ぼしてもそれは必要なことだと納得してしまうほどレインは沙耶を狂信している。

「前にどうして回りくどいやり方で敵を炙り出すのかって聞いきたたよね、それはね私たちが傷つくとサヤさんはもっと傷つく。だからこそ私たちは傷つくわけにはいかない、それがいつも守ってもらっているサヤさんへの恩返しだから。」

沙耶の隣に並ぶにはまだまだ力不足であり、守ってもらっていると分かっているからこそ沙耶に責任を感じさせることがないようあらゆる傷を拒絶する。

「私たちの安全を第一に考えるからこそ危険要素と感じたものはティアとエルーが反対してもサヤさんは排除する。」

「簡単に排除すると言っているけれど、あなたたち程の力を持っても倒せない相手を1人で倒すことなんてできるのかしら。」

これまで散々にティアとレインの圧倒的な力を魅せつけられてきたリフィルはその上の力を想像することができない。

「サヤさんと本気で戦って勝てる存在なんていないよ。そもそもサヤさんを敵に回した時点で終わってる。」

火の神殿であのロイドを2人掛かりとはいえ完封したレインがここまで言う力はリフィルの想像の限界を超えているため冗談にしか聞こえないのだが、レインは至極当然のように言っているため冗談とも思えない。

「とにかくエミルがラタトスクである可能性がある以上、私たちは警戒を解く訳にはいかない。リフィルさんが放置しておくと言うのなら好きにしてもいいけどラタトクスに惑わされないようにしてね。

」

「分かっています。」

「そろそろエミルたちに怪しまれちゃうかもしれないからいくね。」

そう言ってエミルたちの話の中に入っていく。

「あの子にあそこまで言わせるサヤか1度会ってみたいわね。」

エミルたちの輪から少し離れたところでぼそりと呟いた。

第２４話

ｓｉｄｅ　ティア＆レイン

沙耶たちがメルトキオに到着していたころエミル一行はイズールドに到着していた。
そしてイズールドについてすぐにフラノールに向かうため港に向かうとそこにはリーガルが村の住人と話し合っていた。

「リーガルさんこんなところで何やってるの！？」

「ジーニアスにリフィルか久しぶりだな。」

久しぶりに会った仲間と挨拶をかわし、見ない４人に視線を向ける。

「あの貴方は？」

「これは失礼、私はリーガル・ブライアン。再生の旅に同行していた者だ。」

ティアは本能的に戦闘的に厄介な相手だと直感し、レインは様々な意味で厄介な相手だと悟る。
エミルとマルタが挨拶をかわし、次はティアとレインに近づき挨拶をかわす。
その間ティアはいつでも周囲一帯を焼きつくせるようレヴァンティンの魔力を感じさせないように放ち、レインは少しでも変な動きを見せれば瞬時に血液を蒸発させ殺せるようアクアマスターを発動させる。

「レイン・シーファです。」
「ティア・ノートだよ。」
「リーガル・ブライアンだ。」
明らかに警戒されているとリーガルは思いながらも下手な動きは見せられないと感じ、自然に挨拶をかわし距離をとる。
「ところで貴方はこんなところで何をやってるのかしら？」
「商談に来ていたが、厄介な問題に直面してしまってないまその対策をこの村の住人と考えていたところだ。」
リーガルの後方では村の人たちが神妙な顔で考えているがいい案が浮かばないのか誰も発言をしていない。
「そう言う君たちはなにをしているんだ？」
もっともな質問に代表してリフィルが簡単に説明する。
もちろん余計なことを離さないようレインが近くで聞いていた。
「なるほど事情は大方分かったが、あのロイドがか、にわかに信じがたい内容だがこれだけの目撃者がいては信じるほかないか。」
ロイドを擁護するような言葉にエミルが過激な反応を見せるがリーガルがうまく治めていると、村の方で火事が起きる。
急いで向かうとすでに消化を始めているが、他の家にも燃え移り難航していたがレインがフヴェルゲルミルを一振りすると大量の水が火を鎮火した。

「これは早く犯人を見つける必要があるな。」

そう言うとリーガルは現場に向かい村の人たちと検証を始めた。

「みんな、フラノールに向かう前にここの人を助けて行かない。」

エミルの発言にティアとレイン以外が賛同を示す。

「センチュリオン・コアはいいの？　あんまり時間をかけて入れる状況じゃないんだよ、最低でもサヤさんより早く手に入れないとまた火の神殿の二の舞だよ。」

「でも目の前で困っている人を放ってはおけないよ。」

「まぁ多数決には従うから協力はするよ。」

エミルの甘い発言になにを言う気もなくなりおとなしく従うことにする。

それからリーガルと共同し現場を見て回るがこれと言ったものは見つからず、その日はイズールドに泊まることになる。

レインとしては沙耶に取られるのなら問題ないがヴァンガードに取られるのだけは避けたいのでさっさと問題を解決するためにティアを連れもう1度現場に向かう。

「どうレイン、何か分かる？」

「う～ん。火の出所から人の仕業ではないと思うんだけど、それ以上は何とも言えないかな。」

「もうちょっと情報が必要だね。聞き込みにしても時間も遅いし今日はこの辺りにしようか。」

「そうだね。そう言えばティア、あのリーガルって人どう思う？」

「まともに戦ったらロイドってやつより強いかも、でも勝てない相手じゃないよ。」

こう言ってはいるがレヴァンティンの第６開放まで使わせる相手は沙耶たちを除くと前の世界の魔王レベルといった世界を敵に回しても勝てる相手くらいなので戦闘面での心配はほとんどない。

「ふ～ん、それじゃあそうとう強いんだ。」

何気ない会話を交わしながら宿泊している宿へと向かっていると再び火の手が上がる。
しかし夜ということで村の人もまだ気づいていないのか大きな騒ぎになっておらず、いまなら現行犯で捕えることができると思いあえて鎮火することはせず様子を見ることにする。
そして、カエルのような魔物が姿を見せ何か食べていた。

「見つけた。」

ティアがすぐに炎を操り視界を晴らすとレインがカエルを水で包み込み生け捕りにする。
魔物も抵抗して水を蒸発させ逃げようとするが瞬時に絶対零度まで冷やし原形をとどめて殺す。
それからしばらくしてエミルたちが駆け付けたため状況を説明する。

「それじゃあこのグミを狙ってきたってこと？」

「たぶんだけどね。」

「リーガルさん、早速村の人たちに伝えないと。」

「そうだな。エミルたちは先に行っててくれ。」

そしてその場にはレインとティア、リーガルが取り残された。

「どうしたんですか？　貴方も行った方が話しが通しやすいはずだと思うんですが。」

「確かにそうだが、１つ確認させてくれ君たちはどうやってあの魔物を捕まえた？」

レインは言いたいことが分かり、この人もかと呆れながら答える。

「貴方の思った通りだと思いますよ。あの魔物が姿を現すまで燃えていることが分かっていてもあえて鎮火しませんでした。」

「家の中にいる人が危険にさらされていたことを知っていてのことか？」

「だからどうしたんですか？　このまま手をこまねいていて被害が増えるより多少の危険を冒して確実に成果を上げる方がいいと判断したことは間違いではないと思いますが。幸いけが人も出なかったみたいですし。」

リーガルもレザレノカンパニーの会長として1を切り捨て9をとることを否定するつもりないがエミルたちを先に行かせたことは間違

いではなかったと確信する。

「まだ礼を言っていなかったな。犯人を見つけてくれて感謝する。」

「どういたしまして。」

そしてリーガルはエミルたちの方へと向かい村の人たちに詳しく説明をしていた。

「疲れた・・・」

緊張の糸が切れティアに寄りかかる。

「お疲れレイン。」

「最近こんなことばっかりでストレスがたまるよ。」

リーガルに虚勢を張っていることがばれないよう常に堂々としていないとすぐに見抜かれてしまうと感じ、話している間は一瞬の気も抜けない状況が続いただけに疲れがどっと押し寄せた。

「私は交渉事には向いてないからどうしようもないからなぁ。」

「大丈夫だよ、これは私の役目だから。」

「それじゃあ私は私の役目を果たさないとね。」

寄りかかるレインにキスをする。

「んっ・・・。ティア、もう1回。」

人がいないことをさっと確認し再び唇を重ねる。
そして唇離すとレインがもう1回と何度も繰り返し、いつの間にか舌を絡め合う激しいものになっていた。

「っ・・はぁ・・・んっ・・・ぴちゃ・・・・てぃあぁ・・・」

「んっ・・・はぁ・・・れろ・・・・ん・・・れいん・・・・・」

それからたっぷりとお互いを堪能した後唇を離す。

「少しはストレス無くなった？」

「ほんとは最後まで愛してもらいたいんだけど流石に我慢する。」

露出のけはないのでこんなところで行為に及ぶわけにもいかず、いま宿泊しているところも男女は分かれているが共同部屋なので我慢を強いられる。

「早く帰りたいね。」

「そうだね。そのためにももう少し頑張ろう。」

「うん。」

軽いキスを交わし宿へと戻って行った。

第２５話（前書き）

ドイツ語ってカッコいいですよね。

第２５話

ユミルを完成させた次の日の朝、地の神殿へと向かうためにメルトキオを出ようとすると１人の男が立ちふさがる。

「コレット・ブルーネルだな、クルシスの輝石を渡せ。」

「あなたは？」

沙耶は突然現れた男に警戒しコレットの前に立つ。

「答える必要はない。」

「すみません、これは大切なものなので。」

「そうか、しかし俺もそう簡単に引き下がるわけにはいかないのでな。」

そう言うとリヒターは武器を抜き、もう１度クルシスの輝石を要求するがコレットはそれも断る。

「ならば力ずくで奪わせてもらおう。」

街中にもかかわらずリヒターが襲いかかってくるが身内が傷つくことを何より嫌う沙耶が簡単に許すはずもなくフレズベルクで迎撃する。

「悪いがコレットには指一本触れさせはしない。」

「怪我をしたくなければ邪魔をするな。」

沙耶の外見で戦闘能力はないものと判断するリヒターだがすぐにその判断が過ちだと気付かされることになる。

「陽流・甲（ヨウリュウ　キノエ）」

リヒターは沙耶を殺さないよう手加減を加えつつ攻撃しようとするが、フレズベルクの風の鎧の前にはその程度攻撃が通るはずもなく簡単に流され、その隙に鳩尾に蹴りを入れ数メートル後方まで吹き飛ばす。

「くっ、どうやら外見通りと言うわけではなさそうだな。」

「お前程度の実力では私には敵わない。怪我をする前に消えろ。」

本来なら蹴りでなく、フレズベルクで切り裂いてもよかったのだが下手をすると殺してしまう危険性があり、生半可な手加減では逆上して自滅しかねないのでそれらを考慮して行ったのだがそれだけでは実力の差は分からなかったのかそれとも分かっていながら挑んでくるのか分からなかったがどちらにせよ面倒だと思っていたがなにもないところから人魚のようなものが現れ心境は一転した。

「そうか、そう言えばロイドが言っていたな。すっかり忘れていた。」

この瞬間リヒターは狙う側から狙われる側になった。

「センチュリオン・コアを渡せ。」

「断る。タイダルウェイブ」
先程の間に詠唱を終わらせ大量の水が押し寄せるが、風の鎧を通ることはなく、さらにエルーがギムレーで周りの被害をなくしていた。
「無駄だ、その程度では私に傷一つつけることはできない。理解したならおとなしくセンチュリオン・コアを渡せ。」
風の鎧を纏いリヒターに近づこうとした時、上空から氷の槍が降り注いだ。
もちろん沙耶には傷一つ付かないが周囲にいた野次馬の人たちに被害を及ぼす。
「無様ねリヒター。こんな子に負けるなんて。」
魔物に乗ってきた少女がリヒターと沙耶の間に降り立つ。
「久しぶりねコレットちゃん。マルタちゃんたちとは喧嘩でもしたの？」
「あなたは！！」
「コレット、知り合いか？」
「アスカードでエミルたちを襲ってきた、ヴァンガードの人だよ。」
「ふふっ、初めまして私はアリス、ヴァンガード、戦闘班リーダよ。」
サディスティックな笑みを浮かべながら周囲に魔物を呼び寄せる。

「それは都合がいい。」

「なんですって。」

予想外な反応を見せた沙耶に不満げな表情を見せるアリス。

「そろそろヴァンガードとは接触しようと思っていたんだ。それが都合よく目の前に現れてくれるとはな。」

「生意気、少しお仕置きが必要ね。」

そう言うと魔物を沙耶に仕向ける。

「エルー、ギムレーで結界をお願い。ユミルを試すにはちょうどいいから。」

「分かりました。」

沙耶たちを囲むように結界を展開し、外部から切り離す。

「展開。」

沙耶がそう言うと首に下がっている宝石が賢者の石を残しそれぞれの色のクリスタルを形どり沙耶を囲むように展開する。

「フュンフ（5番）　ガイアブレイク」

ルビーが輝き、大地が割れ魔物が裂け目に落ち閉じられる。

落ちた魔物は言うまでもなくひき肉なり、８つの内１つですべての

魔物を殲滅した。

「な、なにいまの・・・」

「もう終わりか？　お前には聞きたいことがある、死にたくなければおとなしく答えろ。」

呆然としているアリスに忠告するが、パニックになっているアリスには通じなかったらしく魔法を放ってくる。

「ドライ　（3番）　コロナフレア」

炎がアリスの魔法を包みこみ、凝縮、爆発しその余波だけで結界の壁まで吹き飛ばされる。

「次は当てる、死にたくなければ質問に答えろ。」

圧倒的な力の差に死神をイメージさせる黒目と黒髪、アリスはすでに戦意を失いおとなしく頷くことしかできなかった。

「さて、まず1つ目の質問だ。なぜヴァンガードはセンチュリオン・コアを集めている？」

「それはブルート総帥がバラクラフ王廟を復活させる為に必要としてるからよ。」

そこに立っているだけで死を連想させる沙耶の姿に嘘を言うという考えすら浮かばない程沙耶におびえているアリスは死にたくないという一心で素直に答える。

「2つ目の質問、ヴァンガードが所持しているセンチュリオン・コアはなんだ。」

「ソドム、地のセンチュリオン・コアよ。」

これで地の神殿に行く必要はなくなり、さらに質問を重ねる。

「3つ目の質問、パルマコスタを襲わせたのはヴァンガードで間違いないな。」

「どこで知ったか知らないけどその通りよ。デクスがソドムのコアでロイドになり変わって実行したの。」

「だそうだコレット、ロイドは完全に無実だ。」

「うん。ありがとうサヤ。」

嬉しそうにほほ笑むコレットに満足し最後の質問に移る。

「最後の質問だ、ヴァンガードの中にお前より強い奴はいるか？」

「そこにいるリヒター、ブルート総帥、それと私と同等くらいなのがデクスくらいよ。」

アリスの言葉が真実だとすればブルート総帥が1番可能性が高いが、前回のこともありそう簡単に実力を表に出すとも思いにくい為デスクという可能性も捨てきれないし、そもそも存在しないという可能性もある。

「お前の目から見て私と総帥はどちらが強いと思う？」

「あなた、いくら総帥でもあんなことできないわよ。」

考えるそぶりも見せず即答する。

こうなるとヴァンガードにいないという可能性が高くなってくる。

「っち、ヴァンガードはハズレか？　それとも隠れているのか・・・」

ぶつぶつと呟きながら思考にふけっている沙耶、この隙に逃げようとするがあれだけの時間でエルーがグレイプニルを張っていないはずがなく、あっさりと捕縛される。

「何かしら行動を起こしてくれないと対応のしようがない、いっそセンチュリオン・コアを与えてみるか？　しかし、エルーたちが危険にさらされる可能性が高まるから駄目か。」

抵抗を諦めたアリスと反撃の機会をうかがっているリヒターだがいまだにユミルは展開されており必要とあらばメルトキオを一瞬で滅ぼすことができる。

「おいお前たち、スパイになれ。」

「分かったわ。」

「断る。」

アリスは肯定、リヒターは否定の言葉を同時に即答する。

「女の方はいいとして、理由は？」

「俺には目的がある、おまえらに付き合っている時間はない。」
「立場が分かっていないようだな、お前に拒否権などない。あるのはおとなしく従うか、このまま殺されるかだ。」
無論、エルーとの約束で沙耶は殺すつもりはないが脅す為に禁忌としている言葉を口にする。
しばらく沈黙が続き先に折れたのはリヒターだった。
「お前たち2人にはヴァンガードに私が持っているセンチュリオン・コアを持って行け。そして、それを奪おうとした相手を私に伝えろ。」
「総帥が渡せって言ってくるわよ。もし上手く行っても相手は強いんでしょう。そんな相手から簡単に逃げ切れるの？」
アリスが質問すると、サヤがヘイルダムを投げ渡す。
「前者の方はなんとかしろ。後者はもし危なくなったらそれに魔力を込めてヘイルダムと言って相手に投げつけろ、少なくとも逃げるだけの時間は稼げるはずだ。」
アリスはヘイルダムを沙耶に投げつけ逃げようかと思ったがそれもすぐに断念させられる。
「分かっていると思うが私にそれは通用しない。それにヘイルダムは一発限りだ使いどころを誤るなよ。それにセンチュリオン・コアを持って逃げようとするなら地獄を見せてやる。」

脅しの為にユミルの８つの宝石の魔力を開放し空間が軋む。
これでヴァンガードに助けを求めてもヴァンガードごと滅ぼさせるということが分かり逃げるという選択肢は無くなった。

「私たちはしばらくここに留まるつもりだ。何かあればここに来い、ここに来れば最低限保護はしてやる。」

「分かったわよ。うぅ～、なんでこんなことに。」

アリスはリヒターを馬鹿にしようと降りてきたことを心底後悔し、今後少しは控えようと反省していた。

「言い忘れていたが、闇のセンチュリオン・コアとラタトスク・コアは諦めろ。私の仲間が入り込んでいる。下手に手を出せば命の保証はしないぞ。」

その言葉にリヒターが食いついてくる。

「それはどうにかならないのか？　俺はラタトスクに用があるんだが。」

「私たちの目的が終わってからにしろ。ラタトスクを消すためにさっき渡したものと同じものをくれてやる。」

「っち、いいだろう。」

苛立ちながらも了承すると今度はアリスが不満の声を上げる。

「リヒターばっかりずるい、アリスちゃんも報酬欲しい。」

アリスの口調に軽くいらだつ沙耶だが少しでも裏切る可能性を低める為我慢し要求を聞く。

「あなたの武器。」

「死にたいのか？」

沙耶がユミルを向けると慌てて謝る。

「冗談よ、冗談！！　でも私は力が欲しいの。」

突然真剣な表情になるが正直どうでもいい沙耶は適当に聞き流し、以前エルーに渡した指輪と同じものを時間を殺し渡した。

「それを着けていれば、出力はたいしたことないが無限に魔力を使える。先払いでくれてやる、その代わり最低限の役目は果たせよ。」

出力は低いというが常に一定の魔力、それも消して低い物ではないものを使われた魔法を使われれば相手をした方からすれば厄介極まりない。

「あなたって結構いい人なのね。ヴァンガードから乗り換えようかしら。」

先程までは恐怖でまともに考えることもできなかったのだが調子がいいことに関しては右に出る者はいないのかもしれない。

「上手くやれよ。」

そしてリヒターとアリスは去って行き、沙耶のこの手が事態を動か

す。

第２６話

ｓｉｄｅ　レイン＆ティア

イズールドの火災事件を解決した翌日、エミル一行は氷の神殿の近隣にある町フラノールへと向かう為、現在船の上にいた。

「ところで、どうして貴方がいるんですか？」

「ロイドのことが気になってな、それに世界の危機に指をくわえて見ているわけにもいくまい。」

この世界に来て慣れない腹の探り合いや最愛のティアとの触れ合いも制限されレインのストレスは胃が痛くなるほど溜まっており、さらにリフィル１人でも神経をすり減らす状態でリーガルが一行に加わり、本気で逃げ出そうかと考え始める。
しかし、沙耶の頼み事だけあって逃げるわけにもいかず、これからさらに痛むだろう胃を労わるように押さえる。

「ロイドさんが無実だといいですね。」

「ああ、ロイドは私を救ってくれた友だ。早く無実を証明してエミルにも誤解を解いてもらいたい。」

適当にやり過ごし離れようとするがリーガルがそれを許してくれない。

「そうですか。頑張ってください。」

「ところで君たちはなぜエミルたちに同行しているんだ。」
話しを切ろうとしても次の話題を引き出し、会話を続けさせる。
さらに近くにはエミルたちがいる為、本性を現して脅すこともできない。
やろうと思えばできないわけではないがそうなればエミルたちが反発してくることは目に見え、それを制圧することは容易だが後々ややこしくなるためエミルたちにばれるわけにもいかず会話という尋問を続ける。
「私たちの敵がヴァンガードに潜んでいる可能性があります。なのでヴァンガードから狙われているエミルたちに同行していれば向こうから敵がやってくるかもしれないからです。」
「それはエミルたちを囮にしているということか。」
「見方を変えればそうなります。しかし、どちらにせよエミルたちは狙われているんです。私たちはエミルたちを守り、囮として利用する。利害関係が一致していると思いませんか。」
「確かにそうだが、君たちがいれば敵とやらは寄ってこないのではないか。」
「その心配はありません。お互いに顔を知りませんし、相手は狙われていることも知りませんから。」
リーガルはエミルたちから離れろと遠まわしに言ってるがレインも目的の為にエミルたちから目を離すわけにはいかない。
「ふむ、本当に敵はヴァンガードにいるのか？」

「確実とはいえませんが、可能性はあると思います。」

「根拠は？」

「話す必要はありません。」

リフィルたちに聞けば分かることだが話しを終わらせるためにあえて話さない。

「いろいろと聞いて悪かったな。」

「いえ、あの件で貴方がそうすることは分かっていますし、理解できないわけでもありませんから。」

ここでリーガルが懸念していたことに触れる。

レインとしてもエミルたちにイズールドの件について知られては反論を受けるだろうがリーガルとしてはレインたちの目的が分からず刺激を与えるわけにもいかずエミルたちに進言することができない。そしてこの話を持ってくることによって、近くにエミルたちがいる状況ではこれ以上話しを続けるわけにはいかずリーガルも解放してくれるだろうというレインの思惑は成功しティアと共にその場から離れた。

「はぁ・・ちゅぱ・・ティア、ティア、んっ・・じゅ・・・はぁはぁ・・・」

「んっ・・・はぁはぁ・・・・あ・・・んっ・・・ず・・ぴちゃ・・・・」

レインとティアは人目のつきにくい場所に移動し激しいキスを重ねていた。

「んっ・・レイン、んっ・・くちゅ・・・大丈夫そう?・・ちゅ・・・・」

「ちゅぱ・・・れろ・・・・じゅ・・・はぁ、んっ・・・・あっ・・・・」

あまりのストレスに一心不乱にティアを求め続けるレイン。
ティアもこっちに来てからはあんまりやっていなかったので悪い気はせずレインに合わせ舌を絡めあう。
そうしている内に大陸が見え、お互いに重ねている唇を離す。

「ありがとう、ティア。」

少しすっきりとした顔で笑みを浮かべる。

「どういたしまして。」

レインが少しでも回復したことに満足し、あまり姿が見えないとなにをするか分からないのでエミルたちがいるところへ戻った。
それから上陸すると1度フラノールで休憩して氷の神殿へと向かうことになり、しばらく歩きフラノールへと到着した。

「なんだか街が騒がしいね。」

「なにかあったのかな?」

エミルとマルタがのんきに話している間、レインとティアはすぐに

意識を切り替え周囲を警戒する。
レインとティアの雰囲気が変わったことを感じたリフィルとリーガルも周囲の警戒とレインとティアへの警戒を強め街の中を探索する。
街の奥へと進むとロイドが突然現れ、エミルたちの顔を見た途端顔をしかめる。

「ロイド！！」

ロイドを見つけた途端、エミルがロイドに切り掛りロイドも応戦する。

「待ちなさいエミル！！」

パルマコスタ襲撃がヴァンガードの仕業だと知っているリフィルはエミルを止めようとするが聞く耳を持たずロイドと斬りあう。
しかし、数合切り結ぶとロイドは空へと逃げて行った。

「くそ！！　逃げられたか。」

「あれがロイドだと・・・」

聞かされていた事実と、目の前で起きた現実が一致しショックを受けているリーガルにスイッチが入っているエミルはロイドのことを悪く言うがその場をリフィルが鎮め、怪我人の治療のため１度解散することになった。

リフィルとマルタは治癒術でけが人を癒し、エミルとリーガル、ジーニアスはけが人を救出したり復旧作業を手伝っていた。
そんな中、レインとティアは事前にロイドは犯人ではないと聞かされていたので真犯人の痕跡が残っていないか辺りを捜索していた。

「何か分かりそう？」

「今回の事件はテセアラ側であるフラノールが襲われているからマーテル教会に属するロイドが関しているはずがないから、ロイドは止めようとしてたんじゃないかな。相手はロイドに変装しているわけだから本物のロイドは騒ぎが収まるとすぐに逃げたんだよ。」

街を見回りながら歩いてると知らず知らずのうちに街の奥にある教会まで来ており、なにも見つからなかったことから戻ろうとしていると強烈な臭いを放つ男が教会から出てきた。
さらに運の悪いことに目があってしまい、知らないふりをしてやり過ごそうとしたが強烈な臭いを放つ男がレインたちに近づく。

「君たちずっと俺のこと見てたみたいだけど、もしかして俺のファン？」

つい先ほど見かけ、偶然目があっただけでだというのにどうやったらこの結論にたどり着いたか少し聞いてみたい気もするが関わるとめんどくさいのは目に目えているため無視して帰ろうとするがティアがレヴァンティンを抜く。

「ティア？」

「こいつからは血の臭いがする。」

強烈な臭いの中に残る血の匂いを感じたティアの言葉で、すぐに警戒態勢をとるレイン。

「何者？」

「俺の名前はデクス、俺のファンなのは嬉しいんだが俺はアリスちゃん一筋だから、残念ながら君たちの想いには応えられないぜ。」

「ティア、本当なの？」

レインが疑いたくなる気持ちももっともと思えるほど、気持ち悪い勘違いをしているデスク。

「冗談はいいから、あなたからは血の臭いがする。フラノールを襲ったのはあなた？」

ティアの言葉に緩んでいた顔が締まる。

「良い勘してるぜ。だが知ったからにはこのままにしておくわけにはいかないな。」

「ティア気をつけて、もしかしたらあいつが私たちの敵かもしれない。」

「分かってる、援護よろしくね。」

前回の魔王は沙耶がいなければ勝てなかったほどの強敵、そして今度の敵はまったくの未知数なので警戒を最高レベルまで高め戦いに臨む。

「話しは終わったかい。それじゃあ行くぜ！！」

レインたちの話しが終わるとデスクが大剣を抜きティアに斬りかかるが、いつも沙耶の攻撃速度を見慣れているティアにとって止まっ

て見える程度の速度だったが剣になにが仕掛けてあるか分からないので受けることはせず回避する。

「レイン！！」

「分かってる。」

ティアがデクスを引きつけている間に氷の槍をデスクに殺到させる。これはただの目隠しの為に向けたもので次には本命のティアの炎で攻撃するつもりだったのだが氷の槍はデクスに数本刺さっており膝をついていた。

「この俺が負けるだと・・・」

膝をつきながら悪態を漏らすデクスを見ていたティアとレインは首をかしげ

「「弱！！」」

確かにレインはエミルレベルに放てば必殺となりうる威力で攻撃したがあの程度攻撃なら前回の魔王は手を振るだけで無効化してきたので、あまりにあっけない終わりに逆に疑いたくなったがどう見ても演技には見えず、早めに治療を施さないと死んでしまうほどの傷を負っていた。

「もしかして人違い？」

「そうみたい、でもセンチュリオン・コアは持っているはずだから不幸中の幸いかな。」

目的の相手とは違ったがセンチュリオン・コアを手に入れられたということでとりあえず満足したレインたちはデスクからセンチュリオン・コアを奪った後、最低限の応急処置を施しエミルたちのもとへと戻って行った。

第27話

ｓｉｄｅ　ティア&レイン

デクスからセンチュリオン・コアを奪った後、センチュリオン・コアをシンモラの錠を改良したもので封印し何事もなかったかのようにエミルたちのもとへ戻って行った。

「どこに行ってたの？」

「マーテル教会の残党がいるかもしれないから少し見回ってきた。結果としては何もなかったけど。」

単純なエミルとマルタはレインの言葉にだまされるがロイドが犯人ではないと知っているはずのレインがわざわざそんな行動をとるはずがないと確信しているリフィルは騙されることはなかった。ここでいつもなら疑いの目をむくてくるリーガルだがショックが大きかったのかレインの言葉を聞き流していた。

「それじゃあ、氷の神殿に行こう。」

そしてフラノールを後にし、エミル一行は氷の神殿に向かおうとするがレインが呼び止める。

「待って、またロイドがこの街を襲撃する可能性があるから私とティアはここに残るね。」

その言葉にリフィルが口を挟もうとするがその前にエミルとマルタが賛同を示しレインとティア、そしてセージ姉弟が残ることになっ

た。
フラノールからエミルたちを見送った後、すぐにレインは行動を始めた。
「待ちなさい。」
「どうしたのリフィルさん？」
「どうしてあなたたちはここに残ったの？」
「それはこっちのセリフだよ。契約を忘れたの？」
突然、空気が変わったことに戸惑うジーニアスだが流れる空気の重さに口をはさむことができない。
「私たちのことをばれないようにすること、それに情報の対価に援助するって言ってたよね。」
「あなたの要望を聞く限りエミルとマルタに聞かれなければ問題はないわよね、それにあなたたちが残ったということはすでに氷の神殿にはセンチュリオン・コアは存在しない、それなら援助も何もないでしょう。」
確かに具体的な人物を上げていない以上契約上問題はないが、知っている人物は少ないことにこしたことはない。
「ジーニアスが話してしまうという可能性は？」
「私が見張っているから問題ないわ。」

「姉さん、いったいどういうこと！？」

勝手に自分の処遇を決定されようやく横やりを入れることができたジーニアスだがリフィルはレインとの論戦に集中し耳に入っていない。

「まぁいいや、それよりここに残ったなら街の中にいるヴァンガードを捕まえて。」

「どういうこと？」

「逃げたロイドは本物でも街を襲撃したロイドは偽物だよ。そしてテセアラ側であるフラノールを襲撃する理由はマーテル教会にはない。それなら偽物と疑われる可能性が高まるのになぜそんなリスクを負って襲撃を実行したと思う？」

「偽物はヴァンガードの一員なのだからテセアラ襲撃は当然なのではないかしら。」

「確かにそれもあるかもしれないけど、こんな辺境の町を1つ制圧したところで意味なんてないよね。」

流石のリフィルもこれだけの情報では全体を見通すことができず沈黙してしまう。

「それじゃあヒント、センチュリオン・コアって宝石みたいできれいだと思わない？　何も知らない人から見ればとても価値のあるようにみえるよね。」

「・・・・なるほど。つまりヴァンガードはすでに氷の神殿を調べ

終わってセンチュリオン・コアがないことを確認していて、近くの町であるフラノールにあると思い襲撃したというわけね。」

実際レインはこの情報からこの結論に至ったわけではなく、いまだに幹部であるデクスが残っていたことに疑問を持ち突き詰めた結果至ったのだがそれを話してしまうとレインたちがセンチュリオン・コアを所持していることがばれてしまう為、回りくどい真似をしてリフィルを誘導していた。

「この街にセンチュリオン・コアがあったにせよなかったにせよいまだにヴァンガードが残っているってことはエミルたちを狙ってのことだと思うから協力してね。」

そして探索を始めることになりティア1人とレインとセージ姉弟の2手に別れ探索することになった。
ティアはよほどのことがない限り負けることはないがリフィルやジーニアスと組ませると不安要素が出てきてしまうので、それらを抑えられるレインが一手に引き受けることになりフラノールを歩きまわる。

ｓｉｄｅ　レイン

ティアと一旦別れ探索するようになり、誰の目から見ても1秒ごとに機嫌が悪くなっておりそんな様子を見かねてたリフィルが尋ねてみようとするがあまりの気迫に躊躇ってしまう。
それでも勇気を振り絞り尋ねみると

「ティアがいないから。」

短い返事が返ってくるがティアがいないだけでここまで不機嫌にな

れるものなのか疑問に思っているとレインが続けて話し始めた。

「そもそもあなたたちがせいで唯でさえストレスがたまるのにここ最近全然ティアと2人きりなれないしもういっそのこと全員力ずくで屈服させれば・・・・」

これを沙耶やエルーが見たらティアという癒しがなくなったレインが若干暴走しかけている程度にしか見えないところだがリフィルから見れば笑えない事態なのでどうにか解決しようと事情を聞こうとするが、後にこの行動を心底後悔することになる。

「落ち着いてレイン、これでも私は教師だから相談には乗るわよ。」

レインのストレスの1番の原因が相談に乗ると言うのもおかしな話だがレインは精神衛生上少しは吐きだした方が良いだろうと思い愚痴をこぼし始めた。

「ティアが恥ずかしがるから言ってなかったけど私とティアは婚約を交わした仲なんだ。元の世界ではいろいろと在ってあんまりいちゃつけなかったから戦いが終わった後は存分にいちゃつきたかったのにこの世界に飛ばされて全然いちゃつけないし、ばれないようにしないといけないから神経使うし、どこかの誰かさんは私を追い詰めるような真似をするから黙らせる必要もあったからストレスがたまってるんだよ！！　私とティアは付き合い始めてまだ2ヶ月しか経ってないのに全然エッチができない！！　ただでさえ恥ずかしがり屋のティアはこんな状況だから全然手を出してくれないし、キスだって前の世界なら1時間に1回はしてくれたのにこっちに来てからは人目を気にして数日に1回だけしかしてくれないんだよ！！」

一息に愚痴を吐き続けるレイン、そして年齢的に聞かせれられない

話が出てきてからはジーニアスの耳をふさぎながら適当に相槌を打って返すがよほど鬱憤が溜まっていたのか愚痴はまだまだ続く。

「私はいつティアに襲われてもいいように準備してるのにティアは全然気づいてくれないし、私から誘わないと全然手も出してくないんだよ！！　私だってたまには強引に襲われてみたいのに肝心のティアは何度も誘惑して無理矢理その気にさせないとエッチしてくれないんだよ！！」

いろいろと突っ込みどころがあるが突っ込んだところでさらに愚痴を加速させるだけだと判断したリフィルはただ機嫌を損ねることがないよう聞くだけだったがだんだん愚痴から惚気話に代わって行った。

「でもティアがその気になった時はすごいんだよ。ティアの指って細くて長いし、指先も器用だからすぐに気持ち良くしてくれるし、キスだって最初は私に合わせてくれるけど少し経つと口の中を犯されているみたいに蹂躙してくるんだよ。その度にイかされちゃうんだけどその気になったティアはそんなの関係なしに続けて何度も連続でイかされて、頭が真っ白になった時にティアが甘い声で私に囁いてくる時はもうめちゃくちゃにして欲しいって思わされちゃうんだよ。」

ほほを赤く染めながら恋人の自慢をするレインに彼氏の1人もいないリフィルは真剣に彼氏を作ろうかと考えている中レインの惚気は止まることなく続いていく。

「ティアは着やせしちゃうけど脱いだらすごいんだよ、ティアの裸を見るたびに目が釘付けになっちゃうんだけど嫉妬もできないくらい綺麗であの紅い目で見つめられたらもう逆らえなくて、とにかく

ティアは最高なんだよ。」

この後はひたすら惚気話が延々と続き途中からは同じ話を延々と繰り返し聞かされ、機会があれば必ず2人きりにしてあげようと心に誓ったリフィルだった。

それから惚気話を続けながら街の中を歩いていると街の外で火の柱が上がる。

「あれは！！」

「ぐずぐずしないで、行くよ！！」

すぐに意識を切り替え街の外に向かうとそこには既に制圧されていたヴァンガードの残党と街の人と思わしき人たち、そして妙な服を着た女性がいた。

「ん、リフィルじゃないか。」

「しいな、どうしてここに？」

「偶然通りかかってね、それよりこれはどういうことだい？」

「それは私が説明します。」

余計なことを話されてはたまらないとリフィルとしいなとの会話に割り込み、知られて問題ない程度に事情を説明していく。

「それよりリフィル、ロイドがやったて噂は本当のことなのかい？」

レインと軽く目を合わせると首を軽く横に振る。

「分からないわ。もしかしたらセンチュリオン・コアに惑わされているのかもしれない。」

「なるほどねぇ。よし、私も一緒に行くよ。」

「そう、そこの人たちから話を聞かないといけないから1度フラノールに戻りましょうか。」

新たにメンバーが加わりまた厄介事が増えたと溜息をついているレインだった。

第２７話（前書き）

ここでラスボス登場

第27話

side　ティア

レインたちと1度別れティアは1人ヴァンガードを探すためフラノールの街を歩きまわっていた。

「そういえばレインと別行動するのっていつぶりかなぁ。」

レインが沙耶たちの仲間に加わってから2手に別れる時は沙耶とエルー、ティアとレインのペアで4人でいる時もエルーが沙耶を離さないので必然的にティアとレインが一緒にいる時間が増え、さらに付き合い始めてからは片時も離れることがなかったのでどこか物寂しさを感じていた。

「こっちにきてからあんまり構ってあげられなかったからなぁ、機会があればいいんだけど。」

同時刻、見方によると敵ともとれるリフィルから同情されるような愚痴を延々と吐き続けているレインがこの言葉を聞くと狂喜乱舞するだろう。

「でもやっぱり恥ずかしい／／／／　どうやったらエルーやレインみたいになれるんだろう。」

いままで人を信じようとしなかっただけにどうしても気恥しさを覚え積極的になれないティア。

「いつもレインからっていうのも悪いし、次は私から・・・・は無

理かもしれないからせめてどちらからともなく自然に・・・・できるといいなぁ。」

どんどん妥協し結局いつもと変わらない結論になってしまい大きなため息をつく。

「はぁ、どうして私なんかを好きになったんだろう。レインはあんなに可愛くて良い匂いがして、頭も良いし、自分で迫っておきながら責められるとすぐにイっちゃうし、それから・・・・・はぁ、私ってほんとにレインのこと好きなんだなぁ。」

こっちの世界に来てから交渉はもちろん戦闘でもティアが本気を出すような相手などいるはずもなくレインに負担をかけてばかりだと軽く落ち込んでいた。

そして、溜息をつき再び同じとこに戻ってしまい同じようなことを呟きながら歩いていると、街の外に出てしまっていた。

「はぁ、レインの前でこんな顔見せられないから少し頭冷やしてから戻ろう。」

それから町の外を歩き回っていると戦闘音が聞こえたためその方向へと行ってみるとヴァンガードと妙な服を着た女性が戦っていた。

「とりあえずヴァンガードは捕まえようかな、あの人は・・・・レインに任せよう。」

情けないと思いながらもレインから頼まれたことくらいはやっておこうと戦場へと乱入する。

「誰だ！！」

「答える必要はないよ。」

レヴァンティンの魔力を完全に封印した状態でヴァンガードを沈め、残った女性に切っ先を向ける。

「悪いけど少しの間おとなしくしててね。」

「あんたがその剣を収めたらね。」

「分かった。」

短く返事を返すとレヴァンティンを地面に突き刺し魔力を開放、そして大きな火柱を上げレインたちへ合図を出す。

「さっきのは？」

「仲間への合図だよ。すぐに来ると思うからそれまでおとなしくしてて。」

お互い警戒はするがティアは負けることはないだろうと最小限の警戒を残したまま、ヴァンガードによって拉致らされた人たちの安否を確認し、その様子を見て女性の方も警戒を解きレインたちを待つことになった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ティア&レイン

ティアと合流し街の人たちの話を聞くために1度フラノールへと戻ることになり拉致されていた人の怪我を癒していく。

「それじゃあ行こうか。」

「それには及ばん。」

治療が終了しフラノールへと向かおうとした時1人の男が立ちふさがった。

「レイン。」

「分かってる、たぶんこいつだよね。」

デクスとは比べ物にならないプレッシャーが圧し掛かり一目で理解できた。

「貴様らがイレギュラーか、これ以上計画を乱されてはかなわん。ここで消えろ。」

「みんな下がって！！」

レインが叫ぶと同時に男が雪を蹴散らしながら接近し、レインが特大の氷の塊を降らせる。

「ふん！！　なるほどデクスでは無理な相手だ。」

足を止めることはできたが氷の塊を素手で砕き無傷でその場に立っていた。

「リフィルさん、今すぐこの場から逃げて。」

「・・・分かったわ。」

「仲間を見捨てて行くってのかい！！」

リフィルの決断に憤るしいなだがレインたちの力を知り、それに真っ向から戦える相手に足手まといにしかならないことを知っているジーニアスは黙って見ていた。

「しいな、私たちでは足手まといにしかならないわ。彼女たちのことを心配するなら私たちは今すぐこの場を去るべきよ。」

隕石とも思える氷の塊がいくつも降り注ぎ、大地を焦がす紅蓮の炎がすべてを飲み込む中平然としている男。
常識では考えられない光景に出かけた言葉を飲み込み歯を食いしばりながらその場を後にした。

「やっと行った、これで思う存分戦える。来てウンディーネ。」

以前までなら長い詠唱を必要としたが訓練のおかげで膨大な魔力を使えば詠唱なしでも精霊を呼べるようになっており、前回の魔王戦の時よりも呼べる精霊は強大になっていた。

「行くよ、ウンディーネ。」

呼びかけに応じ、フラノールを丸々飲み込める量の水で数えられな

いほどの龍を作り出しそれぞれが縦横無尽に男へと殺到する。
「流石に素手では厳しいか、光栄に思えダーインスレイヴを抜くのはこれで2度目だ。」
漆黒の大剣を振り回し、襲いかかる龍をものともせずに進んでくる。
「これくらい予想済みだよ、吹き飛べ！！」
殺到していた龍が凍りつき大爆発を起こす。
さらに、その間も水龍は止まることを知らず接近し爆発を起こす。
「小賢しいわ！！」
漆黒の大剣から漆黒の剣閃が走り、水龍を飲み込んでいく。
しかしこの攻撃もすべてはティアの一撃の為の布石、本命のティアは爆撃で視界を遮り空へ飛び、翼をたたみ急降下しレヴァンティンを突き刺す。
「これで終わりだ！！」
圧縮された炎が爆発し大地にクレータを刻み、余波の熱で雪原が荒野へと変わる。
しかしその中で男はいらついた表情ながらもいまだに無傷で立っていた。
「バルドルまで使わせよって、消えろ！！」
空を飛びまわるティアにいくつもの斬撃が走る。
それらをすべて迎撃し体勢を立て直すため1度レインのもとへと戻

る。

「どうするレイン？」

「私たちだけで倒せればそれでいいんだけど、ちょっと厳しいかも。」

いくら第3解放とはいえ前の世界では魔王以外なら問答無用で消し済みにする威力を無傷で耐えきり強力な武器を使い、いまだ底を見せない相手故に慎重になっていた。

「レイン、第7解放耐えられる？」

「大丈夫って言いたいけど、正直ぎりぎりかな。守りに専念すれば耐えられると思う。」

「それならお願い、あいつは私が倒す。」

「分かった、気をつけてね。ウンディーネ。」

近くにウンディーネを呼び何重にも水の壁を張り、さらにその上から何重にも氷の壁を展開する。

「死ぬ覚悟は決まったか、俺にここまでさせた罪は重いぞ。」

「まさか、私たちには帰る場所がある。だからこんなところで死ねないよ。」

いままで戦闘では第6解放までしか使ったことがなく、第7解放は解放しただけでレインでもぎりぎり耐えられることができるレベル

にまで一気に跳ね上がる為使うことができなかった。
しかし、ここで初めて第7解放まで解放するため暴走させないよう気を静めていた。

「光栄に思ってね、これは見せるの初めてだよ。シンモラの錠第7解放」

解放した瞬間、あまりの魔力に世界が軋みをあげ辺り一帯炎に包まれ、大地は焦土と化し、空は焼け落ち、解放だけで周囲の世界が一変する。

「行くよ。」

レヴァンティンの一振りで視界が炎で埋め尽くされ、男はダーインスレイヴで相殺しようとするが魔力の量が文字通り桁が違い斬撃は炎に飲み込まれる。

「調子に乗るな！！」

バルドルの壁で炎を耐えきるが、ティアの攻撃は休むことなく世界を焼き尽くす。

「喰らえ、レヴァンティン」

ティアの炎が龍を形取るがレインが放っていた龍とは比べ物にならない大きさと魔力量で男を飲み、大地が沈む。

「うおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

バルドルの壁にひびが入り大地と共に沈んでいくがそう簡単に沈む

相手ではなく龍を斬り伏せ這い上がってくる。

「スキーズブラズニル！！」

男がそう叫ぶと雲から大きな船が現れ、男はその船へと瞬間移動する。

「この俺に無駄な時間を取らせおって！！　消え失せろ！！」

船から様々な魔法や砲弾、砲撃が飛び交う。

「消えるのお前だ！！」

圧倒的大火力ですべての攻撃を相殺し、船へと近づくため紅蓮の翼を顕現させる。

船からの攻撃が降り注ぐ中、攻撃をすべて相殺し船の上へと飛翔し男を見下ろす。

「俺を見下ろすな！！」

「今度こそ沈め！！」

圧縮した炎と船の全戦力が激突し天地が振動する。

そして煙が晴れた時には船の姿はなく男の姿もそこにはなかった。

「逃げられたか。」

この世界で初めての敵と戦闘はこうして幕を引いた。

第２９話

ｓｉｄｅ　ティア＆レイン

突然現れた敵との激戦を終えティアはレインのもとへと降下して行った。

「ごめん、逃げられちゃった。」

「しょうがないよ、ティアは本気を出すわけにはいかないし、サヤさんたちもいなかったんだから。」

第７解放でさえも大陸の一部を沈める威力を持ち、残りの２段階からは魔力が一気に跳ね上がり第７解放以上は大陸を容易に焦土化し沈めることすら可能な威力なだけによほど追い詰められない限り使うことができない。

「とりあえずお互い無事みたいだし街に戻ろう。あいつもこっちの戦力を知ったからには行動を急いでくるはずだから私たちも早くサヤさんたちと合流しないと。」

「分かった。」

雪原だった荒野を後にし、ティアとレインはフラノールへと戻って行った。」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　アリス

沙耶からスパイとしてヴァンガードに送り込まれたアリスはセンチュリオン・コアを携え本拠地へと帰還した。
その間リヒターは最後のセンチュリオン・コアがある雷の神殿へと向かって行ったため少々危険ではあったが単独行動となりヴァンガード総帥であるブルートのもとへと向かっていた。

「ブルート総帥、ウェントスのセンチュリオン・コアを手に入れました。」

「よくやった。早々に残りのセンチュリオン・コアを回収してこい。」

「分かりました、ブルート総帥このセンチュリオン・コアは私が持っていてもよろしいでしょうか。」

「なぜそのようなことを聞く？」

「このセンチュリオン・コアを囮にしてマルタをおびき寄せようと思います。」

「・・・・・・・いいだろう。良い報告を期待しているぞ。」

「はい、では失礼します。」

手も足も出なかった沙耶の仲間がいるマルタのところにセンチュリオン・コアを奪取しに行く気など毛頭なかったが沙耶の命令通りアリス自身が持っていなければ意味がいないので建前でブルートを誤魔化しセンチュリオン・コアを手に入れたと言いふらしているとデ

クスが部下に運び込まれていた。

「ちょっとデクスどうしたの。」

「すまないアリスちゃん、マルタたちを罠にはめようとしたら女2人にセンチュリオン・コアを奪われた。」

恐らく沙耶が行っていた仲間のことだろうと確信し、手を出さないでよかったと安心していると金髪で長身の男が苛立ちながらこちらに歩いてきた。

「貴様、いますぐセンチュリオン・コアを寄こせ。」

「あなたはロキだったかしら、アリスちゃんに向かってそんな口を聞くなんて死にたいの。」

「調子に乗るな女、俺に無駄な時間を取らせるな。」

「それはこっちのセリフよ、死になさい。」

沙耶からもらった指輪から魔力引き出しロキへと魔法を放つ。
そしてすぐに元の魔力へと戻った指輪に驚いたが、すぐにいいものを貰ったと笑みを浮かべ続けざまに指輪とアリス自身が持つ魔力を合わせ、本来のアリスが全力で放つ魔力を使い魔法を使う。
それでもアリス自身の魔力はほとんど減らず余裕の笑みを浮かべていたが相手は沙耶たちが警戒する相手でありアリスがいくら全力を出そうと傷一つ付いていない。

「無駄な時間を取らせ追って、消えろ。」

ロキが魔法を放ちアリス以外の人間が一撃で殺され、他のヴァンガードの構成員も騒ぎを聞きつけ駆け付けるが全員が虐殺され既にヴァンガードは崩壊まで追い込まれていた。

「ヘイルダム」

ロキが虐殺を行っている好きに沙耶から渡された宝石を投げつける。膨大な魔力に危機を覚えとっさにダーインスレイブで斬り伏せるが完全に抑えることはできずヘイルダムから放たれた光の奔流に飲み込まれる。
その隙にアリスはその場から逃げ沙耶たちがいるメルトキオへと向かった。

side out

side ティア&レイン

「無事だったのね!!」

ティアとレインがフラノールへと戻るとリフィルが駆け寄ってくる。

「なんとかね、あいつには逃げられちゃったけど。」

「そう、それじゃあの男があなたたちが言っていた敵というわけね。」

離れた場所からでさえも戦いの激しさが窺える程、すさまじい激突故にいくら強いとはいえ心配していたリフィルたちはほっとする。

「そういえばセンチュリオン・コアはどうなったか分かる?」

「そのことなんだけどすでに売られているそうよ。買った人はメルトキオの貴族だそうだからエミルたちが帰ってきたら向かいましょう。」

「分かった、リフィルさんちょといい。」

その場をティアに任せリフィルと共にその場を離れる。

「いったい何を話してくれるのかしら。」

直接的に呼び出されるのは今回が初めてなので警戒していると

「ありがとう。リフィルさんがいなかったらあそこいた人たち全員巻き込まれて死んでいたと思う。」

思いもよらない感謝の言葉に驚くリフィル。

「そしてここからはお願い、今回みたいなことがあったらすぐにみんなを連れて逃げて。遠くから見ていても分かると思うけどあれはあなたたちがどうこうできる相手じゃない。」

「分かったわ。」

いまさらどう言ったところで足手まといにしかならないことは火を見るよりあきらかでありリフィルも仲間を死なせたくはないので二つ返事で了承する。

「話しはそれだけ、戻ろう。」

レインとリフィルがティアたちのところへ戻ると既にエミルたちが戻って来ていた。

「戻ってたんだ。」

「セルシウスの涙っていうのを使うためには手袋が必要だってリーガルさんが言ったから街に戻ってきたんだけど何かあったの？」

「それは私が説明するわ。」

リフィルがエミルたちにあったことを説明するとすぐに納得しこの日は解散となった。

「レイン、エミルたちは私がなんとかしておくからティアと2人で過ごしていいわよ。」

「お、恩を売るつもり。」

あまりに魅力的な提案だが相手がリフィルなだけに簡単に誘いを受けるわけにはいかないが誰が見ても2人きりになりたいと分かる。

「そんなつもりはないわよ。それにあなたたちのおかげで罠にひっかることも未然に防げたからそのお礼よ。」

実際はレインの愚痴に同情してしまった理由が一番大きいのだがそれは言わずが花と思い建前だけを言う。

「そ、それならお言葉に甘えるね。」

「ええ、明日の昼までは大丈夫だと思うわ。」

その言葉を聞くと、これからティアとレインがすることが分かっていると言っているようなものでティアなら羞恥のあまり逃げ出してしまうが、レインは羞恥よりも喜びが上回り顔を緩ませながらティアのもとへと走って行った。

「ああしているところをみると普通の女の子なのよね・・・・・とりあえずエミルたちの所へ行きましょう。」

ティアとレインが話している姿をみるとエミルたちの所へ戻って行った。

第３０話

ｓｉｄｅ　ティア＆レイン

ようやく現れた敵との激戦の翌日、リフィルは宣言通りティアとレインに別行動をとらせることに成功しティアとレインは日が登り随分たった後目が覚めた。

「おはよう、ティア。」

「おはよう。」

挨拶をかわすと自然に顔を近づけキスをする。

「昨日はすごかったね。」

恍惚とした表情で昨日の夜の営みのことを思い出し悶えていた。

「その、ごめんね。途中から止まらなくなっちゃって。」

「どうして謝るの？　私はティアが積極的になってくれて嬉しかったのに。」

リフィルから2人きりにさせてもらえると聞いた後、そのことをティアに伝えそのまま引っ張って行くつもりだったのだがティアがなけなしの勇気を振り絞り、顔を真っ赤にし羞恥に悶えながらもレインを誘い、レインは驚きながらも初めてティアが誘ってくれたことに暴走するどころか逆に顔を真っ赤にし、おとなしくなってしまった。

そんなレインを見てティアの理性が切れてしまい部屋に着いた途端レインを押し倒し一晩中ということになり前回と同様睡眠時間など取る時間などあるはずもなく、そのことにティアは反省していた。

「落ち込まないでよティア、私は気にしてないから、むしろ毎回ティアから押し倒して欲しいかも。」

「あはは・・・・」

昨日の自分を思い出すと羞恥のあまり逃げ出したくなるがそういうわけにもいかず苦笑することが精一杯だった。

「さて、もう少しこうしていたいけどそろそろ行こっか。」

「そうだね、早く沙耶たちと合流しないと。」

一糸まとわない格好でお互い抱き合い温もりを感じていたがそろそろリフィルが誤魔化すことも限界なので名残惜しくも離れリフィルたちのもとへと向かった。

side out

side 沙耶&エルー

沙耶たちはリヒターとアリスが現れて以来、特に何事もなくただメルトキオの街をぶらぶらしていた。

「この街に来てもう3日ですか、いい加減やることもなくなってきましたね。」

「街もほとんど見て回ったし、本当に暇だね。」

「それじゃあ闘技場に出てみたら？　サヤたちなら絶対いところまで行けるよ。」

「悪くないな、ちょっと行ってみるか。」

コレットの提案で闘技場に向かうことになり受付の人から説明を受けていた。

「個人戦と団体戦か、エルーどっちにする？」

「私とサヤが全力で戦ったら街ごと消滅させませんから団体戦にしましょう、3人1組みたいなのでコレットさんを入れればちょうどいいですし。」

「コレット、大丈夫か？」

「うん、それに私に何かあればサヤが守ってくれるでしょ。」

「そ、それはそうだが・・・・・」

だんだん沙耶の扱いに慣れてきたコレットはどんなことを言えば沙耶が恥ずかしがるのか分かっているが恥ずかしがっても悪い気はしていないと分かっているのであえて直接的な言葉を使う。

「それじゃあ行くか。」

3人は闘技場へと進み第1回戦の相手は全身鎧の騎士3人だった。

「エルー、どうする？」

「そうですね、あの程度なら一発で打ち抜けますからお互いに武器なしで、魔法は簡単なものだけでやりましょう。」

「あはは・・・」

相手は王宮の騎士だというのにどうやって戦うかではなくどういう条件を付けて戦うかを話し合っている友達2人に苦笑してしまうコレットだった。

「コレット、残りの1人いけるか？」

「大丈夫、私も再生の旅で少しは戦ったりもしたから。」

沙耶たちの準備ができると戦闘開始の合図が鳴り、沙耶とエルーは獲物を仕留める為、重厚な鎧纏った騎士へと肉薄する。
騎士は向かってきた沙耶たちに剣を振り下ろすが、模擬戦をしている際その何倍もの速度で戦っている沙耶とエルーには止まって見えるほど遅く、沙耶は横に避けると懐へ潜り込み魔力を掌に圧縮し鎧を貫通する衝撃を与え、体をくの字にしている騎士の頭を掴み再び鎧通しを使い昏倒させる。
エルーは鎧の継ぎ目を正確に狙い魔法で攻撃し沙耶と同時に無力化した。

「同時ですか、流石サヤです。」

「本当にエルーは強くなったよ。」

「ふふっ、ありがとうございます。それよりコレットさんは？」

「あそこでまだ戦ってる。」

世界再生の旅で鍛えられたとはいえ、沙耶とエルーはほぼ毎日世界トップクラスの実力を持つ同士の訓練を行っているので流石に沙耶たちと同時というわけにはいかないがチャクラムが重厚な鎧を貫きコレットの勝利が決まった。

「やっぱりサヤたちは強いんだね。」

「まぁ、私たちはいろいろと特別だからな。それよりコレットもよくやったな。」

「ありがとう、次も頑張ろうね。」

それから2回戦3回戦と沙耶とエルーに勝てる相手などいるはずもなく2人は開始3秒以内に相手を沈め、残りはコレットが怪我をしないようさりげなくフォローを入れ順調に勝ち進んだ。

「もう決勝戦か、あっけなかったな。」

「もう少し手ごたえがあるかと思っていました。」

決勝戦に至るまで沙耶たちは武器をとることもなく簡単に敵を沈め不満の声をあげていた。

「流石にサヤたちと戦える相手はでてないよ。」

サヤたちが戦ってきた相手はコレットから見ればそこそこ強かったがサヤたちとまともに戦えるとすればそれは世界でもトップクラスの実力で、サヤたちが武器を持てばそれこそ前の世界の魔王レベルにならないと戦いにすらならない。

そして決勝戦となり流石にここまで勝ち上がってきただけの実力があり沙耶とエルーの攻撃を防いでいた。

「やるな、俺たちも本気でいかせてもらう。」

沙耶と戦っていたリーダーと思わしき男はスピードを上げで沙耶へと攻撃するが服に掠ることもなく、隙を見ては魔法を叩きこむ。そもそも本気も何も沙耶たちは禁呪でスピードを上げているわけでも、武器すら使っていない、その状態でようやく互角の戦いとなりそれを知らない観客は大いに盛り上がっていた。そしてそろそろ終わらせようと大きめの魔法を使おうとした時コレットが敵の1人の攻撃を受けた。

「コレット！！」

「お前の相手は俺「黙れ！！」がっ！！」

コレットのもとへと向かおうとする沙耶の前に立ちふさがろうとしたがフレズベルクで叩き伏せ一瞬で沈んだ。

「コレット大丈夫か！！」

「大丈夫だよ、きちんと受け身はとったから。」

実際コレットにはかすり傷程度しかついていなかったがそれでも沙耶の逆鱗に触れるには十分であり、今回はエルーも表情には出してはいないがかなり切れていた。

「エルー。」

「分かっています、それに今回は私もやらせもらいますよ。」

その殺気が相手にも伝わり、すでに仲間の2人は倒され棄権しようと声を上げようとするがそれを沙耶たちが許すはずもなく声を上げようとした瞬間、沙耶が顎を蹴り飛ばし浮かせるとエルーが魔法で爆発を起こし空中へと打ち上げる。
そして沙耶が雷の槍で串刺すとエルーが水で圧迫し、止めに沙耶とエルーが光と闇でそれぞれ上と下から押しつぶし、ぎりぎりで死なないところまでいたみつけた。
先程まで盛り上がっていた会場は凶悪な空中コンボにあっという間に静まり、沙耶たちを怒らせた男に黙とうを捧げていた。

「2人ともやりすぎだよ。」

「悪かった。」

「すみません。」

表彰式が終わり帰ろうとしたところコレットによる説教が始まり、やりすぎたと自覚している2人はおとなしく反省していた。

「これからはあんなことしちゃだめだよ。」

再びこのようなことがあっても間違いなく同じことを繰り返す自身がある2人はそう簡単に頷くことができず、目をそらす。

「駄目だよサヤ、エルー。」

「わかりました。」

「・・・・・だが、コレットが危険と判断した時は止まらないからな。」

「うん、ありがとうサヤ、エルー。」

こうして闘技場を後にし、宿へと戻ろうとすると宿の前に満身創痍となっているアリスがいた。
あわててアリスのもとへと駆け寄ると、沙耶の方へと倒れ込み

「あなたが言っていたやつがヴァンガードを滅ぼしたわ、そいつの名前はロキよ。」

それだけ伝えると気を失い、沙耶が抱きとめるとエルーが治癒の魔法をかけ体を癒す。

「命に別状はないと思います、明日になれば目を覚ますと思いますからその時に詳しく話を聞きましょう。」

「ようやく動いたか。」

第３１話

アリスが沙耶たちのもとへ逃げてきた翌日、いつ襲撃があっても対応できるように沙耶とエルーは屋根の上で見張りをしていた。

「ついに来ましたね。」

「うん。エルー、先に言っておくね、私は見つけた瞬間に殺すよ。」

「それは困りましたね、できれば私が始末したいのですが。」

風が吹き抜ける中、決意を秘めた瞳を交差させながら宣言する。

「今回も諦めて。前回同様一瞬で終わらせるから。」

「サヤ、また一人で背負うつもりですか？」

「結果的にはそうなるかもしれないけど、私はエルーやティア、レインと一緒に戦ってきたつもりだよ。だから心配しないで、この世界に来て少し私の力が嫌いじゃなくなったから。」

柔らかい笑みを浮かべる沙耶、その笑みを見て笑みを返すエルー。

「そうですか、それでも私はサヤに力を使って欲しくありません。・・・・・しかし、こういってもサヤは止まりませんから１つチャンスをくれませんか？」

「なに？」

「5分ください、それ以降はサヤにお任せします。」
「・・・・・・いいよ。でも危険だと思ったらその場で終わらせる。」
「私たちは不老不死なんですから危険なんてありませんよ。」
「私はエルーに傷をつけられて冷静にいられる自信はないよ。」
「はぁ、分かりました。私もサヤにはいつも笑顔でいてもらいたいですから無傷で勝って魅せます。」
沙耶を抱き寄せキスを交わす。
唇を離すと沙耶は満面の笑みを浮かべ、エルーが守るものを実感させる。
「私はエルーをあらゆるものから守るから、エルーは私を支えてね。」
「もちろんです。」
月明かりのもと再びキスを交わし、また1つ新たな約束を交わした。
翌朝、アリスが目を覚ましたということでエルーに見張りを任せ、沙耶は部屋に入る。
「とりあえず無事で何よりだ、早速で悪いがなにがあったか聞かせ

てくれ。」

「あなたの言った通りにセンチュリオン・コアを持っていって触れまわってたらいきなりセンチュリオン・コアをよこせって言ってきたから攻撃したんだけど全然効かなくて一撃で私以外は殺されたわ。あなたから渡されたものでなんとか逃げてこられたけどセンチュリオン・コアまでは回収できなかったわ。」

「分かった。危ない役をやらせてすまなかった。後は私たちが片付けるからそこで休んでいろ。」

そう言って見張りに戻ろうとするとアリスが呼び止める。

「ちょっと待ちなさい、確かにあなたは強いけどほんとにロキに勝てるの？　あいつは滅茶苦茶よ。」

どちらも圧倒的に強すぎる為、どちらが強いのか分からず本当に勝てるのか不安になり呼び止めるが、沙耶はその問いに振り返り一言

「心配するな、絶対に守ってやる。」

そう言うと窓から屋根へと飛び移り、部屋にはアリスとコレットが取り残される。

ｓｉｄｅ　アリス

「な、なによあいつ。」

赤くなった顔を抑えながら沙耶が出ていった窓を見つめる。

「心配しなくても大丈夫だよ。サヤは約束を絶対に破らないから。」

「ふ、ふん。」

初めて会った瞬間に殺されかけた沙耶のことをヴァンガードの敵であったコレットからの発言でありながら不思議と信じられることに自分で驚きながらもどこか安心できていた。

「ねぇ、あいつって何者なの。」

あれだけの力を持っているにもかかわらず、その存在を誰も知らないことに疑問を覚え尋ねる。

「サヤは別の世界から来たって言ってたよ。だからロキって人を倒したら帰っちゃうんだって。」

寂しそうに言うが、常識的に考えてとても信じられない内容だけに疑ってしまうがそう仮定すると誰も知らなかったことやロキの存在を知っていることにも説明がつくため否定はできなかった。

そしてそこまで考えるともうどうでもよくなり怪我は癒えているとはいえ疲れはとれていなかったので沙耶の言葉を信じ再び眠りに就いた。

side out

アリスから話を聞いた後、再び見張りに戻ったが結局その日は現れることはなく次の朝を迎えた。

「エルー、大丈夫？」

肉体的疲労は問題ないが1日中何もせず見張りを続けることは精神的にかなり疲労がたまる為、心配して声をかけるがエルーは何食わぬ顔をしていた。

「これくらい問題ありませんよ。流石にあと3日続けろと言われればつらいですが。」

心身共に逞しくなったエルーに安心するがこのままでは疲弊していくだけなので交代で見張りをすることになった。

「では、少し休ませてもらいます。」

先にエルーが休憩を取ることになり、部屋に入り気分転換の為読書を始めた。

それから数時間後交代となり今度は沙耶が休憩となり部屋へと戻ろうとすると

「来た。」

同じオーディンの欠片を持つ者同士、目には見えずとも近づいてくることが感覚として伝わる。

「エルー、準備はいい？」

「もちろんです。」

愛銃のソルとマニの双銃にそれぞれティルヴィングを込め精神を統一していく。

「行こう、まだ街には入っていないから外で決着をつけよう。」

感情を殺し、精神を研ぎ澄ませた沙耶とエルーはメルトキオの外へと急ぎ、メルトキオから5ｋｍほど離れた場所で対峙した。

「ほぉ、お前からは俺と同じものを感じるな。」

ロキも沙耶と同様、オーディンの欠片を持つ者同士、感覚で理解する。

「1つ聞こう、お前はこの世界に危害を及ぼすつもりか。」

「どこで聞いたかは知らんがよく知っているな。そうだ、俺はこんなところで終わる存在ではない。この世界を取り込みすべての世界を俺が支配する。」

2つのセンチュリオン・コアを持ちながら、まったくその魔力に惑わされず逆に魔力を支配していた。

「そうか、ならもう話すことはない。」

「そうだな、俺も忙しいんだ。消えろ!!」

ロキが指を鳴らすと沙耶とエルーがいた場所で大爆発が起きる。

「さて、あの女を殺しセンチュリオン・コアを集めるとしよう。」

殺し損ねたアリスを殺すため、メルトキオへ向かおうとするロキ。
「どこへ行くつもりですか？」
爆発の煙の中、太陽と月の魔弾がロキをめがけ放たれる。
「どいつもこいつも無駄な時間を取らせおって。」
バルドルのフルオートの防壁が魔弾を遮断する。
「それはこちらのセリフです、こっちは5分しかないんですから早く死んでください。」
言い終わると同時に先程以上の密度と数の魔弾がロキへと放たれる。
「そんなものではバルドルは貫けん。」
バルドルによって魔弾を防ぎながらエルーへと肉薄する。
「そんなこと分かっていますよ。」
「なに？」
ロキを十分引きつけエルーの切り札であるティルヴィングを至近距離から撃つ。
ティルヴィングはバルドルを易々と貫通するがとっさに横へと飛びかわす。
「おしかったですね。」

「おのれ！！」

バルドルを貫かれ激昂しているロキをよそに、余裕を見せるエルー。

「エルー、あと４分だよ。」

「大丈夫です、あと１分で終わりますよ。」

「調子に乗るな！！」

ロキはダーインスレイブを抜き漆黒の剣閃を放つ。
それに対しエルーは月蝕の魔弾を放つがレヴァンティンの第６解放と同レベルの威力に力負けし魔弾は剣閃に飲み込まれるが、魔弾はただの目くらましに過ぎず拮抗している一瞬の間に禁呪を唱える。

「固有制御４倍速」

トップスピードで剣閃を交わし、転々と壁を作り姿をくらましながら魔弾を放ちロキを翻弄する。

「小賢しい！！」

手当り次第に剣閃を放つが、大雑把な攻撃ではエルー捕えることができずエルーから魔弾の反撃を貰ってしまう。

「そんなものは効かん！！」

バルドルの防壁に阻まれ魔弾は通らないがそれでも壁を作りロキから冷静さを失わせる。

エルーの策に嵌ったロキは冷静さをなくし魔弾が放たれた方向へ剣閃を放つがすで移動しているエルーに当たるはずもなく大地に傷跡を残していく。

「そろそろですね。」

残り2分を切り、エルーが魔弾と同時にティルヴィングを撃つ。しかし、ロキの鋭い直感がそれを見抜きバルドルを貫かれながらも回避に成功する。

「残念だったな、どれだけ撃とうがあたりはせん。」

ティルヴィングの威力を思い出し一気に冷静さを取り戻す。

「掛かりましたね。」

しかし、それも含めすべてはエルーの手の中、グレイプニルの為の障害物を翻弄すると見せかけ作り、ティルヴィングでバルドルを貫き一時的に無力化しエルーの策は完璧に成功した。

「なんだこれは！！」

冷静さを失っていたロキは張り巡らされたグレイプニルに気付くことはできなかったが剣閃がグレイプニルを断ち切っていたのでいままでは問題はなかったが、バルドルを無力化され回避に専念していたロキは剣閃を放つこともできずグレイプニルによって捕縛される。

「終わりです。」

捕縛されたロキにソルとマニ、それぞれのティルヴィングを同時に

撃つ。

「なめるなぁぁ！！！！」

大量に出血しながらも力づくでグレイプニルを引きちぎり、ダーインスレイブでティルヴィングを斬り伏せるが、左腕を肩から消し飛ばされる。

「うぉおぉおお！！！！」

左腕を消し飛ばされた激痛から咆哮のような叫びをあげる。

「そろそろ時間なので今度こそ死んでください。」

感情を殺した瞳でソルとマニをロキへと向け引き金を引こうとした時

「スキーズブラズニル！！！！！」

レヴァンティンの第7解放と互角の戦いを繰り広げた戦艦を呼び寄せ転移する。

「死ね！！！！」

スキーズブラズニルから魔砲が放たれ、ギムレーで防ごうとした時紅蓮の炎が魔砲を相殺する。

「私の5分を終わりましたので、あとは頼みますよティアさん。」

「OK、あとは任せて。」

紅蓮の翼をはばたかせティアが再びロキと対峙する。

第３２話

「ティアさん、傷１つでもつけられたらサヤが終わらせてしまいますので絶対に無傷で勝ってください。ちなみに制限時間は５分です。いいですよねサヤ。」

「駄目って言っても聞かないんでしょ、ティア、エルーの言った条件を守るならあと５分だけ待ってやる。」

「ちょっと条件厳しすぎない？」

「私はその条件で片腕吹き飛ばしましたよ。」

「はは・・・・ＯＫ、あいつとは私が決着をつけたかったんだ。」

空に浮かぶ戦艦からの攻撃が降り注ぐ中、攻撃を相殺しながら会話を交わす。

「エルー、半径２ｋｍにギムレーの結界を張って、ユミルで結界を補強する。」

「分かりました。」

ギムレーを地面に突き刺し沙耶の注文通りの結界を張り、沙耶がユミルを展開し結界を補強する。

「ティア、遠慮はいらない全力でやれ。」

「結界大丈夫なの？　これなら第８解放は耐えられると思うけど全

解放は厳しいんじゃない。」

「直接結界にあたる部分は私が消す、いくらレヴァンティンの全解放でも余波だけなら大丈夫だ。」

１つ１つが街を廃墟に変える威力を持つユミルに沙耶たちの持つ魔具の中で最強の防御力を誇るギムレーを全力で防御に専念しようやく余波を防ぐことができるレヴァンティンの全解放。

「それなら遠慮はいらないね、ふふっ、まさかレヴァンティンを全力で使うなんて思わなかったよ。」

センチュリオン・コアにより強化されたスキーズブラズニルを見据え、静かに目を閉じ初めてレヴァンティンを抜いた時の誓いを思い出す。

そして友の為に振るうと誓った魔剣の名を呼ぶ。

「蒼炎に輝け、レヴァンティン。シンモラの錠全解放。」

紅蓮に染まっていたレヴァンティンは淡い蒼に輝き結界内を焼き尽くす。

その尋常ではない魔力量にロキはスキーズブラズニルの砲撃に加えダーインスレイブの剣閃を放つがティアに触れる前に蒼炎によって焼き尽くされる。

「これがサヤとエルーが作ってくれたレヴァンティンの本当の力・・・・」

ティアの特異体質を持ってさえも意識的に支配しようとしないと瞬く間に世界全てを焼きつくそうとする蒼炎。

「おのれ！　おのれ！！！　おのれ！！！！　おのれぇぇ！！！！！！」

どれだけ攻撃しようともそこにいるだけのティアになに1つとして傷1つ負わせることができない。

「サヤ、エルー、あの時の誓いは必ず守るよ。」

「当然だ。」

「もちろんです。」

本当に当たり前のように即答してくれる親友たち、そしてその信頼に応えようと9つの世界を焼き尽くしラグナロクを終焉に導いた魔剣の名を冠する2人の親友より授かった最強の魔剣が輝きを増す。

「消えろォォ！！！！！」

ロキが咆哮上げながらスキーズブラズニルのすべてを一斉射撃する。

「焼き尽くせ、レヴァンティン！！！！」

一斉射撃に相対するはレヴァンティンに込められた全魔力が収束された蒼く輝く大斬撃。
その威力は一斉射撃など何の障害のもならず掻き消しスキーズブラズニルごとロキを焼き尽くす。
大斬撃がスキーズブラズニルを飲み込み結界をも焼き切ろうとしたとき沙耶が力を使い問答無用で鎮火させた。

「終わりましたね。」

「うん。」

どこまでも自分のことを想ってくれる仲間たちに感謝しながら結界を解き、沙耶の旅は終わりを告げた。

「そういえばティア、レインはどうした？」

空から降りてきたティアに尋ねる。

「レインならもうすぐ来ると思うよ、私はサヤたちが戦ってるみたいだったから先にきたんだ。」

「そうか、もう少しこの世界でやることがあるから向こうに戻るのはあと2，3日待ってくれ。」

沙耶が言っているやることとはロイドとの約束通り目的を果たし必要なくなったセンチュリオン・コアを渡すことだが特に説明する必要もないので適当に流す。

「ティア～」

そうしている内にレインがエミルたち一緒に走ってくる。

「あっ、サヤさん、エルー。2人がいるってことはもうあいつ倒し

たってこと。」

「うん。サヤの力を使うことなく倒せたよ。」

「それは良かった。」

既に目的を果たし正体を隠す必要がなくなったティアとレインは沙耶とエルーに普段通りに接しているがそれを知らないエミルたちが驚きながらその姿を見ていた。

「ティア、レイン、2人はそいつらの仲間だったの!?」

「もう隠す必要はないから言うけど私とティアはセンチュリオン・コアを集める為にあなたたちと一緒にいただけだよ。」

「そういうわけだ、まぁ、もうセンチュリオン・コアは必要ないがな。」

沙耶は普段通りに振舞っているがエルーが再びエミルたちを殺そうとするかもしれないので内心冷や冷やしていた。

「それならセンチュリオン・コアを渡しなさいよ!!」

「断る。先客がいるんでな。」

熱くなっているマルタを軽く足らいメルトキオへと戻ろうとする。慌てて追いかけようとするエミルたちの前に氷柱が突き刺さり進行を強制的に止められる。

「次は当てるよ。」

沙耶たち4人が1人でもその力を振るえばエミルたちは瞬時に殺されること嫌というほど思い知らされているエミルたちはそれ以上進むことができず足を止めてしまう。

「サヤ～」

メルトキオへと足を進もうとした時、コレットがリヒター、アリスを連れサヤのもとへと駆け寄ってくる。

「来るなといっただろう。」

「ごめんね、でも心配になっちゃって、それにリヒターさんがセンチュリオン・コアを取って来てくれたよ。」

「約束は果たしてもらうぞ。」

「ああ、好きにやっていいぞ。」

雷のセンチュリオン・コアを受け取りリヒターはエミルたちの方へと足を進める。

「お前はもういいのか？」

「おかげ様で、しかしほんとにあいつを倒したのね。」

エミルたちはコレットやリヒター、アリスといったメンバーがこの場に出てきたことによりさらに混乱してしまう。

「ねぇサヤ、マルタのことどうにかならないかな。」

「悪いがあいつとの約束だ、私は邪魔しない。」
「サヤさん、マルタってことはラタトクス狙いなんですか？」
「ああ、それがどうかしたのか？」
「確証はないんですけど、ラタトスクはエミルですよ。」
「それはどういうことだ！？」
レインの言葉にリヒターが反応し足を止める。
沙耶が軽く首を振るとレインが仮説を話し始め、他に心当たりがあるのか納得し再びエミルたちのもとへ足を進める。
エミルは混乱の中さらに自分の正体のことを指摘されさらなる混乱を導く。
「ちなみに血の粛清はヴァンガードの自作自演だ。それはこいつが証明してくれる。」
「血の粛清はヴァンガードの不満分子を消すための自作自演よ、まぁ、復讐したいと言っても既にヴァンガードは壊滅してるけど。」
沙耶の説明を補足するようにアリスが真実を話す。
次々と明かされる真実に混乱の極みに達する。
そして真実を伝えられショックで膝をついているエミルにリヒターが剣を振りかざす。
「アステルの仇だ、死ねラタトスク。」

「待て！！」

剣を振り下ろそうとするリヒターの上からロイドが現れ剣を弾く。

「ラタトスクを殺させるわけにはいかない。」

ロイドがリヒターとエミルの間に立ちふさがる。

「っち、邪魔をするな！！」

奇襲で剣を弾かれたリヒターではロイドに敵わず距離を取る。

「ロイドか、約束通りセンチュリオン・コアは渡してやる。」

沙耶がたちが所持していた風、火、地、雷のセンチュリオン・コアを投げ渡す。

「さて、これで用事は済んだが、ロイド、お前はどういうつもりなのか知らんがこれ以上コレットを無視し続けるようでは私にも考えがあるぞ。」

「へ～、あのサヤがここまでするってかなりのお気に入りみたいだね。」

名前だけでなく沙耶がここまで世話を焼く姿に驚きながらも成長を喜ぶティア。

「分かった。その代わりこの場は引いてくれないか？」

無言でリヒターをみるとこの場ではエミルを仕留められないと剣を

収める。

「いいだろう。」

「待って、その話私も聞いてもかまわないかしら。」

ロイドと共に去ろうとする沙耶をリフィルが呼び止める。

「どうするロイド？」

「分かった、エミルたちも来てくれ。すべて話す。」

今度こそ話しがまとまりメルトキオへと足を進めた。

第３３話（前書き）

投げやりな最終回です

第３３話

「なるほど。」

再生の旅の同行者、ゼロス・ワインダーの屋敷の一室で沙耶たち４人、再生の旅の同行者１人を除く７人、ヴァンガードの残党であるアリス、リヒターが集まりロイドの話を聞き沙耶が事情を察し一言つぶやく。

「つまり、簡潔に説明すると魔物同士のネットワークを持つラタトスクに世界樹の名を知られてはいけなかったから１人で行動していたと。」

「ああ、もちろん皆がしゃべるとは思っていないがセンチュリオン・コアがあれば意思とは関係なくしゃべらせることができる。サヤには前に行ったが俺は世界樹の加護があるから惑わされることはないが皆は違うだからこそセンチュリオン・コアを回収する必要があったんだ。」

「それは分かった。だがなぜラタトスクを殺さない？　ラタトスクはそいつだろう、今は大丈夫かもしれないがいつ襲いかかってきても不思議じゃなないはずだ。」

「それはラタトスクが魔界への門を守る精霊だからだ、ラタトスクが死ねば魔界への門は開かれ世界は滅びる。」

「それならどうするつもりだ？　ラタトスクは殺せない、しかし生かしておくには危険すぎる。」

「ラタトスク・コアにして、封じ込める。これはできれば最後の手段にしたい。エミルはラタトスクとはいえ1つの人格でありラタトスクの良心だ、エミルとラタトスクの意識を1つにして門を守って欲しい。」

ここまで話すとこの話の中心であるエミルの方へと目を向ける。

「僕はマルタや皆がいるこの世界を守りたい。」

「そう言うことだがお前はどうするつもりだ？」

エミルの意思を聞き終わると次はリヒターへと話しを振る。

「エミルの意思がどうであろうと俺の意思は変わらない、ラタトスクを殺しクルシスの輝石を使い命を永久化、そして封魔の石により命をマナに変え門を守る為の人柱となる。」

「アフターサービスだラタトスクがどうであろうと最終的には私が門を破壊してやる。だからどっちが勝とうが結果は同じだ。」

沙耶の言葉を信じられないといった表情で見るがエルーたちやコレットだけは微塵の疑いも持っていない。

「信じる信じないは勝手だ、私は近いうちに元の世界へと帰る。だから明日までに決めておけ。」

そう言い残すと沙耶たち4人とコレットは屋敷から出た。

「サヤ、もう帰っちゃうんだよね。」

ついてきたコレットがぽつりと心の内を漏らす。

「ああ、だがまた必ず会いに行く。だからそんな顔をするな。」

目に涙を浮かべながら沙耶の言葉に頷く。

「コレット、これはプレゼントだ。」

そう言って取り出したものは闘技場で優勝した時に賞品として貰った腕輪だった。

「お前はこれからもたくさんの人を助けるんだろう。その時に癒しの力を持っていないと不便だからな、これを使えばある程度怪我や病気は癒せるはずだ。」

「うん、ありがとうサヤ。」

コレットが泣きながら沙耶を抱きしめる。

「コレットはずっとそのまま真っ直ぐでいろ、なにがあっても曲がるな。何かあったら私を呼べすぐに駆けつけてやる。」

コレットの背中に手を回し抱きとめる。

ｓｉｄｅ　エルー&ティア

「エルー、あれは許しいいの？　前私があれやったら殺されかけたんだけど。」

少し離れた場所から見ていたティアが独占欲の強いエルーを恐る恐る見ながら尋ねる。

「いいんですよ、コレットさんには既に想い人がいますし、なによりサヤの友達ですから。」

「ふ～ん。でも私はちょっと嫉妬するかな、サヤの友達は私とレインだけと思ってたから。」

「ふふっ、大丈夫ですよ。サヤは私たちのことを家族のように思っていますから。」

「家族か・・・。そうだね、それじゃあサヤは私の妹になるのかな？」

「それを聞いたらサヤは絶対に姉と答えそうですね。」

「それじゃあもうしばらくお姉さんの成長を見守りますか。」

それからしばらく沙耶のことを暖かく見守っていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

しならくして泣きやんだコレットが沙耶から離れ、満面の笑みを浮かべ

「ありがとうサヤ、私サヤと友達になれてよかった。」

そう言った瞬間、世界が白に染まる。

「ご苦労様です。これでこの世界も安心でしょう。」

沙耶たちをこの世界へ送り込んだ世界の管理者が沙耶たち４人とコレットを空間へと呼びこむ。

「本来ならいますぐにでも殺してやりたいところだがコレットに免じて許してやる。」

「それはありがとうございます。」

相変わらずどこまでが本気なのか分からない口調で言う。

「もう元の世界へと還すことはできますが、どうしますか？」

「あと2，3日待ってくれ、それとここに来る前に報酬をもらえると言ったな。」

「はい、何か欲しい物でもありましたか？」

「この世界と元の世界の移動を自由にできるようにしろ。」

「それならお安いご用です、これを持って私のことを呼べばいつでも転移できます。」

沙耶の手に白い珠が置かれる。

「それでは私はこれで失礼します。」

白い空間にひびが入り、先ほどまでいた空間へと戻っていた。

「これでいつでも来れるようになった、約束は果たしたぞコレット。」

「うん。」

再び沙耶を抱きしめ、喜びを表現する。

「いちいち抱きつくな。」

拘束から逃げようとする沙耶を逃がさないように抱きしめ、エルーたちが止めるまでじゃれあっていた。

後日談

翌日、エミルとリヒターが戦いエミルが勝利しリヒターは復讐を諦め旅に出た。

そしてエミルは自分の中のラタトスクと戦い勝利しセンチュリオン・コアをすべて目覚めさせ世界の異常気象を元に戻し魔界への扉を守っている。

世界再生の旅の同行者一行は再びそれぞれのやるべきことを再開し解散となり、ロイドとコレットは2人でエクスフィア回収の旅へと

旅立って行った。
アリスは思うところがあったのかヴァンガードの残党をまとめ上げ
シルヴァラントとテセアラの差別問題に取り組んでいた。
そして沙耶たちは

「ティア、レイン、朝食できたぞ。」

沙耶が呼ぶと４人で食卓を囲み食べ始める。

「今日から新学期か、勉強面倒だな～。」

「そんなこと言ってると、またテストの時苦労しますよ。」

「サヤさん、まだ転科しちゃいけないんですか。」

「そうだな・・・・いいだろう、その代わり鍛錬は怠るなよ。」

「はい！！　ティア、やっと学校でも一緒に入れるよ！！」

「うわ！！　分かったから食べてるときに抱きついてこないで。」

「レインさんも大胆になりましたね、サヤももう少し素直になりませんか？」

「は、恥ずかしい。」

「あんなに体を重ねたのに、サヤの恥ずかしがり屋は筋金入りですね。」

「そういうことを２人の時以外で言わないで！！」

「サヤも大変だね。」

「分かってくれるのはお前だけだティア。」

「お互い大変な相手に惚れちゃったね。」

「もうティアったらサヤさんたちの前でそんな熱烈に告白しないでも・・・・」

「レイン、お願いだからもう少し自重して。」

「もうこんな時間ですか、そろそろ行かないと間に合いませんね。」

「ほんとだ、2人とも皿は浸けといてくれ。それといちゃつくのは構わないが遅刻はするなよ。」

「待ってよサヤ！！」

「ティア、早く！！」

「えっ、レインもう食べ終わったの！！」

「うん。」

「先に行くぞ。」

「待って！！　ごちそうさま。だから先に行かないでよ！！」

沙耶たちはいつも通りの生活に戻り、新学期を迎えていた。

還ってきてもあまり時間は経っておらず誰も騒ぎたることもなく、次の日からも学園長の指導を受け魔法の実力もあげていた。

「そういえば明日また行くの？」

「ああ、世界の管理者のおかげで時間軸をこっちと同じ時間にいけるようなったからな。それに週に1回は顔を出してやらないとコレットが寂しがる。」

「へ～、ちゃんと友達続けてるんだ。それならもう少し学園の方でも愛想よくすればいいのに。」

「これでも十分妥協しているつもりだ。それよりレインやティアもときどき向こうに行ってるよな。」

「はい、リフィルさんとなんだかんだで意気投合してときどきは話しに行きます。」

「私はロイドから紹介してもらったドワーフに技術を教えて貰うためだよ。エルーはそういうのないの？」

「私ですか、私はサヤについて行ったついでにロイドさんに女心を叩きこんでいます。あの人はコレットさんに対する態度が全く駄目ですから。」

「だから私たちが来るたびロイドの顔が引きつってたんだ。」

「エルー、それ私にも教えて。」

「だ、駄目だよレイン、これ以上エルーに教わったら私が力尽きち

ゃうよ！！」

「そういえば最近よくやってるな。」

「気付いてたの！！」

「不自然に音が聞こえなければ誰でも気付く、それに結界が張られていればそれだけでも分かるからな。」

「そう言われれば最近私たちはやってませんね、サヤ、早速ですが今夜しましょう。」

「エルー！！　だからそういうことは2人の時に言ってよ！！　それに最近って一昨日したばかりでしょ！！」

「一昨日はすぐにサヤが気絶しましたからノーカウントです。それにサヤはツンデレですから口ではそういっても本心では愛されたいはずです。」

「そ、そんなこと！！」

「本当ですか。」

「うっ・・・・・あっ・・・」

「あれって最早洗脳の域だよね。」

「ティアもエルーみたいに私を染めていいのに。」

「サヤ！！　早く行かないと遅刻するよ！！」

「はっ！！　そうだよエルー、速く行かないと！！」

「もう少しだったんですが、仕方ありません。今夜しっかりと調ｋｙ、教えるとしましょう。」

「エルー！！　さっき調教って言おとした！！」

「そんなわけないじゃないですか。」

「私もティアを調教すれば・・・・」

「レイン、お願いだからこれ以上エルーに影響されないで。」

「とにかく早く学園に行こう！！」

「分かりました。」

「ＯＫ。」

「はい。」

こうして平和な日常を謳歌し行く沙耶たちであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1102p/

テイルズオブシンフォニア　ラタトスクの騎士と『死』を断定する少女

2011年1月17日16時34分発行